うすごうりにごる。

中々にたゞよふも亦おもしろし
　月の前ゆく空のうき雲

思ひかね妹がりゆけば冬の夜の
　川風寒み千鳥鳴くなり

世の中は何方かさしてやどならむ
　行とまるをぞかぎりと思はむ

下谷千束町三丁目十番地
御徒町二丁目二十五番地

あらもの屋
竹内　龍吉

塵中日記（二十六年十月）

今是集

いみじくおこたりにける哉此日記よ、今日いくかしるさゞりけむ、家のうちのことよの中のこと一時として静にあるべきかは、目になれ耳に聞えけるものしたがいておもひに成ぬるいとさわなれどこれをしも今しるさむとすればわづらはしさの堪え難きをいかゞはせむ、いざゝらば昨日の我に耻づる身ながらこりずまに今日是とみる所をしるさまし。

十月九日　晴れ。此二日より晴雨とも日々圖書館にかよいて暮しけるが今日はえゆかで奥なる一間にこもりて書をよむ、店は昨日一昨日よりうれ高いと多く成りて邦子のいそがしきこと起居ひまなし、さるは近き處にもとより有ける家の我家にうりまけて店をとゞけるが二軒あるよしに聞けばそれが爲なるにや、さしもきそひ心などの有るにも非ず、おのづからにまかせて商ふものから店をあづかる國子に運といふものあ

ればなるべし。

十日　晴れ。早朝神田へかひ出しにゆく、一昨日かい來たりし半箱の風船の昨日中にうれ切れに成りしかば、さらに一箱もとめになり。

塵中百首

樋口夏

秋朝

秋ふかく成にけらしな朝日かげ
はれたる空もさびしかりけり

秋夕

村がらす寢にかへりゆくこゑすなり
あなみじかゝる秋の一ひや

秋夕雲

紅葉のうへのみならで夕日かげ
うつろふ雲もくれなゐにして

野徑秋夕

鶉なく聲もきこえて花すゝき
まねく野末の夕べさびしも

水郷秋夕

舟うたの聲うら淋しかり寢する
淀の渡りの秋の夕暮

遠村秋夕

遠ざかるこゝちこそすれ夕ぎりの
いや隔ゆく山もとのさと

山家秋夕

おもひすてゝ入ぬる山のかひぞなき
秋の夕べは袖のぬれつゝ

閑居秋月

花薄まねく人さへなかりけり

あはれ淋しき宿の夕暮

秋夜

夜はながく成にける哉花がたみ
おさなきめさへさめがちにして

秋夜雨

いつのまに降出ぬらむさよ更て
むしの音しめるにはの村雨

秋野

岐もなく成にける哉八千種の
野はいろ〳〵の花にうもれて

秋野露

淺ぢふの小野のしの原しら露を
玉とちらして夕風ぞふく

秋海

わだの原けぶりたてゆく大ふねの
別れやいかに秋の夕ぐれ

秋里

からごろも打おとさへも高やすの
さとの寢覺やさびしかるらむ

稲葉風

春がすみ立別れしはいつならん
いなばの風に雁のねぞする

鶯花契我春

契るらんいく萬代の春かけて
みそのゝ梅に鶯の聲

よろづよを契りかはして梅の花
かをればうたふそのゝ鶯

鶯の聲の春さへのどかなり

よろづよにほふそのゝ梅がえ

十一日　晴れ。今日は一日机邊にあり。

十二日　曇り。今日も多町に風船のかひ出しをなす、午後より雨ふる。

十三日　雨。議會召集令出る、十一月二十五日。

十四日　おなじく。

十五日　風雨はげし。岡山徳島洪水の報いたる。

十六日　雨。朝日新聞社員横川勇次君占守より歸京、明十七日より北海の實況紙上にあらはるゝよしに聞く。

兒ちとせ

過去無數の諸佛にもすてられたるをばいかにせむ、
現在十方の淨土にも往生すべき望みなし、
たとへ罪業おもくとも引接し給へみだぼとけ、

今一人の子

尋ぬべき君ならませばつげてまし

いりぬる山の名をばそれとも

一相馬事件いつあきらかに成るべきにや、墓地發掘、死體解剖など漸く歩をすゝめて今は殘る所あるまじとおぼゆれど、すべて秘密を旨とすれば何事もまだ五里の霧中なり、さるが上に又井戸川忠とか呼べるはんじの新訴狀を奉りたるさへあるやにきく、斯していつはつべきにや。

一密獵のごと去歳よりことしは多しと聞く、又來るとしはいかなるべきにや。

一伊藤勇吉君きすいえて參内、御禮申上ぬるよし。

一しかご博覽會日本品好評のよし。

一かしましかるべきものよ又ことしの議會。

一あさましきもの　月日にそひゆくわいろ沙汰。

一巣鴨の某の町なる車夫名はわすれしが老父に孝なるをもて官より黄綬章をたまふ。

一後藤大臣及び齋藤次官の前途いかならむとすらむ、かの取引所條例の通過に際し密に内議にあづかりたりとのこと斗らずも改進新聞對星亭誹毀事件の公判より世にあらはれそめしかば朝野の一問題と成ぬるをや、第五議會の開設も近づきぬる今日此

頃。

十七日　大雨。岐阜、岡山及び各府縣の暴風雨のさた聞くもすさまし。

十八日　雨やうやくやむ。午後西村母君來訪、釧之助に緣談とゝのひぬるよし。

十九日

二十日　母君小石川によろこび持參。

二十一日　今日はにし村が婚禮なり。

二十四日　雨。相馬家事件局面一變、順胤君はじめ被告一同無罪被免、原告錦織夫妻辯護士岡野寛及び山口豫審判事拘引せらる。

二十五日　晴れ。午前神田にかい出しをなす、午後平田禿木子來訪、來月の文學界にかならず寄書なすべきよしを約す、七月以來はじめて文海の客にあふいとうれし、旅宿は日ぐらしのさと花見寺の隣家にて妙隆寺とかいへるよし、此夜田邊査官來訪、貧民救助の事につきてはなしあり、緣談の事申來る。

二十六日　雨。

此ほどしるすべきことなし。

三十一日　文學界十号及び五号以下を送らる。

十一月一日　晴れ。多町にかひ出しをなす。

二日　久保木姉君來訪、金子の事たのむ。

三日　晴天。皇運萬歳。

四日　圖書館に書物みる、本日平田君より書狀來る、久保木より秀太郎金子持參、金五圓なり。

五日　多町にかい出し、さくら香より小間物仕入る。

六日　圖書館にゆく、本日より十二日まで虫ぼしの爲閉館のよしやむを得ずかへる今日もかい出し多し。

七日　晴れ。

八日　薄ぐもり。今日は初酉なりとて例の通り市どもたつ、日くれ前少し人の出はげしかるべき頃より雨ふり出づ、周章狼狽といふの外なし。おもはぬ儲は馬車、人力、飲食店、かさやなどなり。

九日　晴れ。多町にかひ出し。

十日　はれ。

十三日　山梨より廣瀨來る、例の訴訟事件にてなり、今宵我家に一泊。

十四日　はれ、初霜しろし。

日暮里花見寺の隣

妙隆寺内

平田禿木

千束町二丁目二十五番地

廣瀨伊三郎

北かく全盛みはたせば
いつもにぎはふ五丁町
春は櫻を植ならべ
毎日毎晩客の山
三味せん太このたえまなく

軒は提灯電氣燈
むかしにかはらぬ別世界
秋は燈籠に初にわか
日曜旗日は猶のこと
シャン〳〵〳〵の手をそろい

これも勉強するが爲
全盛じや〳〵愉快じや〳〵

勉強するのもさとの爲
萬歲〳〵萬々歲

男仁和賀福島中佐の内
全盛歌

麹町元ぞの町一丁目十八番地
ストロング　長生堂
定價十錢郵劵代用一割まし
外に郵送料二錢

塵中日記　（二十六年十一月）

人しらぬ花もこそさけいざゝらば
　なほ分け入らむはるのやま道
わだつみの沖にうかべる大ふねの
　何方までゆくおもひ成らむ
さとれば去此不遠、
まよへば十萬億土、
　雲まよふ夕べの空に月はあれど
　おぼつかなしやみち暗くして
有無ふたつなし一切無量、
　花ちらすかぜのやどりも何かとはむ
　ながれにまかす谷川のみづ

十一月十五日　師君を小石川にとふ、七月の十九日に別れけるより今日をはじめて

也、かたみにいはんとする事多かり、思ひせまりては涙さへさしぐみてとみには詞も出ず、およそ半としがほどにかはりけるよの中のさまゝを正木のかづら散々にかひつゞくれば、

水野せむ子ぬし會津侯に嫁せられたる、
龍子ぬしの子うみたる、女子にてしかもすこやかに大きなる子のよし、
中村禮子ぬしのつまをむかへて又さりたる、師君が養子を呼たる、大野さだ子のうせける、加藤のつまの足痛になやむなる、
　猶社中にあたらしき弟子のましたるなど種々多かるが中に、舊に依て舊にことならざるは稽古の土曜日なる、日の短長を問はず二題四首詠、花にたはぶれ月をもて遊びうきよはよしや浪たゝばたて風ふかばふけ枕言葉に風情をやしなひ、野川の名處に文學のたらざるをおぎなふ仙人界のゝどやかなる、さては梅のや、くちなし園がをかしきなからひなどのみぞことなりたる處もなきや。
　もとよりせまからざる家の又去年にことしとたてそへたる室どもかぞふれば十にも

ちかゝるべし、庭はたくだが手を盡くし、家の内のかざりにこがねををしまねば物しゝのひてたらざる處もなし、身は今のよの女傑とたゝへられて、ふるびたる門表にさへ光りある如く、出入くろぬり車につかれをしらず、あやにしきはつんでくらにみつべし、今日は式部長官鍋島侯のもとに祝宴ありとて冬の月よのすさまじからぬほどによそほひをこらせば、こし元はした右左に助けて衣裳つけおごそか也、入てはうやまはれ出ては尊とばれ、かくて天年を終りたまはむには、かしつぎの小枝さへさだまり給へり、何事の思ひあらじとおもふを、猶述懷の詞にいはく、あはれ何方の野にまれ山にまれわたり尺なる金剛石一つほり出してし哉、我世を終るまでの財とぼしからず持たらんには、うきよを毀譽の外にのがれてこゝろのどかに送りぬべきものを、よに交はればこゝろのほかのへつらひも言はざるべからず、おもひのほかの仕わざをもなすべし、今年二十若からんにはあらん限り力を盡しあらんかぎりの樂をなしたりとも老ての樂をこゝろがくべけれど、今さらの齢の末に我力もてわがよをのどかにと願ふとも及ぶべきに非ず、あはれ慾ならねども尺の金剛石は得まほしきぞかしとの給へり、

三寸の舌にきよを出してしかも浮よのきよをば厭ひ給へり、何故ぞこゝろの中の金剛石をすて、さのみ野山にもとめ給ふらむ、これをみがゝばまづしき人をとめる人にいたし、にごりたる身を清らかにもなすべし、たとふるに塵世はくされたるくつの如きか、これが取捨はすべて我こゝろのまゝならずや、有財無財何のかゝはりかあらむ、さるも猶すてがたしとあるはそもやうきよの風情にて、かくてぞ戀を出し、迷ひを出し、義理とからみ、欲となづけ、五十歳を苦樂のちまたにさまよわすなれ、おもへば塵中又をかしからずや。

椽に出て見れば黄白のきくにほひこまやかに、露にぬれたるけしきもなつかし、我も昔しはこゝに朝夕をたちならして一度はこゝの娘と呼ばるゝ斗、はては此庭もまがきも我がしめゆひぬべきゆかりもありしを、今はた小家がちのむさ〳〵しき町にかたゐ乞食など樣の人を友として厘をあらそひ毛を論じてはてもなき日を過すらむよ、家にありてはさりともおぼえざりし惑の此處の景色にもよふされてにや、何故とはしらず涙さへさしぐまるゝよ。

さて何故の涙なるらむ、かくあやにしきのよを經んとならばあながちにくるしみも

だへずして過されぬべき一生を我から落て流れゆきし今日、滿足の笑みに物おもひあらざるべきをあなものぐるほしや、我れにこゝろ二つあるか、もしはこゝろに眞僞あるか、こゝろにむかひてこゝろの僞をいふか。

こゝろにいつはりなし、はた又こゝろはうごくものにあらず、うごくものは情なり、此涙も此笑みも心の底より出しものならで、情に動かされて、情のかたち也。

師は我が訪ひしを喜びて、とみには行くべき處に出でもやらず、何くれかくれもの語に時のうつるをゝしみ、我も又たち別るべき方を忘れて今しばし〳〵と語る、此中に紙一枚の隔てもなく、師は誠に慈愛深き師也、弟子は誠に溫良の弟子也。

かつて浮薄の徒とのゝしり、僞賢の人とうしろ指さしたる師は何方あげたりけん、をしへにもとり我身をたつる不良の子とあざみし弟子は何方にさりけん、

たとへば魚の水における如く、何故ともしらず愉々快々に半日を暮しぬ、此間のこゝろいにし半井ぬしを訪へる時のおもひにおなじ。

げにや花はさかりに月はくまなきをのみめづるものにあらず、ひとへに相見るをのみ戀といふかは、谷間の水の下にしのび、高峯の花の折られねばこそもだえ〳〵てお

もひはますらめ、たとへば芝居に遊ぶ日の見たらん後は見ぬ前にまさりやはする、いにしへ人のいはゆる苦は樂の種ならずして苦中の奥が則樂也。

あらゆるうきよをつまはじきせしも僞り、あらゆるうきよに爪はじきせられしも僞り、おもへば此戀の誠をしらざりしなり、うきよ行く處として善人なからむ、はた又惡人なからむ、萬人が萬人に對しての處爲はしらず、我が見るめひとつにては何方いかなる處にも至美至善なる人はあるべし、我が滿足を得んと思はゞつねに滿足ならぬほどになしたるぞよき、滿足の上に滿足あらんやは、もちの夜くもりて月もかくるゝならひぞかし。

十六日　雨。圖書館にゆく。

十七日　はれ。

十八日　はれ。禿木子來訪、文界の事につきてはなし多し。

十九日　はれ。神田にかひ出しす、明日は二の酉なれば店の用事いそがはし。

文學界に出すべきものもいまだまとまらざる上に、昨日今日は商用いとせわしくわづらはしさたえ難し。

二の酉のにぎはひは此近年おぼえぬ景氣といへり、熊手、かねもち、大がしらをはじめ延喜物うる家の大方うれ切れにならざるもなく、十二時過る頃には出店さへ少なく成ぬとぞ、廓内のにぎはひおしてしるべし。

よの中に人のなさけのなかりせば
ものゝあはれはしらざらましを

二十一日　晴れ。

二十二日　おなじく。

二十三日　星野子より文學界の投稿うながし來る、いまだまとまらずして今兩日は夜すがら起居たり。

二十四日　終日つとめて猶ならず、又夜と共にす、女子の胸はいとよはきもの哉、二日二夜がほど露ねぶらざりけるにまなこはいとゞさえて氣はいよ〳〵澄行ものから筆とりて何事をかゝんおもふことはたゞ雲の中を分くる樣にあやしうひとつ處をのみ行かへるよ、いかで明日までにつゞり終らばや、これならずんば死すともやめじと只案じに案ず、かくて二更のかねの聲も聞えぬ、氣はいよ〳〵澄ゆきぬ、さし入る月の

かげは霜にけぶりて朦々朧々たるけしき誠に深夜の風情めにせまりてまなこはいとゞさえゆきぬ、かくても文辭は筆にのぼらずとかくして一番どりの聲もきこゑぬ、大路ゆく車の音きこえ初ぬ、こゝろはいよ〳〵せはしく成てあれよりこれに移りこれよりあれにうつり、筆はさらに動かんともせず、かくて明けゆく夜半もしるく、向ひなる家となりなどにて戸あくる音、水くむなどきこえ初るまゝに唯雲の中に引入るゝ如く成て、ねるともなくしばしふしたり。

二十五日　はれ。霜いとふかき朝にてふとみれば初雪ふりたる樣也、ねぶりけるは一時計成けん、今朝は又金杉に菓子おろしにゆく、寒さものに似ざりき、しばしにてもたましゐをやすめたればにや、今日は筆のやすらかに取れて午前の内に淸書を終りぬ、郵書になして星野子におくりしは一時頃成しか。

午後禿木子にはがき出す。

菊池隆直殿參らる、隆一君が一周の祭なりとてむしもの到來、廿六日にとて母君を招く。

廿六日　晴れ。寒し、今朝洲崎辨天町火あり、夜の三時頃よりと聞えしかば過半は

やけうせしなるべし、母君正午時より家を出給ふ、留守上野君來訪、あはれなるけしきなり。

廿七日　晴れ。天知子より狀來る、一兩日中に來訪あるべきよしなり。

廿八日　はれ。國子吉田君を訪ふ、野々宮君のことにつきて悲慘のはなしあり、今日前なる家より小兒の誕生日也とて赤飯送らる、いはゐもの持參。

廿九日　晴れ。禿木子より狀來る、歌あり、

音にきくさとのほとりに來てみれば
うべこゝろある人はすみけり

とやありし、天知子よりの文は詞のたくみあり、ものなれ顏にさら〳〵としたるものからいひもてゆけば事好みたらむ樣にもみゆめる、禿木子のはまだわかくやはらかく愛敬ありてとゝのはざるしも末たのもしき樣也。今宵くに子と共に吉原神社の緣日みる、例の歌うたひが美音をきく。

三十日　雨。

十二月一日　晴れ。文學界十一号來る、花圃女が文章めづらしくみえたり、山の井

勾當がことを書しなるが文辭いたく老成になりてこゝ疵とみゆる處もなくとゝのひゆきぬ、今の世に多からぬ女文學者の中この人などやときは木のたぐひには後のよまで傳はりぬべきなめり、おのづから家の筋人ざまなどもうちあひて。

孤蝶子がさかわ川、無聲が哀緣などをかしき物なり、哀緣はおきてさかわ川はいん文といふべき物にもあらず、五七の調にてうたふべき樣にもあり、淨るりに似て散文體にもあり、今一息と見えたり。

いひふるしたるみじか歌の月花をはなれて今のよの開けゆく文物にともなひ難きあまり新體などいふも出くめり、もとよりさえかしこく學ひろき人々がものすのなめれど、猶わかう人が手になれるは好みにかくよりすきにへんしてあやしうこと樣のものになれるもあり、よに人の指さしわらふもげにと覺ゆることなきにしもあらず、さりとてみそひと文字の古體にしたがひて汽車汽船の便あるよにひとりうしぐるまゆるゆるとのみあるべきにあらず、いかで天地の自然をもととして變化の理にしたがひ、風雲のとらへがたき、人事のさま〳〵なる三寸の筆の上に呼出してしがな、さはいへかくおもふは我人共の願ひなるべけれどそは天才といふ人の世に出ざるかぎり成りたつ

まじきものなるにや、俗中に風流ある風流のうちに大俗あり、新たい詩歌の俗の樣に覺えて、かのみぢか歌のみやびやかに聞ゆるはならはしのみのしかるにあらず、人の心に入て人の誠をうたいしかも開けゆくよの觀念にともなはざれば也、詞はひたすら俗をまねびたりとも氣いん高からばおのづから調たかく聞えぬべし、さても學び易くしてうたひがたきは猶この道の奥にぞある。

此夜号外來る、議長不信任問題上奏案の可決なしたるよし。

二日　晴れ。議會紛々援々、私行のあばき合ひ、隱事の摘發、さも大人げなきことよ。

半夜眼をとぢて靜かに當世の有さまをおもへばあはれいかさまに成りていかさまに成らんとすらん、かひなき女子の何事をおもひたりとも猶蟻みゝずの天を論ずるにもにて我れをしらざるの甚しと人しらばいはんなれど、さてもおなじ天をいたゞけば風雨雷電いづれか身の上にかゝらざらんや、國の一隅にうまれ一隅に育ちて我大君のみ惠に浴するは彼の將相にも露おとらざるを、日々せまり來る我國の有さま川を隔てゝ火をみる樣にあるべきかは、安きになれてはおごりくる人心のあはれ外つ國の花

やかなるをしたひ我が國振のふるきを厭ひてうかれうかるゝ仇ごゝろは、なりふり、住居の末なるより、詩歌、政體のまことしきにまで移りて、流れゆく水の塵芥をのせてはしるが如く、何處をばとゞまる處としらず、かくてあらはれ來ぬるものは何ぞ、外は對韓事件の處理むづかしく、千島艦の沈沒も我れに理ありて彼れに勝ちがたきなど、あなどらるゝ處あればぞかし、猶條約の改正せざるべからざるなどかく外にはさま〴〵に憂ひ多かるを、内は兄弟かきにせめぎて黨派のあらそひに議場の神聖をそこなひ、自利をはかりて公益をわするゝのともがらかぞふれば猶指もたるまじくなん、にごれる水は一朝にして清め難し、かくて流れゆく我が國の末いかなるべきぞ、外にはするどきわしの爪あり、獅子の牙あり、印度、埃及の前例をきゝても身うちふるひ、たましひわなゝかるゝを、いでよしや物好きの名にたちてのちの人のあざけりをうくるともかゝる世にうまれ合せたる身のする事なしに終らむやは、なすべき道を尋ねてなすべき道を行はんのみ、さても耻かしきは女子の身なれど、

吹かへす秋ののの風にをみなへし
ひとりはもれぬものにぞ有ける

四日　晴れ。神田にかひ出しをなす、久し振にて伊東の夏子ぬしを訪ふ、もの語り多くて日没ちかくまで話す、宇治拾遺並びに西行選集鈔かり來る。

七日　晴れ。多町にかひ出しながら喜多川君に菓子箱かへす、歸路奥田に利金入るゝ、此日伊三郎より金五圓かりる、高利の金にて俗に日なしといふもの也、かゝる事物覺えてはじめての事なり、此夜山梨縣に手紙出す。

金子のこと後屋敷に申つかはし、雨宮のもとへも賴み文出す。

八日　晴れ。母君神田邊より本郷に趣き給ふ、久保木に金子のことといはんとてなり此日淺草紙二しめ仕入る。

伊東君のもとにて聞ける事よ、彼のほし野天知子が今日斯道にこゝろを盡すことの本末もあら〳〵知られぬ、はやうゞだ年などのいとけなかりし時の事也けん、唄ひ女とか聞えし娘にはあるまじき人に迷ひて、いか成けるにか途に狂氣したりけるを、小松川の病院に久しく有ていえたる成りとか、あはれ悲戀のこゝろをつねにうたひて文辭の我等が胸をさすも實にかゝればこそかゝるなれとおもひ當りぬ、あはれはかなの人や、今日此ごろのおもひよ、空なる月日の雲はかゝれど露はおほへど上は明らかには

れたるがごと、たのしみくるしみ身をはなれて一人もの靜にあるべきにや、さらずば迷雲折々にかゝりて一歩地にあり一歩天にあり、道の二道を知り絲の黑白をおもひ、なきて然かしていよ〳〵くるしむの人か、問ひがたきこゝろの底いよ〳〵哀なり。

十六日　雨宮にはがき出す、かの後屋敷のことたのみやりたるより日かず今日まで に成りぬれど、例のたよりも聞えざれば其返事聞かんとてなり、さるに日没少し前伊三郎來訪、種々もの語りあり、到底郵書の上にて事とゝのふべきにもあらざるべし、一度はかならずかの地に趣かざるべからず、すでに年も終りにちかきを來年といはゞ又事のびなん、我も送りてゆかんには日のせまらざるほどになさまほしきを、今日出したる文の返事を取りてなどいはゞなか〳〵にうるさし、ゆかば今より直にゆかん、天氣のうれひもあらざるを今宵支度して明日の朝はやくにとすゝむ、さしもおもひさだめざるほど成しが、母も邦も我も夢の樣にてさらば直にと約す、未明に家より出立せんは近き家々がおもはくもいかゞとて、今宵伊三郎が家に泊りてあすもろ共にといふ俄にてまことゝも覺えぬ樣と、伊三郎一あし先に出て母君は邦子が送りてゆく、路金などの事はすべて伊三郎が支度をなしけり。

十七日　寒氣いふべくもなし、母君のことをおもふにくに子も我も終日むねいたみともすれば涙のみなり。

十八日　夕ぐれちかく後屋敷より廣太郎來る、我れよりのふみにつきて雨宮の談もあり、そのまゝ有べきに非ずとて出京する成るべし、されども請求に對しても異論ありげなる口ぶり見ゆ、何はとまれ此人來べきをしらば母君を長途の旅にも出し參らせじを、雨宮よりも此人よりも一通の狀も來らざりしぞ殘りをしきなり、歸りて後邦子とかたる。

十九日　伊三郎が留守宅に利金持參、待ち山に爪を仕人る。

母君のもとに一書出さんとおもへど廣太郎が電報をうつべきよしいひけるまゝ、さは今日あすがほどには歸り給ふべしとてそのまゝまつ。

廿日　まだたよりなし。

廿一日　いまだし、日々夜々くに子とかたるは此こと也、たがひに覺つかなさのあまりはものいひする事もあり、此日頃大方なみだ也。

廿一日　雨宮よりふみ來る　十九日出にしてしかも母君來甲のこと一字もなく、廣

太郎が上京の事もなし、談判の都合あしからず。一週間内にはともかくもなるべしとて、かれよりが志しを以て金五圓爲替にて送る、此人に金子かりんとにはあらざるを。

廿二日　何事のたよりも聞えず。

廿四日　伊三郎が宅に行く、廣太郎昨日歸郷なしけるよし。

廿五日　伊三郎が妻來る、今日明日には歸京なるべしなど語る。

廿六日　の夕母君歸京、旅づかれもなくいと嬉し、後屋敷にての談判はすべてしるしつくるあたはず、母君が一錢の金をもち歸り給はざるにて大方はしるべし、歸路の路用は宇之助よりさし出したるよし。

二十七日　初雪ふる。母君一日やすみ給ふ、天知子より狀あり。

二十八日　母君寺參り、伊せ利より通運便にて金子五圓五拾錢來る、奥田の元金幷に利金なり、天知子よりもひとしく金壹圓半送り來る、文學界十二号に出したることのねの原稿料なり、平田君より狀來る、今日より大宮の方にゆくよし、新年また逢はんなどあり。

廿九日　奥田に金持參、神田にかひ出しをなし、小石川師君に歳暮の進物持參、くち子どのにあふ、はなし多し、こゝは又別天地なり。

三十日　もちをつく金壹圓、上野君父子歳暮に來る。議會解散。

三十一日　あきなひ多し、二時まで起居る。

廿七年一月一日　あさのほど少し雪ちらつく、やがてはれたり。今日のせわしさたとふるにものなし、終日くにと我れと立つくすが如し。禮者なし。

二日　おなじく。西村禮に來る、久保木來る。

三日　上野房藏來る、佐久間夫婦來る、同日伊三郎來る。神田へかひ出し。

五日　より常の如し。

六日

七日　芝より兄君來る。むかひがはに同業出來る。

八日　よりあきなひひま也。

十日　平田君より狀來る。五日歸京したるよし、今月の双紙にも何か出しくれよとて也、末文に古藤庵無聲が我宅を訪ひ度よしかたりたりとて紹介をなす。

これより年賀の狀を出したるは山梨にて野尻兄弟、雨宮、古屋、越後の坂本ぬし、札幌の關場君、東京にては三宅、伊東、田中、半井、櫻井、喜多川君、幷びに兄君成り、かれより來たりたるは此人々のほかに志方君などもあり。

十三日　午前星野君はじめて來訪、かねておもひしにはかはりていともなれがほに馴れ安げの人也、としの頃は三十斗にや、小作りにて色白く、八丈もめんのきものに黑もん付の羽をり二重まわしをはをりて來りき、物語多かりしがさのみはとて。

十四日

十五日　平田君より狀來る、寺住ひの寒さにおそれ、ちかくの横川醫院とかいへるに轉じたるよし、そのうち訪はんなどありき。

今日はあきなひいと忙し。

十六日　はれ。一日あきなひせはしくして終る、一時の暇なし、坂本君より狀來る新發田區裁判所の判事に成けるよし、今宵よし原にまゆ玉かふ。

十七日　晴れ。つねの如し、須藤君來訪。

十八日　晴れ。

十九日　はれ。終日何事なし、今夜讀書曉にいたる。

廿日　はれ。植木屋寅次郎來る、午後平田君來訪、文學界寄稿のこと尋ねに成り、露伴子作五重塔、男はすべて重兵衛のやうに口かず多からざるぞよき、さればとてこと更につくろい顏ならんはにくけれど萬こゝろえがほになれ〳〵敷は才たかく學ひろしとても何となくあなどらるゝぞかし、春の花のうるはしきけはあらずとも天雲たな曳くたか山のそゞろ尊く恐ろしき樣にもあり、わづかにあふぎ見る樣なる中に何となくなつかしきをふくみたらんぞよき。

二月二日　年始に出づ、きるべきものゝ塵ほども殘らずよその藏にあづけたれば、假そめに出んとするものもなし、邦子のからうじて背中と前袖とゑりさまん〳〵にはぎ合せて、羽をりだにきたらましかばふとははぎ物とも覺えざる樣に小袖一かさねこしらへ出たり、これをきて出るに風ふくごとの心づかひものに似ず、寒風おもてうちて寒さ堪がたき時ぞともなく冷汗のみ出るよ、此月やいふべき金の何方より入るべきあてもなきに、今日は我が友のうちにてもこしらへ來んとて家を出づ、さはいへど伊東ぬしのもとにはかねてより負財も多し、又我心をなごりなく知りたりとも覺えぬ人に

かゝる筋のこと度々いふべきにもあらず、いかにせんと思ふに、かの西村が少なからぬ身代にはらふ…を五圓十圓の金を出させなばいつにても成ぬべし、我はもとよりこびへつらひて人の惠みをうけんとにはあらず、いやならばはせかし、よをくれ竹の二つわりにさら〳〵といふてのくべきのみとおもふ、車を坂本よりやとふて先湯島に安達君を訪ひ、久保木がもとに門禮して、直に小石川にゆく、西村には後によとて門をたゞ過ぎにすぐ、師君のもとより車をかへして入るに才子君折よく居合せらる、種々かたる、師君のもの語に三宅龍子ぬし家門を起し給ふこゝろのよし、さるは雄次郎君の內政のいとくるしくたらずがちなるに、例の才女のかゝる方におもむくこゝろ深くかくとはおもひたゝれし成るべし、師は我れにもせちにすゝめ給ふ、いかで此折過さず世に名を出し給はずや、發會當日の諸入用及びすべてのわづらひは憂ふるべからず何方よりも何ともなるべく、かへりては利益のあるべしといとよくすゝめ給ふ、すべて斷りて聞入れねば、師君猶申すべきことあり、そのうち來給へとて今日は末松君にけいこある日なればと出づ、我れも直に辭しさりて西村にて晝飯、種々ものがたる、金子は明日もやうをつぐべきよし、これより車を神田にはするに藤陰君は根岸に轉居

されたるよしにてかひなし、夏子ぬしを訪ふに家をうりて明日明後日のほどには何方へか移られんとていとうがはしかりしが、此中にてもの語りす、夜ふくるまでありて、車たまはりてかへる。

二月十七日　平田君より狀來る、文學界の投稿うながし來る也、ほし野君よりもおなじことにて狀來る。

十八日　十九日　執筆いそがし、小說花ぐもり四回分二十枚斗なる。

二十日　淸書、午後平田君にむけ出す。

二十二日　かみあらひ。

二十三日　根岸に藤陰君をたづぬ、令孃の別戸されたる物がたりあり、猶文界の事につきてもさま〳〵ありき、今日は本郷に久佐賀義孝といへる人を訪はんのこゝろ成しかばこゝには長くもとゞまらで出づ、久佐賀はまさご丁に居して天啓顯眞術をもて世に高名なる人なり、うきよに捨ものゝ一身を何處の流にか投げこむべき、學あり力あり金力ある人によりておもしろくをかしくさわやかにいさましく世のあら波をこぎ渡らんとて、もとより見も知らざる人のちかづきにとて引合せする人もなければ、我れよりこれを訪はんとて也。

大坂東區內淡路町二丁目九十三番屋敷　志方鍛

そなたより訪はずばこれよりもとあるに、
よしいまはまつともいはじ吹風の
とはれぬをしも我がとがにして

かまくらやまだみぬ友のあたりまで
おもかげうかぶ冬のよの月

紅葉がりいざといふべき友もなし
きのふもけふも時雨のみして

つゆしづく（二十七年一月）

あしびきの山にも野にもすみてけり
　光くまなき秋の夜の月

たちまよふ市のちまたの塵のうちに
　つれなくすめる月のかげ哉

＊

もろともにすめばすまるゝ世なりけり
　野山の月もおのがこゝろも

水の上にあともとゞめぬうたかたの
　あわにむすべる我がいのち哉

よの中も何かいとはん水の月の
　とまらぬかげをこゝろにはして

いとふべきほどだにもなしよの中は
　かせにむすべる青柳のいと

中島歌子

かぎりなき光をそへてよの中の
　人のかゞみと成し君かな

おもふどちふきかはしたるふゑたけの
　むかしの音こそ戀しかりけれ

くれたけのすぐなりとおもふ我にしも

あやしきふしを人はつけゝり

ある人の來る日をまつとありしかば、

すみよしの松は誠かわすれぐさ

つむ人おほきあはれうきよに

鶯も聲せぬやどのはるぞとは

しらでや梅のかにほふらん

これをだにありしかたみとうつし植て

いとゞ涙の軒の梅がえ

梅の花さける斗をはるにして

うぐひすだにもとはぬやど哉

ある折に、

宵々の夢に斗はみえよかし

まつには人のつれなかりとも

○はかなしや我こゝろからみる夢の

たゞさばかりの戀もする哉

今日し又うはの空にて過ぬなり

なにおもふらん身としらねども

ある折に、

(9)まくづ原うらみし秋は夢なれや

あともあらしのおとのさびしさ

これをしも戀とはいふや山柿の
　みだるゝ斗むねのくるしき

今はとておもひ絶たる中川に
　あやしく袖のぬれ渡る哉

　おもふ事ありて、

あれぬとてたゞに過なば敗島の
　歌のあらす田たれかすくべき

すがれよとまねく袂もうかりけり
　ひとりやたゝんたゞひとりにて

打寄する波にも花は咲ものを

　たゞにくだけてわれやまめやは

いとこのうせたる時、

消にける露の玉のをたえてよに
　あはれ〳〵といふ人やなき

かたち美にして才たかき女は、よしやしもがしものしなゝりとも、遂にあま雲棚引位山のたかきにものぼりがたからじと言ひしに、いなさしもしからじ、そはみさをといふ物なき人ならではと邦子のいふに、

くれ竹のぬけ出るさへあるものを
　ふしは此よになにさはるらむ

　野々宮君來訪、

池の面にあそぶ蛙のみなれては

しらずがほなるさへぞをかしき

本郷龍岡町十五番地　馬場勝彌

市谷谷町八十五番地　稲葉寛

池ノ端七軒町三十番地　小島方　平田喜一

日暮里村妙隆寺内　山下直一

芝神明町二十五番地　古山銓太郎方

本郷西片町十番地二ノ二十二號　菊池隆直

三番丁四十三番地に轉居

本郷眞砂町三十二番地　久佐賀義孝

日記ちりの中（二十七年二月）

ひるは少し過たるべし、耳なれたるとうふうりの聲の聞ゆるに、おもへば菊坂の家にてかひなれたるそれなりけり。あぶみ坂上の靜かなる處ぞ眞砂町三十二番地と人をしゆるまゝに、とある下宿屋のよこをまがりて出ればやがてもと住ける家の上なり。大路よりは少し引入りて、黑ぬり塀にかしの木の植込みえたる、入るべき小道にしるしの招たてゝ、雨露にさらされたれば、文字はうすけれど、天啓顯眞術會本部とよまれたるにぞ此處也とむねとゞろく、入りて玄關におとなへば、おうとあらゝかに答へて、書生成べし十七八の立ながら物いふ男二間なる障子を五寸斗あけてものいふ、下谷邊より參りたるものなれど先生にこまゞゝお物語せさほしく御人少なゝる折に御見ねがひたければ何時出てしかるべきにや、お取次給はるべしといへば、鑑定にはおはしまさずやととふ、いな鑑定にはあらずといふ、さらば事故にこそ御名前はと又とふに、はじめて出たるなれば通じ給ふとも名前の甲斐はなけれど秋月と申させ給へとこたへけり、男入りてしばしもあらず出で來つるが、何の事故にや師は只今直にてもよ

ろしとあるこゝろ安きに先うれしくて、さらばゆるし給へとみちびかる、襖一重のそなたは其鑑定局なるべし、敷つめたる織物の流石に見にくからず、十畳斗なる處に書棚、ちがひ棚、黑棚など何處の富家よりおくられけん、見るめさばゆし、額二つありしが、一つは靜心館とやありし、今一つは何成けん、床は二幅對の絹地の畫也、床を背にして大きやかなる机をひかえ、火鉢の灰かきならし居るは其人ならん年は四十斗りにや小男にして音聲靜かにひくし、机の前に大きなる火桶ありて、そが前にしとね敷たる。それにせよととてしきりにすゝむ、我も彼れもしばしは無言成しが、いでや御はなし承らん、何等の事故おはしますにやとかれより問ひ出づ、つれ〴〵の法師が詞に、名を聞よりやがて實はおもひやらるれど、逢見れば又おもふ樣のかほしたる人ぞなきとありしが、げにしかぞかし、さればかくいはんといはんとおもひまうけしことは、時にあたりてさもいふまじきこともあり、さらに我がむねを開くこともありかし、先はことに先だちて申すべきはおしかけに參ての罪あさからざると、女子の身にてきまりをこえのりのほかにはしりなど、聞給ひてはものぐるはしとやおぼし給はん、それには故ありもとあり、天地ををさめ給らんとおもふそのひろやかなる御胸のうちに、恐言

の愚なるも、卑言のさもしきも捨て給はず、愛憎好悪さま〳〵の塵あくたの外に埋もれながら一節きえぬ誠のこゝろを聞しめして、おぼしめし給ふ處を仰せ給はらば嬉しかるべし、我れはまことに窮鳥の飛入るべきふところなくして、宇宙の間にさまよふ身に侍る、あはれ廣き御むねのうちにやどるべきとまり木もや、まづ我がことを聞きたまふべきやといへば、よし、おもしろし、いで聞かんと身をすゝます、我身父をうしなひてことし六年、うきよのあら波にたゞよひて、昨日は東今日はにし、あるは雲上の月花にまじはり、或は地下の塵芥にまじはり、老たる母、世のことしらぬいもとを抱きて、先こぞまでは女子らしき世をへにき、聞たまへ先生、うきよの人に情はなかりけるものを、わがこゝろよりつくり出てたのもしき人とたのみ、にごれるよをも清める物とおもひて、我れにあざむかれてこゝに誠を盡しにき、一朝まなこの覺めぬるは、我が宇宙にさまよふのはじめにして、人しらぬくるしみ此時より身にまつはりぬ、あえなくはかなく淺ましき物とおもひ捨てゝ、今は下谷の片ほとりにあきなひといふもふさはしかるまじきいさゝか成る小店を出して、こゝを一身のとまりと定むれど、なぞやうきよのくるしみのかくて免がるべきに非らず、老たる母に朝四暮三のはかなき

ものさへすゝめ難くて、我がはらからの佗び合へるはこれのみ、すでに浮世に望みは絶えぬ、此身ありて何にかはせん、いとをしとをしむは親の爲のみ、さらば一身をいけにゑにして運を一時のあやふきにかけ、相場といふこと爲して見ばや、されども貧者一錢の餘裕なくして我が力にて我がことを爲すに難く、おもひつきたるは先生のもと也、窮鳥ふところに入たる時はかり人もとらずとかや、天地のことはりをあきらめて、廣く慈善の心をもて萬人の痛苦をいやし給はんの御本願に思し當ることあらば教へ給へ、いかにや先生、物ぐるはしきこゝろのもと末、御むねの内に入たりやいかにと問へば、久佐賀はしば〳〵我おもて打ながめて打なげくけしきに見えしが、年はいくつぞ生れはと問ふ、申歳生れの二十三にて三月二十五日出生といへば、さてもいとゞ生れかな、君がすぐれたる處をあげたらば、才あり智あり物に巧あり、悟道の方にもゑにしあり、をしむ處は望みの大にすぎてやぶるゝかたち見ゆ、福祿十分なれども金錢の福ならで、天禀うけ得たる一秤の福なゝばこれに寄りて事はなすべきにこそ、商ひと聞だに君には不用なるを、ましてや賣買相場のかちまけをあらそふが如きはさえぎつて止め申べし、あらゆる望みを胸中よりさりて終生の願ひを安心立命

にかけたるぞよき、こは君が天よりうけたる天然の質なればといふ、をかしやな、安心立命は今もなしたり、望みの大に過ぎてやぶるゝとは何をかさし給ふらん、五うん空に歸するの曉は誰れか四大のやぶれざるべき、望も願も夫までよ、我が一生は破れ〳〵て道端にふす乞食かたゐの夫こそは終生の願ひ成けれ、さもあらばあれ、其乞食にいたるまでの道中をつくらんとて朝夕もだゆる也、つひに破るべき一生を月に成てかけ、花に成て散らばやの願ひ、破れを願ふほかにやぶれはあるまじやは、要する處は好死處の得まほしきぞかし、先生久佐賀樣、此の好死處ををしへ給らずや、世に處す道のさま〴〵もうるさし、おもしろく花やかにさわやかの事業あらばをしる給へとやう〳〵打笑みて語り出れば、其處也、そこ也と久佐賀もあまたたび手をうつ、されども圓滿を願ふはうきよのならひにして、圓滿をつかさどるは我がつとめなり、破れの事は俄かに語るべからず、そも君は何を以て唯一のたつしみと覺すぞや、それ承んとある、錦衣九重何かたのしからん、自然の誠にむかひて物いはぬ月花とかたる時こそうきよの何事も忘れはてゝ、造化のふところにおどり入ぬる樣には覺ゆれ、此景色にむかひたる時こそとこたふ、あはれ自然の景を人間にうつして御覽せよ、はじめ

て我が性の偶然ならざるを知り給ふべし、あやめ、撫子さ〳〵の性をうけて、おのがさま〴〵にほひ出る、これこそは世の有樣なれ、草木に植時の機あるをしれど、人の事業に種まきの機節をはからざるはいと怨ならずや、遠因近因來る處一筋ならず、人々只今の苦を知りて、根原の病ひをしらざれば、もだえはいたづらに空に散じてつねにもとをいやすによしなし、人さかりにしては天の力も及ぶかたなし、盛なる時は我があづかりしる處ならず、我れは精神の病院に成て、痛苦の慰問者に成て、人世のくすやになりて、ぼろ、白紙、手ならひ草紙、あれをもこれをもかひあつめ、撰分て其むき〳〵の働きを爲させんとす、ぼろとすてたりける小袖のちぎれも道に寄てすきかへさば、今日有用の新紙と成ておほけなき御前に出る折もあり、ふるきをかへして新たにし破れをとゝのへてまつたふするは我が役なり、のたまふ處は我が贊成する處にして、君が性は我が愛し度本願にかなへり、月花を愛し給ふ心の誠をもとゝしたらば、其ほかの出來ごとは瑣事ならずや、小さき愛の大きに身にかゝるは日々の運用よろしからざるによる、運用の妙はこゝにありてしかも運用はたやすき物也、本源のさとり開かれぬる後に日々の運用何事かはあらん、さりながら、人を知る人の我を見る

は少なきがごと、本原は知るといへども枝葉にまよふはこも又無理ならざる處ぞかし、我が會員日本全國三萬にあまれり、その人々箇々一樣ならず、事によりては我れにまされるもあり、我れより師とあほぐもあれど、三世にわたり一世を合するは又別物にしてと、かたり來る久佐賀もいよ〳〵こと多く成て、會員のもの語、鑑定者のさま〴〵、談じ來り談じさり、語々風を生ず、我れも人も一見舊識の如し、ものがたり四時にわたる、其うち會員の質問に來たりしもの一人あり、大阪米相場の高下電話にて報じ來たるなど、ろうがはしく成ぬるに、時もはや日暮れに成りぬ、我れもいさゝかかんがふべき事など聞き出たるに、今日はこれまでとてたつ、後藤大臣同じく夫人の尊敬一方ならざるよし、および高島嘉右衛門、井上圓了が哲學上の談話など、かたること多かりし。

二十五日　西村君來訪、午後まではなす、平田君來訪されたるより前者はかへる、例のせまやかなる部屋の内に物がたること多し、五時まで遊ぶ。女學雜誌に田邊龍子、鳥尾ひろ子のならべて家門を開かるゝよし有けるとか。萬感むねにせまりて、今宵はねぶること難し。

二十六日　星野君來訪、文學界十四号原稿料持參、社を當月より三の輪にうつされたるよし、車を待たせて直に歸宅す。

二十七日　田中君を牛込に訪ふ、新小川町を轉じてつくど前にうつりたるを知らざりしかば尋ね佗にたり、柴又に參詣して留守也、されども切に逢はまほしきことあれば、此まゝに歸らむもをしく、さらば神田にかひ物して又更にこんとて出づ、多町に手遊類かひて又こゝにかへる、田中君歸宅を待てかたる、伊東のぶ子君も折ふし來訪、談は中島の師が上なり、品行日々にみだれて、各いよ〳〵甚敗、歌道に盡すこゝろは塵ほども見えざるに、弟子のふえなんことをこれ求めて、我れ身しりぞきてより、新來の弟子二十人にあまりぬ、よめる歌はと問へば、こぞの稽古納めに歌合したる十中の八九は手にはとゝのはず、語格みだれて歌といふべき風情はなし、座に他の大人なかりしこそよけれ、なげかはしきおとろへ方と聞ゆ、田中君などが詠草一月にも十月にも滿ぞくに直しなど與へられたる事なしといふは僞のみにもあらざるべし、かねて我が上にも知ることなれば、かゝるが中にこの有樣を知りつくしたる龍子ぬしがこれに身を投じて家門を開かんとすと聞こそおぼろげのかんがへにはあらざるべし、秋の

紅葉のさかりは今一時なる師が袖にすがりて我世の春をむかへんとするの結構、此間にかならずあるべし、鳥尾ぬしがことはもとより論ずるにたらず、師が甘き口に醉ひて我が才學のほどをもおもはずうきよに笑ひ草の種やまくらん、すべてて〳〵がたきの世とかたる、いでさらば何事をも言はじおもはじ、我はもとよりうきよに捨て物の一身を何のしわざにか歎くべき、田中ぬしはしからず、なまなかあらはし初たる名を末弟におされて、朝の霜の此まゝに消なんはいかに口をしからずや、師に情なく友に信なくとも、何か又そは厭ふにたらず、念とする所は君が手腕のみ、うきよは三日みぬ間の櫻なれば君もむかしの君ならで歌學大にあがり給ひしか知らねど、我が知りたるまゝならば、此世はとまれ、天下後代に殘してそしりなきほどの詠あるべしとも覺えず、いかで萬障をなげうちて歌道に心を盡し給はずや、我れもこれより君が爲におよぶ限りの相手にはなるべし、かずよみをもなし、各判をもなし、論議辯難もろ共にみがゝでやは、我は今まで小商人の、歌よむことをもなさゞりしかど、君は常におこたりなくつとめ居たまひしに相違あるまじきが、玉をみがくに他山の石を以てすとか、一人にてはいかでかとすゝむ、君にそのこゝろおはしませば我が喜びは上もなきぞと

田中ぬし喜ぶ、此人もとより汚濁の外にたちてすみ渡りたるこゝろならぬはしれど、おもて清くしてうらにけがれをかくす龍子などのにくゝいやしきに、よしけがれはけがれとして、多數のすてたる此人にせめては歌道にすゝむ方だけをはげまさんとて也、右もにごれり、左もにごれり、師も龍子も此人も何れにごりのうちなるを、あれをすてゝこれをたすくるは、時のよはきを見るにしのびず、人はたのまぬ義をおこして、我れから苦悶に身をなやまず我が淺はかさあはれむにたえたり、ものがたること多くして日も暮れぬ、車をもて送られぬ。

二十八日　早朝久佐賀より書あり、君が精神の凡ならざるに感ぜり。爾來したしく交はらせ給はゞ余が本望なるべしなどあり、頃日臥龍梅滿開の時なるにいかで同行して天地の花時と人生の花時をならべ賞せんはたのしからずや、適日を期して返章を賜はらん事をとあり。又別紙に　君がふたゝび來たらせ玉ふをまちかねてとて歌あり、

とふ人やあるとこゝろにたのしみて
　　そゞろうれしき秋の夕暮

歌もよからず、手もよく書たりとは見えねど、才をもて一世をおほはんの人なるべ

し、梅見の同行はかれに趣向あるべし、我れは彼れが手中に入るべからずとほゝ笑みて返事したゝむ、貧者餘裕なくして閑程の天地に自然の趣をさぐるによしなく、御心はあまたゝび拜しながら御供の列にくわゝり難きをさる方に見ゆるし給へ、よしや袂にあまる梅がゝは此處に緣なくとも、おこゝろざしを月とも花とも味はひ申すべく、不日參上御をしへをうけんとて、かへしならねどかくなん、

すみよしの松は誠か忘れ草
つむ人多きあはれうきよに

二月一日　文學界十四号來る。早朝田部井より狀來る、妻の急病にてうせたるよし、すべて夢かとあきる、母君直に吊ひにゆく。

二日　曇り。かしらなやましくて終日打ふす。夕刻号外來る、衆議員當撰者の報なり。

三日　小雨ふる。

此ほどすべてことなし。

九日　雨。今日は銀こんの大典也、郡市府縣をしなべて、こゝろ〳〵の祝意を表するに狂するが如しとか聞しが、折あしき雨にて、さのみはにぎはしからぬやにきく。

菊池の奥方高齡をもて恩賜金をたまはりたるよし、亡老君の五年祭をかねて祝義あるべきよし沙汰ありければ母君いはゐ物もちゆく、歌一首をそふ、

めづらしき御いはゐにさへ逢にあひて
君かさぬらん千代も八千代も

よからねどかくなん。此夕べ樋口くら來る。

十日　くら逗留。雨天。

十一日　おなじく雨天。山下直一君死去の報來る、すべて夢とのみあきる。

十二日　母君山下君を吊ふ。おくら猪三郎のもとにゆく。禿木子及孤蝶君來訪、孤蝶君は故馬場辰猪君の令弟なるよし、二十の上い〳〵ならん、慷慨悲歌の士なるよし、語々癖あり、不平々々のことばを聞く、うれしき人也。

數よみ、
春雨十首
朝春雨

ふしながら聞しはいつぞ朝市の
　たちぬくるしき春雨の空

夜春雨

春雨のおとを枕にきくよ半ぞ
　むかしの花の夢はみえける

對二春雨一言レ志

あづさゆみやよ春雨にものいはむ
　めぐむは露の草木ばかりか

田家春雨

たち出てみれば春雨かすむ也
　わがせやかへる小田の中道

閑居春雨

春雨のふる物がたりきかせてん
　小窓よりこよ庭の鶯

十三日　晴れ。眞砂町に久佐賀を訪ふ、日没歸宅。おくらいまだ歸らず。

十四日　田中君を訪ふ、かずよみせんとて也、夕べはがきを出したれど引ちがひてかれよりも文を出したるよし、今日は小石川師君と共に鍋島家に參賀の事ありとて支度中也、例の龍子ぬしが一條、いよ〳〵二十五日發會と發表に成ぬ、されば右披露をかねて鍋島家の恩顧をあほがん爲、今日の結構はある也けり、田中ぬし出でさられし後、一人殘りて暫時かずよみす、題は三十題成し。醜聞紛々、田中君の内情みゆる。

中根岸町二十六番地　藤本藤陰

上根岸町三十九番地　佐藤東

芝濱松町一丁目十五番地　山下信忠

中根岸町八十一番地　井岡大造

いはでもの記（二十七年三月）

よき衣裳して似つかぬ人あり、さるは下ざまのやつ〳〵敢なへたるなどをめしたるぞよき、身にそなはらぬは、よきに過るもあしきに過ぐるもよからぬもの也。

中々におもふ事はすてがたく、我身はかよわし、人になさけなければ黄金なくして世にふるたつきなし、すめる家は追はれなんとす、食とぼしければこゝろつかれて筆はもてども夢にいる日のみなり、かくていかさまにならんとすらん、死せるかばねは犬のゐじきに成りて、あからぬ名をば野外にさらしつ、千年の後萬年の春秋、何をしるしに此世にとゞむべき、岡遊のまつの風にうらむは同じたぐひの人の末か、わびし。

ふみもて來てさる人のこれあきらめさとし給へといふ、何ぞととへば、貝原益軒、室鳩巣などが書ける書どもなり、よみもてゆくに、たど〳〵敢ところのみぞ多かる。

塵の中日記（廿七年三月）

日々にうつり行こゝろの、哀れいつの時にか誠のさとりを得て、古潭の水の月をうかべるごとならんとすらん、思かなるこゝろのならひ、時にしたがひことに移りて、かなしきは一筋にかなしく、をかしきは一筋にをかしく、こしかたをわすれ、行末をもおもはで身をふるまふらんこそうたても有けれ、こゝろはいたづらに雲井にまでのぼりて、おもふ事はきよくいさぎよく、人はおそるらむ死といふことをも唯風の前の塵とあきらめて、山櫻ちることはりとおもへばあらしもさまでおそろしからず、唯此死といふ事をかけて、浮世を月花におくらんとす、ひとへにおもへば其いにしへのかしこき人々も此願ひにほかならじ、さる物から、おもふまゝを行なひておもひのまゝに世を經んとするは大凡人の願ふ處なめれど、さも成がたきことなれば、人々身を屈しことをはゞかりて、心は悟らんとしつゝ、身は迷ひのうちに終るらんよ、あはれはかなしやな、虚無のうきよに○もなし○もなし、○といふそも〳〵僞也、○といふも又僞也、いつはりといへどもこれありてはじめて人道さだまる、無中有を生じて

こゝに一道の明らかなるものあれば、人中に事をなさんとくはだつるものかならず人道に寄らざるべからず、天地ことゞくのみ盡して有無兩端をたなぞこににぎりたりとも、行はざる誠は人みるによしなし、我身きよしといへども、感は人のこゝろにありて耳にあらねば、かひなきは放言高論のたぐひなり、世に文章家といふものありて、華文麗辭をつらぬるによく、和歌俳句たくみに詠ずるもあり、又辯士として悲歌慷慨の語をなして一時の感を起すもあめり、さる物からこれ等はくゞつの木偶をまはして人めをよろこばしむるたぐひにも似て唯一時のよろこびばかりならんのみ、一時におこりたる感は一時にして消えぬべし、一代をつゝみ百世に殘りぬべきわざをとおもふに、事は我身にありて人にあらず、我み清しとて人をおとすはまだよし、人を論ずるを知りて我身の誠をあらはすをしらず、國政をそしり大臣をなみし大家名流の非をあげてあげつらふとも、かれは耳目にあらはれたる人なり、これは唯ひとつの口を動かすのみ、いかに又みにくからずや、こゝろは天地の誠を抱きて、身は一代の狂人になりも終らば、人に益なくうきよに功なく、清濁いづれをまされりとせんや、さればいにしへのかしこき人はこゝろの誠をもとゝして人の世に處するの務をはげみたりき、

つとめは行なひ也、行は德也、德つもりてはじめて人の感おこる、此感一代をつゝみ百世に渡り、風雨霜雪やぶるによしなく、一言一世に功あり、一語人に益あり、こん〳〵たる流れは濁を清にかへして人生是非の標準さだまらんとす、我一身の欲をすて、たのしみを捨、しかして後にわがおもふまゝの世を得んとす、花をも實をもはじめより得んとしてはいかでか得んと、かき置し人も有をや、机上の論はもと虛にあらず、虛にあらずと雖行ひ熟さゞれば實といふを得ず、論者はおこなはず、おこなふものはいはず、いはずといへどもおこなひのあとはかくれやはする、是れを百世に殘すといへども、必竟は虛也、無なり、天地の誠は虛無のほかにあるべからずといへども、人世の誠は道德仁義のほかにあらず、これをたつとんでかれをすつるは愚也、かれを取りてこれに背もいまだし、虛は空にして實は存す、無はうらにして有は表也、四時の順環、日月の出入、うきよはひとりゆかず、天地はひとり存せず、地に花ありて天に月あり、香は空にして色は目にうつる、あれも小とし難く、これも大とはいひ難し、されば人世に事を行はんもの、かぎりなき空をつゝんで限りある實をつとめざるべからず、一時の勇はいまだ勇といふべからず、一人の敵とさしちがへたらんは一軍

にいか斗のこうかはあらん、一を以て十にあたるいまだし、萬人の敵にあたるはかの孫吳の兵法にあらずや、奇正此内にあり、變化運用の妙天地をつゝんでしかも天地ののりをはなれず、これをしるものは偉大の人傑となり、これをうしなふものは名もなき狂者となる、さるからに法は奇にして濁にあらず、清流一貫古來今にいたる、おもへば聖者は行みづのながれの、とゞこほる所なからんぞうら山しき。

魚だにもすまぬかき根のいさゝ川
くむにもたらぬところ成けり

十四日　おくら丸茂醫學士のもとにゆく、幸作が件につきて也。

十五日　雨。丸茂の事件こと故なくとゝのひぬれば、おくら歸國の途につく。

十六日　はれ。吉原神社祭典、にはか出來る、此夜母君とゆく。

十七日　はれ。廣瀨伊三郎來る、お倉が事情をきく。

十八日　はれ。久保木姉君幷びに秀太郎來訪。平田君よりはがき來る、本月の文學界寄稿可成澤山に得まほしきよし、二十一日頃までにといふ孤蝶子の傳言、ならびに

その身も學校のいそがしさ片づき次第とはんなどあり。

十九日　はれ。木村ちよ殿來る、酒肴を出す、當人の賴に寄てなり、同じくたのまれて小堀何某、長堀何がしにはがき出す。

塵中につ記（二十七年三月）

おもひたつことあり、うたふらく、

すきかへす人こそなけれ敷島の

うたのあらす田あれにあれしを

いでやあれにあれしは敷島のうた斗か、道德すたれて人情かみの如くうすく、朝野の人士私利をこれ事として國是の道を講ずるものなく、世はいかさまにならんとすらん、かひなき女子の何事を思ひ立たりとも及ぶまじきをしれど、われは一日の安きをむさぼりて百世の憂を念とせざるものならず、かすか成といへども人の一心を備へたるものが、我身一代の諸欲を殘りなくこれになげ入れて、死生いとはず、天地の法にしたがひて働かんとする時大丈夫も愚人も、男も女も、何のけぢめか有るべき、笑ふものは笑へ、そしるものはそしれわが心はすでに天地とひとつに成ぬ、わがこゝろざしは國家の大本にあり、わがかばねは野外にすてられてやせ犬のゑじきに成らんを期す、われつとむるといへども賞をまたず、勞するといへどもむくひを望まねば、前

後せばゝらず、左右ひろかるべし、いでさらば分厘のあらそひに此一身をつながるゝべからず、去就は風の前の塵にひとし、心をいたむる事かはと、此あきなひのみせをとぢんとす。

國子はものにたえしのぶの氣象とぼし、この分厘にいたくあきたる比とて、前後の慮なくやめにせばやとひたすらすゝむ、母君もかく塵の中にうごめき居らんよりは小さしといへども門構への家に入り、やはらかき衣類にてもかさねまほしきが願ひなり、さればわがもとのこゝろはしるやしらずや、兩人ともにすゝむる事せつ也、されども年比うり盡し、かり盡しぬる後の事とて、此みせをとぢぬるのち、何方より一錢の入金もあるまじきをおもへば、こゝに思慮をめぐらさゞるべからず、さらばとて運動の方法をさだむ、まづかち町なる遠銀に金子五十圓の調達を申こむ、こは父君存生の比よりつねに二三百の金はかし置たる人なる上、しかも商法手びろくおもてを賣る人にさへあれば、はじめてのことゝてつれなくはよもとかゝりし也、此金額多からずといへども、行先をあやぶむ人は、俄にも決しかねて、來月花の成行にてといふ。

廿六日　半井ぬしを訪ふ、これよりいよ〳〵小説の事ひろく成してんのこゝろ構へあるに、此人の手あらば一しほしかるべしと、母君もの給へば也、年比のうき雲唯家のうちだけにはれて、此人のもとを表だちてとはるゝ樣に成ぬるうれしとも嬉し、まづふみを參らせて在宅の有無を尋ねしに、病氣にて就蓐中なれどいとはせ給はずはと返事あり。

此日、空もようよろしからざりしかど、あづさ弓いる矢の如き心のなどしばしもとゞまるべき、午後より出づ。君はいたく青みやせて、みし面かげは何方にか殘るべき、別れぬるほどより一月がほどもよき折なくなやみになやみてかくはといふ、哀れとも哀也、物がたりいとなやましげなるに、多くもなさでかへる。

廿七日　小石川に師君を訪ふ、田邊君發會昨日有べき筈の所、同君病氣にてしばしのびたるよし、その席に我上をも、いかで斯道に盡したらんにはなど語らる、我が萩の舍の号をさながらゆづりて我が死後の事を賴むべき人門下の中に一人も有る事なきに、君ならましかばと思ふなどいとよくの給ふ、ひたすら賴み聞え給ふに、これより思ひまうけたる事也、さりとはもらさねど、さま〴〵に語りてかへる。

廿八日　母君は音羽町佐藤梅吉に金策たのみに行、むづかしげ也しかば、歸路西村に立よりて、我中島の方へ再度行べきよしを物がたりて金策たのむ、直にはむつかしげにみえしとか聞しが、母君歸宅直に車を飛して釧之助來訪、金子の員を問ふ、その親などにはゞかれば成べし。

四月に入てより、釧之助の手より金子五拾兩かりる、清水たけといふ婦人かし主なるよし、利子は二十圓に付二十五錢にて、期限はいまだいつとも定めず、こは大方釧之助の成べし。

かくて、中島の方も漸々歩をすゝめて、我れに月ないさゝかなりとも報酬を爲して手傳ひを賴み度よし師より申こまる、萬事すべて我子と思ふべきにつき、我れを親として生涯の事を斗らひくれよ、我が此萩の舍は則ち君の物なればといふに、もとより我に大任を負ふにたる才なければそは過分の重任なるべけれど、此いさゝかなる身をあげて歌道の爲に盡し度心願なれば、此道にすゝむべき順序を得させ給はらばうれしとて、先づはなしはとゝのひぬ、此月のはじめよりぞ稽古にはかよふ。

花ははやく咲て散がたはやかりけり、あやにくに雨風のみつゞきたるに、かぢ町の

方上都合ならず、からくして十五圓持參、いよ〳〵轉居の事定まる、家は本郷の丸山福山町とて、阿部邸の山にそひて、さゝやかなる池の上にたてたるが有けり、守喜といひしうなぎやのはなれ座敷成しとて、さのみふるくもあらず、家賃は月三圓也、たかけれどもこゝとさだむ。

店をうりて引移るほどのくだ〳〵敗、おもひ出すもわづらはしく、心うき事多ければ得かゝぬ也。

五月一日　小雨成しかど轉宅、手傳は伊三郎を呼ぶ。

二日　小石川師君を訪ふ、轉居のことかたる、歸路西村にも報ず、いづれもそのすみやかなるに驚かる、久保木にも一兩日過ぎてしらす、驚のほどしるべし。

千束町二丁目三十五番地
小石川餌差町十八番地

今村けい

三番丁四十三番地
千束町二丁目三十五番地

菊池隆直
廣瀨伊三郎

水の上（二十七年六月）

四日　はれ。午後より小石川亡老君の墓參をなす、天王寺也、きのふ三年の祭成しを得ゆかざりしかば、邦子と共に參る也、墓前に花を奉り、靜に首をあげてあたりをみれば、何方より來にけん小蝶二つ、花の露をすひ、石面にうつり、とかくさりやらぬさま哀れにもさびし、邦子としばしこゝにかたりて、それより寺内を逍遥うす、雲井龍雄の碑文などをみる、夕日のかげくらく成ほど雨雲さへおこりたちて、空の色の物すさまじきに、そゝやといそぐ、圓子坂より藪下を過ぎて根津神社の坂にかゝる、のぼり口の左手にさゝやかなる枝折戸して黑木の階段かうぐしくふりたる庵の有けり、二十二宮人丸とかきたる文字も故ありげなるに、邦子は常にかゝる方をあやしきものにいひくだせば、ひたすらにこれを笑ふ。

五日　かの人丸の異樣成しがこゝろにかゝれば、かゝる處に又おもしろき人もやとてその庵を訪ふ、異談一ならず物語をかしかりき、人はいくつ斗にや、髮ながく髯しろく、なへばみたる小袖の長やかなるを着たり。家は三間なれど、天井もなくくりや

めく物もなし、雨戸といふ物ひらもなくて、雨風はいかにしのぐらん、あやし、七八年を遊歷に送りて、この庵へはをとゝし斗よりときく、訪人ありとても、我が厭ふべきには逢はずとて、門にそのよしかいしるしあるも、さのみはいかでとをかし、しばし有けるほどに、人の來たりければ又とてかへる。

世はいかさまに成らんとすらん、上が上なるきはに此人はと覺ゆるもなく淺ましく憂き人のみ多かれば、いかで埋もれたるむぐらの中に共にかたるべき人もやとて此あやしきあたりまで求むるに、すべてはかなき利己流のしれ物ならざるはなく、はじめは少しをかしとおもふべきも、二度とその說をきけば、厭ふべくきらふべく、そのおもてにつばきせんとおもふ斗なるぞ多き、かつて天啓顯眞術會本部長と聞えし久佐賀のもとに物語しける頃、その善と惡とはしばらく問はず、此世に大なる目あてありて身を打すてつゝ一事に盡すそのたぐひかとも聞けるに、さてあまたゝびものいふほどにさても淺はかに小さきのぞみを持ちて唯めの前の分厘にのみまよふ成けり、かゝるともがらと大事を談じたらんはおさな子にむかひて天を論ずるが如く、勞して遂に益な

かるべし、おもへば我れも敵をしらざるのはなはだしさよと我れをさへあざけらる。

九日成けん、久佐賀より書狀來る、君が歌道熱心の爲に、しか困苦させ給ふさまの、我一身にもくらべられていと憐なれば、その成業の曉までの事は我れに於ていかにも爲して引受べし、され共唯一面の識のみにて、かゝる事をたのまれぬともたのみたりともいふは、君にしても心ぐるしかるべきにいでやその一身をこゝもとにゆだね給はらずやと、厭ふべき文の來たりぬ、そもやかのしれ物、わが本性をいかに見るにかあらん、世のくだれるをなげきてこゝに一道の光をおこさんとこゝろざす我れにして、唯目の前の苦をのがるゝが爲に、婦女の身として尤も尊ぶべき此の操をいかにして破らんや、あはれ笑ふにたえたるしれものかな、さもあらばあれかれも一派の投機師なり、一言一語を解さゞる人にもあらじとて、かへしをしたゝむ。

一道を持て世にたゝんとするは君も我れも露ことなる所なし、我れが今日までの詞、今日までの行、もし大事をなすにたると見給はゞ扶助を與へ給へ、われを女と見てあやしき筋になど思し給はらばむしろ一言にことはり給はんにはしかず、いかにぞやとて、明らかに決心をあらはしてかなたよりの返事をまつ。

文を出すの夜返事來る、おなじ筋にまつはりてにくき言葉どもをつらねたる、今は又かへしせじとてそのまゝになす。

かの人丸も我家を訪ひたり、かゝる人に似合はしからずと見ゆるは、かへす〳〵我れを浮世の異人なるよしたゝへて、長き交際を結ばまほしきよしなどいふ、おもしろからぬ者ども也。

四日　出づ、この日は田中ぬしが發會なりければ、手傳ふ事多かる身は朝よりゆく來會者二十二三人は有けり、人々かへりて後しばし小出ぬしとかたる、切に歌をよむべきよしすゝむ、君が業とする著作の事もとよりあしからず、そはおもしろかるべけれど、小説は書く人世に猶ほ多かるべし、歌道はしからず、今の此よに天然の歌才を得て一身をこれに打入れて世にたゝんとする人かつふつ有ことなし、されば中島の社中人多しといへども　我みたる所にて君を置てこれかと見ゆるもなきに、君にしてふるひ給はゞかならず千載に名をのこして不朽の事業たるべしとおもふに、いかで世にたち給はずやとすゝむ、歌論もさま〳〵ありける中げにとおぼゆるふし少なからず、

此人よろしからぬ人なれど、さすがに一ふしと見ゆる説ども聞ゆ。

十五日　師君のもとにて前田家たのまれの詠草をしたゝむ、奥方の也。

十六日　早朝禿木子來訪、天知君より文あり、花ごもり二度目の原稿料送りこさる禿木君も學校のいそがしき頃とてはやくかへる。われは小石川稽古にゆく。

此日三宅龍子ぬしより使にて依綠軒漫錄かさる、坪内ぬしよりかりたる小説もろとも今宵通讀、一時に及ぶ。

二十日　午後二時俄然大震あり。

我家は山かげのひくき處なればにや、さしたる[illegible]もなく、そこなひたる處なども なかりしが、官省通勤の人々などつとめを中止して[illegible]るもあり、新聞の号外を發したるなどによれば、さては强震成しとする、被害の場處は、[illegible]、丸の内、京橋、日本橋邊おも也、貴衆兩院、宮内、大藏内務の諸省大破、死傷[illegible]、三田小山町邊には地の裂けたるもあり、泥水を吐出して其さま恐ろしとぞ聞く。直に久保木より秀太郎見舞に來る、ついで芝の兄君來訪、我れも小石川の師君を訪ふ、師君は此日、四谷の松平家にありて强震に逢たるよし、床の間の壁落ち、藏のこしまきくずるなどにて、松平家は大事成しとか。鍋島家にて新築の洋館震に逢て、珍貴の物品どもあまたそこなひ給ひけるよし。師君のもとにはさしたる事もなかりき。

此夜更に强震あるべきよし人々のいへばとて、兄君一泊せらる。この夜十時過る頃微震あり。

見舞狀の來たりしは、横須賀にて野々宮君、靜岡にて江崎ぬしなどなり。山梨へも見舞の狀出す、例の返事はなし。

この頃の事、すべて書盡しがたし、朝鮮東學黨の騒動、我國よりの出兵、清國との爭端、これらは女子の得よくしるべき事にもあらず、かつは此頃打つゞき心のせわしきに、その日の事をその日にしたゝめあへねば、やがては忘れて散うせぬるも多かり、又折をまちてかいつけてん。

北里、青山兩醫博士黑死病しらべとて、香港に渡りたるはいみじき名よなりしや、青山博士のその病につかれてあやふげなる電音おぼつかなし、知らぬ人にもあらぬ中なれば、殊に哀なり。

樋口幸作兄妹此地に四月の半より來たりて、櫻木病院にありけるよし、二十六日の夜おくら來りて當時の病狀をかたる。

二十八日　くらより人來り我をむかふ、留守成じかば、母君かはりて趣き給。

七月一日　芳太郎來訪。しばしありて横須賀より野々宮君參らる、かなしく淺ましくかつは哀れにもはづかしくもさま〳〵なる物語をかたり出る、失敗の女學生が標本ともいふべきにや。十時頃成けん櫻木町より使來り、幸作死去の報あり、母君驚愕直に參らる。

からはその日寺に送りて、日ぐらしの烟とたちのぼらせぬ、淺ましき終をちかき人にみる、我身の宿世もそゞろにかなし。

二日　早朝母君およびおくらと共に日ぐらしに、骨ひろひにゆく、山川程を隔てたる叔甥のおなじ所に烟とのぼるはこものがれぬ宿緣なるべきにや、おはしまさばと、今日はなき人に成し父上嬉しとおもふ。

五日　は小笠原家の數よみなり、會する人四人。

七日　小石川稽古日也。十二日までには是非金子の入用あるに、此月は別していかにともなすによしなく、師君に申てこそとこゝろは定めたりしを、さても猶いひおくれて、昨日までに成ぬ、今はいかにしても言はではあられぬ時とて、夕べ書物おはりて歸るさに文したゝめて机の上に殘し置し、されば今日の稽古日に何とかの給ふ可きは道理なり、よきこたへならば嬉しけれど、例の氣質も知らざるにはあらぬ師君が、いか樣なる事やの給ふらん、顏に……

八日　平田君來訪、田中ぬしがかまくら紀行いづこの雜誌にか記載のこと賴む、これより森鷗外君のもとに趣けば、同君にたのみてしがらみ草紙などに出さばやとてかへる。午後中島くら殿來訪、物語多し、夜食を馳走してかへす。樋口のくらも來る、明早朝一番汽車にて歸鄕したしとあるに、今宵はみやげ物などとゝのふる爲本鄕通へ諸共に行く。

九日　早朝くらを送て上野に行、上野町の小松屋といへる旅店に知人の待合せ居り

て、共に歸縣をなすよしに付同家までゆく。上野よりにはあらで、新宿の汽車にて行よしなれば、我れはこゝより歸宅。

朝飯をしまひて、無沙汰み舞に伊東、田中の兩家を訪ふ、日くれまで遊ぶ。田中ぬしのもとにありける艶道通鑑とて五冊ものゝ隨筆めける、小出ぬしの藏書のよしなるをかりる。

十日　禿木子より狀あり、森君のもとにて田中ぬしの紀行よろしきよしに付、本名宿處報道あり度しとなり、返事つかはす。奥田君來訪。

十一日　師君のもとへ行く、田中ぬしも盆禮として來訪、雜誌の事を語るに喜色あふるゝやう也。師君いかなるにか、衣類その他を質入して、金子をとゝのへ給へるよしにて、加藤の妻より我れは金子をうけとる、師君ははやく出稽古に趣給ひぬ。此日、日くれ前より雷雨、中々に晴がたし、夜に入りてより歸宅。佐藤盆禮に來たりしよし。

十二日　到來物のありしかば半井君を訪ふ、めづらしくこゝろよげにてにこやかに物がたらる、されども來客のありければ長くもかたらで歸るに、いづれちかくに御音

づれ申べし、十五六の兩日のうちに雷雨なくばかならずといふ、たけくをゝ敷此人の口よりかみなりの恐ろしきよしを聞こそをかしけれ。

靜かにかぞふれば誠や此人とうとく成そめぬるはをとゝしのけふよりなり、隔たりゆく月日のほどに、幾度こゝろのあらたまりけん、一度はこれをしをりにして悟道に入らばやとおもひつる事もあり、一度はふたゝびと此人の上をば思はじ、おもへばこそさまざまのもだえをも引おこすなれ、諸事はみな夢、この人こひしとおもふもいつまでの現かは、我れにはかられて我と迷ひの淵にしづむ我身はかなしとあきらめたる事もありき、そも〳〵思ひたえんとおもふが我がよよひなれば、殊更にすつべきかは、冥々の中に宿緣ありてつひにはなれがたき中ならばかひなし、見ては迷ひ、聞てはこがれ、馴ゆくまゝにしたふが如き我れならば遂に何事をかなしとげらるべき、かく斗したはしくなつかしき此人をよそに置て、おもふ事をもかたらず、なげきをもらさず、おさへんとするほどにまさるこゝろは、大河をふさぎてかへつてみなぎらするが如かるべし、悟道を共々にして、兄の如く妹のごとく、世人の見もしらざる潔白清淨なる行ひして一生を送らばやとおもふ。

十四日　小石川稽古にゆく。榊原家よりゆかた地、中村君より帶止、はんけち到來

此夜更るまでねぶり難し。あすの雷雨いかにや。

十五日　はれ。早朝芝の兄君來訪、少し物がたるほどに半井君參り給ふ、少し面やせたれども、その昔しよりはいげんいよ〳〵備はりて、態度の美事なるに、一樂織のひとへに嘉平次のはかま、絽にてはあるまじき羽織のいと美事なるをはふり給ふ、門に車をまたせ給へるは長くあらせ給ふべきにあらじとて、しゐてはとゞめず、鷄卵の折到來。

兄君は日くれまで遊び給ふ。夜に入りてより西村の禮助來る。此夜の月又なく淸し。

十六日　はれ、風秋に似たり。

十七日　平田君より書狀來る、避暑として奥羽の旅にのぼりしよし、雜誌のこと申來る。

㊂十八日　小石川に趣く、前田家の詠草したゝめ終る。

十九日　小說やみ夜の續稿いまだまとまらず、編輯の期近づきぬれば心あわたゞし、

此夜馬場孤蝶子のもとにふみつかはし、明日の編輯を明後日までにのばし給はらずやと賴む。

二十日　芦澤奈良志野より歸營、今日は土用の入なればとて蒲燒を芳太郎おごる。

隣家に此ほどよりかゝり居る女子あり。生れは神戸の刀劍商にて、然るべき筋の娘なれど、十六の歲より身の行よからで、契りしは何某の職工成ける　父なる人の怒にふれて侘しき暮しを二三年がほどなしつる、かゝりしほどに男子一人まうけて、二人が中にはあくこゝろもなかりしを、男の親の心惡しく、此女いかにしてもかくてあられぬ時は來りぬ、今はせんなしとて別れて家にかへる時、子は我が方につれもどして、その身はそれより大阪中の島の洗心館に中居といふ物に成りて、ことし五年がほど過ぬ、さるほどに此女生つき活達の氣象衆客の心にかなひて、引手あまたの全盛こゝにならぶ物なく、洗心館のお愛と呼ばれては、紅葉館のお愛と東西に嬌名たかく、我ぞ手折て我宿のと引かるゝ袖のさりとはうるさや、一つ心をぬし樣にと思ひこみぬるはかの地に名高きぼう易商、こゝにも人ぞしる森村市藏が一家に廣瀨武雄とてとしは二十六、當世樣の若大將、粹は身をくふ合ぼれの中おもしろく、互にのぼる二階三

階、せきはとゞめぬ帳場の爲にも、大盡客とて下にもをかぬもてなしを、猶やぬし樣御顏よかれと、みえにはそろひの惚はつぴ、女子にちらす紙花の、哀れや女もつまりに成りて、双手にあまりしこがねの指輪、一つは內處、二つはそつと、三つ四つと賣つくせば、やがては客のひゞきに成りて、岡やき半分なぶらるゝ、座敷の數は昔しのまゝとても、我が手にのらぬそれ鷹のねらひたがへば、互がひの上にもみゆるぞかし、まけじ氣性は今更の戀に火の手つのりて、御免候へ、我にも可愛き人一人、のろけはならひぞ、うら山しくば眞似ても見給へ、花を見捨る藪住居もぬし樣故なら大事なき身とおもて晴たる取なしに、長くはあられぬ此家をはなれて共にと斗、息子も折ふし使ひ過しの詮義むつかしく、こゝの支店に左せんの身となれば、とるや手に手を鳥が鳴とはふるし、東に行て暫しの辛棒をと、落人ならねど人前つゝましき二人づれの汽車の中、出むかひの手前は、さる大家の嬢樣學問修業にこれへとあるを我れに托されて同道とくるむれど、誰が目に見てもそれ者あがりのなりふり、さりとはむつかしの乳母がもとに、しばしの宿をととゞめける。

我れも家とくは四五年の後なり、部屋住の身の思ふにまかせぬほどは、そなたも修

業ぞや、つらくとも堅氣の家に奉公ずみして、やがて花咲く春にもあはゞ、假親まうけて奧樣とはいはすべし、賴むとありけるぬしが詞勿體なく、骨身にきざんでさらばと出立てば、全盛うつたる身に一人女子のはしり使ひ、何としてたへらるべき、我れこらゆれども、お主樣御氣に入らねば甲斐なや、出もどりの數を盡して、乳母の手前はづかしやと、こしらへ言の底情なくわれて、京の大家の嬢樣と聞ましたるは僞り、九尾の狐の我が若旦那樣手の中にまろめて、手だてあぶなや、大切は若旦那樣が上とて、乳母が怒りに取つく島ふつとはなれて、我とはとかぬとも綱に行衞は波のわだ中を流れ小舟の身の上助くる人なくて、乳母が前への謝罪はこれと、をしや三日月の眉ごそりとそりぬ。

すくひ給へとすがられしも緣也、我身にあはぬ重荷なれども引受ますれば、御前樣は此家の子も同前、いふ事きいて貰ねば成ませぬ、東女はどんな物か、狹けれども此袖のかげにかくれて、とかくの時節をお待なされと引うけたるは今日也。

二十一日　早朝孤蝶君よりはがき來る、續稿は二十二日中にてよしとのこと、嬉しき人也。今日午後より田中君のもとを訪ひて、お愛がしばしの宿にたのまんとす。日

ぐれ少し前よりゆく、留守成しかどしばし待つ、かにかくと斷がましく言を左右に托せど、見かけて頼みし我れに對し、厭とあらばお前樣女子にはあるまじ、横に車かしらず、長くとにはあらず二月か三月、それもむつかしくば一月にてもよしとて、おしつかへしつのはてに、さらば試に二日がほどをよこし給へといふ、雷雨はげしく、かへりは車にて送らる。

二十二日　晴れ。今朝やみよの續稿郵送。

朝鮮開戰の期漸く近づきぬ。

青山博士追々快方、北里技師かの地出立。

郡司君十九日入京　こぞの墨田川にくらぶれば心ある人の涙衣をうるほすべし。

二十三日　早朝田中君より斷の手紙來る、まことはうしろぐらき處ある人の、我れにはひたすらつゝまんとする物から、我よりつかはしたる女子に家内の樣子しれなば、つひには身の爲よからじとの心なるべし、あな狹の人ごゝろやなとをかし、さるにてもお愛のなげき一方ならず、いかでかく非運薄福の身と打なくさま、哀れにいち

ちらしければ、さらば今一度我が師のもとを訪ひて頼みてみんと家を出づ、師には事情殘りなくうちあけて頼み聞えたるに、師はその人となりの表面上よろしからざるにこれを引うけてかくまふといはゞ、我も君もこれよりの前途に一大障碍となりて、遂に救ひがたき大難を生ずべしとて聞入れ給はず、今はかひなし。

歸宅後、猶ほよくおあいと相談す、さらば一直線に武雄ぬしのもとを訪ひて、諸事談合の上に、いか樣とも策のほどこし方はあるべし、木挽町は物の表にして、これにはつくろひもあるべしはゞかりもあらん、武雄ぬしとの中は紙一枚の隔てなく、かくしだての入るべきならず、又よしや世人は何ともいへ、君にしていのちと頼むは此人なるべし、箱根にいますと定まりたらば、宮の下か芦の湯か、いづこまれ尋ねてしれぬことはあらじ、いざ給へ行きて逢見て後の事とうながすに、さらばと思ひ起して直に支度す。

隣家の妻がとゞむる詞のうるさかりしかど、さまゞに頼み聞えて出づ、出がけに、木挽町より帶取寄る爲とて文したゝむ、隣の妻が名前にて、ぬしのありかしれ居らば此文のはしにしるし給へとかく。

送りし車夫の歸りしは午後三時過る頃成し、首尾よく策の當りて宿處を敎へたるよし、まづはうれしかりしに、隣家の主歸宅の後、直に木挽町に實事を打あけんといふ、そはよろしかるまじとてとゞむるに、猶くど〳〵とのゝしりて、乳母のかたへの義理を思ふ、哀れなるは小人とるべき道をあやまりたるの人なり。

本郷向ヶ岡彌生丁三番地　櫻井榮三郎

相州箱根芦の湯松坂屋方　廣瀨武雄

しのぶぐさ（二十八年一月）

浪六のもとより今日や文の來るとまちてはかなくとしも暮れぬ、かしこも大つごもりのさわぎいかなりけん。

まちわたる人のたよりは聞かぬまに
　またぬとしこそまづ來たりけれ

三日の朝年禮にとてなから井のうし門までおはしぬ、何事もかざりをすてゝすがたもいたくおとろへ給ひき。

ますかゞみわれもとり出ん見し人は
　きのふとおもふにおもがはりせる

聞えし美男にて衣裳などいつもきらびやか成し人なりけるを。

おなじ日　さる人の來て、いでよせ聞にと引ゆるがすに暮ちかく家を出づ、三人也、菊坂の通を過て眞砂丁にのぼり、病院あとの原を過れば、月かげいつかたもと

にあり。

あづさゆみ春はいまだの中空に
　かすむとやいはん月おぼろなり
　この夜新がたの坂本ぬしより賀狀來る、これよりはまだやらざりし也。

わすれぬもさすがにうれしからごろも
　つまにといひしなごりおもへば

猪三郎は商店を開き、信三郎は銀行を出したりといふ、ともにいとこどち也。

梅の花ひらきしやどのあまたあるを
　おくれ咲にも成ぬべきかな

君の男にをはしまさば、靑籠などの評をやうけ給はん、なま物しりのゐせものとくに子のそしるを聞けば、げにしか見ゆらんものぞとはづかし。

をり立し和歌の浦わのあだ波に
　人のもくずとならんとやみし

四日　此よ本郷のあたりをそゞろありきして、にしき繪うる家になみろくが軍記はととふに、版の出來しはこぞなれど、今は品きれたりといふ、五百部よりほかはまだ世に出ぬなめりとうなづく。

谷のとの氷やかたき年たてど
　まだよにいでぬ鶯のこゑ

初音ときかば、われも春めかんものを。

となりに酒うる家あり、女子あまた居て客のとぎをする事うたひめのごとく遊びめに似たり、つねに文かきて給はれとてわがもとにもて來る、ぬしはいつもかはりてそのかずはかりがたし。

まろびあふはちすの露のたまかはは
　誠にそまる色もありつや

うしろは丸山の岡にてものしづかなれど、前なるまちは物の音つねにたえず、あやしげなる家のみいと多かるを、かゝるあたりに長くあらんは、まだ年などのいとわかき身にて、終にそまらぬやうあらじと、しりうごと折々に聞ゆ。つまごひのきゝすの鳴音しかの聲

こゝもうきよのさがの奥也

ゆしまの坂通は、此ほどまで町やにていとにぎやかなりしが、家をこぼち道をひろげて岩崎ぬしのやしきに成しより、石垣たかくつみて木立ひまなく、やみのよなどいとさびしく成ぬ。

月まではいかにやいかによの中の

ひかりはおのが物になしても

十五日　戸川の達子はじめてわがもとをとふ、殘花道人といふ父なる人の質はしらねど、雨よのしなさだめにいひけるかしこ人とはかゝる人をや。

殘りなくしらせ盡してくれたけの

むなしかるべきむねのうちかな

ことしあらたに我家をとひそめし人ふたりみたりあり、かほよきは學の際などさしもあらず、ものゝ才ありと見ゆるはすがたぞ取所なきやいとうし。から衣いづれをつまと撰らびては

おもひたゝれぬすさびならまし

おとこならぬこそこゝろやすけれ。

やゝかれがたなる男の、人めの關などことづけて文いひおこせたる、それがかべしをと女のこへるに書てやる。

はゞかりはたが人めにかしらかはの

關路よりこそ秋は立なれ

廿日　殘花君にとはる、みなわ集一冊これ見よとて也、なほ毎日新聞が日曜附錄にものせよとたのまる、稿をば二十六日までにといふ、文學界のかたもせまれるをこはいとあわたゞし。

分けいればまづなげきこそこられけれ
しをりもしらぬ文のはやしに

二月一日　友のもとをとひしに、折から雨ふり出ていとしめやかなり、高殿に茶を煮て靜かにうき世をかたる、障子を開らけば墨田川の流れしろきぬのをしきたるやうにて、堤にゆきゝのひとかげもをかしく、川を隔てゝかしこよし原のくるはと指さしつゝあるじのさんげ物がたりあはれふかし、此人を骨のあらしをと世にうたふはいかなるにか、筆取てはさこそ優柔華奢の風情もあらざらめど、大方人よりは情も深く、義にいさめるかたもおくれたりとは見えず、ものがたるまゝに落花たちまち雪に似たるのおもひあり。

落たぎつ岩にくだけて谷川の
そこには塵もとゞめざりけり

つまなる人は、かしこのくるはにこぞまで有ける身とや、無垢の女の數は盡せぬよにとさんげの一卷、世には心なく見すぐす人もあめり、我れこの人をすてゝ望みを世に求めば、我れは男の一生さこそ滿足なるべけれど、あはれや我ゆゑ沈みつる淵の出でがたく、苦しき海にうき寐のかなしさ、よそにはえこそ見過しがたけれ、いでよしや、人には長短のあるならひ、我れは此身をおくれたる方にして、一生のあやまちともおもひ置べし、更に世上の年わかき人にいはんに、つまをむかへば中立によりてこそ、わたくしには取かへしがたき悔もあるをと、うちなげく物からさすがにいとをしう捨がたきものにおもひたるいと情ふかし。

春淺きそのゝ若草わかければ
おふしもたてよつみはゆるして

ともいはまほしかりし、雨はをかしき物かな、降こめられてかゝる事も聞けるぞ

かし。

女友だちの久しう打絶てとはぬなどをば、いかにしてかくはなどおどろかしもすべし、男にはつゝましうてさる事もなさねば、いよ〳〵なつかしうこひしとおもふこともあり、月のよなどは更也、雨の日つれ〴〵と文机によりそひて文ども取散らし、その人の筆のあとなど、そこはかと見すさぶもあはれなり、かうやうの事人にはゆめいふまじかりけり、やがては名取川ぬれ衣くちをし。

よろしき女友達などあらばいみじうこゝろなぐさむわざならましを、さる人ももたねば折ふしのをかしきをもあはれなるをもかたらはんにかひなく、さしむかひてはたゞ人のこゝろやぶらじとさしいらへなどする、我がうへに有つる事どもかたるに、すこし聞よきをば物ねたみし、やがてしりう言をもすべし、よろしからぬをばまのあたりにあざけりて、しかもこゝろよげなるなど、すべて淺まし、男はさはいへど萬におほらかにて、かたらふ事のかひもありと見ゆれどそれもさるものにていさゝかやましきことそはぬにしもあらず、心やすきはひとり昔しのふみなどくりひ

ろぐるなりけり。

いにしへの人のあとふまじとにはあらねど、ふるきを尋ねて新らしきをしるなどいへるはいかなるにか、いさゝかおもひ得たるふしをことにまれうたにまれ、いひ出しきこえ出すに、やがて人はことに様なり、あやしさることいふ物かなどそしるめる、それもさこそはあれ、大方人はいにしへ人の書置けるあとをのみあなたうといかでかうはおもひうかべけんよもたゞうどにはあらじなどいひ〳〵て、さらにそれがもとのこゝろをさぐらんともおもひたらず、流れの末に醉て世を終るにこそあらめ、ひかる源氏の物がたりはいみじき物なれど、おなじき女子の筆すさび也、よしや佛の化身といふとも人のみをうくれば何かはことならん、それよりのちに又さる物の出こぬは　かゝんとおもふ人の出こねばぞかし、かの御時にはかの人ありてかの書をや書とゞめし、此世には此世をうつす筆を持て長きよにも傳へつべきを、更にそのこゝろもたるもあらず、はかなき花紅葉につけても、今のよのさまなどうたへるをば、いみじういやしき物にいひくだすこゝろしりがたし、今千歳ののちに今

のよの詞をもて今の世のさまをうつし置たるをあなあやしかゝるいやしき物更にみるべからずなどいはんものか、明治の世の衣類、調度、家居のさまなどかゝんに、天暦の御代のことばにていかでうつし得らるべき、それこそはことやうなれ、もしさるかき物の後の世に殘らば、人あやしみてものゝこかげにやおかん。

芝居はをかしき物なり、よせは猶いやしきもよきもたゞよりに寄てうちとけ物がたりなどもすめる、高座にのぼりて三味ひきうたうたふをのみ見る物かは、こゝら立こみたる人こそいみじき見ものにはあれ、圓左といへるが離緣のつまのはなしをしたりし時、大方の人はたゞその詞のをかしくおどけたるをのみめでくつがへりてどよみをつくりて笑ひたりしが中に、みそぢあまりの男、官吏ならましかば奏任がほどかと見えつる、黑きなゝこの三つもんつけたる羽織きし人一人うつむきて手巾にて目をしぬぐひ居たりしこそ、いかなるにかあはれ成し。

人傳などに聞つる時は、いといみじとおもひつる人の、逢見るにみおとりするこそ口をしけれ、さては世にいみじとつたへいふは大方かゝるにこそ、めづらしげなし淺ましなど思はんはいかにぞや、それさる物なればこそ、世はいよ〳〵あなどるまじかりけれ、よろしき名ある人のかくいひがひなきが如く、かくろへしのびてありとも人しらぬほとりにおもひのほかなるかしこきもぞまじれる、不定の世なれば、目もたのまじ耳もたのまじ、位やんごとなきをも何かはおそれん、はにふの小屋なるをも何かおとしめん、名は實にあらず、實は名にあらず、せんずるにあなどるまじきは世の中也。

丁汝昌が自殺はかたきなれどもいとあはれなり、さばかりの豪傑をうしなひけんとおもふに、うとましきはたゝかひ也。

中垣の隣の花のちる見ても

つらきはるのあらし成けり

水の上日記（二十八年四月）

春雨ふりて今日はいとつれ〴〵なり、なすべきことしも一わたりはて丶身のいとまやう〳〵得らるゝに、田中とじがもと、伊東の夏子ぬしなどとはゞやと家を出づ、柳町より車いそがす、みの子ぬしはさる人と共に花見のもよほしなど折わろかりしかば直にかへる、夏子のもとにてものがたり多し、やがて中島の師がりとひて、博文館よりのたのまれ雑誌の題字、題歌など、爵位高き人々にとたのむ、二時頃家にかへる、西村の母とじ参り居らる、ともにひる飯したゝむ。ほかにことなし。

よに入て号外來る、平和談判とゝのへり、委細はあとよりとあり。

十七日　いまだ談判の後報來らず。

十八日　平田ぬしに文を出す。今日兄君來訪。來客は馬場君及び野々宮、安井の二人也、及びおかう樣、西村の老婆。

十九日　早朝平田君より返事來る。おかう樣來訪、ついで馬場君來る。西村の婆君も來る。終日馬場君とかたる。午後より雷雨、家の中くらし。

二十日　早朝大橋君來訪。

小石川けいこ也、日没近く家にかへれば久佐賀來訪、西村君もありけり、久佐賀ぬしと共に夜ふくるまでかたる、金六十圓かり度よし頼む。

二十一日　文を乙羽庵に出す、例の題字の事につきて也。穴澤の清次郎君來訪。隣家のうら島轉宅す。

二十二日　はれ。早朝おかう樣來訪、小柳丁よりもち月のつまも來る。となりより緋鯉三尾あづかる。はがきをほしの君に出して文學界の寄稿を辭す。

うき世にはかなきものは戀也、さりとてこれのすてがたく、花紅葉のをかしきもこれよりと思ふに、いよ〳〵世ははかなき物也。等思三人、等思五人、百も千も、人も草木も、いづれか戀しからざらむ、深夜人なし、硯をならしてわがみをかへりみてほゝゑむ事多し。

にくからぬ人のみ多し、我れはさはたれと定めてこひわたるべき、一人の爲に死なば、戀しにしといふ名もたつべし、萬人の爲に死ぬればいかならん、しる人なしに、

怪しうこと物にやいひ下されんぞそれもよしや。

よの人はよもしらじかしよの人の
　しらぬ道をもたどる身なれば

二十四日　午後馬場君來訪、本町にておもしろからぬ事ありしげにや、ものいひいとゞ激したるやう也、夕げ共にしたゝめて更るまで語る、雨俄かに降出ぬるにかさを參らす、駒下駄にては如何と、女ものにてをかしけれど、それをも參らすれば、笑ひてはきゆく。

二十五日　木曜なれば野々宮、安井の兩君來る。これより先、馬場ぬしの下駄かへしに參られしが、しばしにて歸る、けふ平田を伴なはゞやと思ひしに、まだ身のゆく方さだまらねばとて、いと耻かし氣なるに、そのあたりまではつれ來しかど、得伴なはぬなどかたられし。

二十六日　大橋乙羽君早朝に來訪、ながくもの語りす、此夜小出君來訪、もの語多し、西村君も來られしがはやくかへる。

二十七日　小石川けい古なり、さしてをかしきことも聞えず。

二十八日　此朝護國寺に花みる、上野の房藏來る、穴澤の清次、西村の禮助及び本宅の子息など來訪、夕暮ちかく野々宮君參りて、弟子への敎授方などつげらる、此夜馬場君來訪、きのふも此家の上まで來たりしかど、さのみはとて得も立寄らざりし、小金井の紀行文、社よりは掲載をことはられたるに、君だに見すて給ひそとて見す、此夜もいたくふけてかへる。

二十九日　午後俵田初音けいこに來る、此次よりは日曜にといひやる。日くれ近く小出ぬし來訪、くちなしの花一部送らる。

三十日　ことなし、午後師君を訪ひて、前田家が題字の催促をなす、今一兩日のうちにはかならずといふ。

五月一日　書を久佐賀のもとへ送る、金子早々にとたのみやる、嶋田の妻來りて手紙をたのめるに書てやる、午後久佐賀より書あり、博覽會見物がてら京都へゆきてかの地よりの狀なり、六月末ならでは歸宅すまじとの事、さては留守へ文さし出したる事成しと笑ふ、金子の事さらばむづかし。

浪六のもとへも何となくふみいひやり置しに、絶て音づれもなし、誰れもたれもいひがひなき人々かな、三十金五十金のはしたなるに夫すらをしみて出し難しとや、さらば明らかにとゝのへがたしといひたるぞよき、ゑせ男を作りて、髭かき反せなどあはれ見にくしや、引うけたる事とゝのへぬは、たのみたる身のとがならず、我が心はいさゝ川の底すめるが如し、いさゝかのよどみなく、いさゝかの私なく、まがれる道をゆかんとにはあらず、まがれるは人々の心也、我れはいたづらに人を計りて、榮曜の遊びを求むるにもあらず、一枚の衣、一わんの食、甘きをねがはず、美しきをこの、まず、慈母にむくひ、愛妹をやしなはん爲に、唯いさゝかの助けをこふのみ、そも又成りがたき人に成りがたき事をいはんや、我れたのみかれうけ引ければこそ打ちたのむなれ、たのまれて後いたづらに過すはそもたれの罪とかおぼす、我れに罪なければ天地おそろしからず、流れにしたがひていかなる淵にもおもむかんなれど、しばらくうきよの淺はかなるをしるして、自をしるをしへの一つにかぞへんとす。

二日　早朝書あり、安達の妻よりかねてのかり金催促の趣き、五圓斗のなれどもいまは手もとに一錢もなし難きを如何にせん、其よしいひて今しばしの日延をと母君

にたのむ、午後歸宅故なく濟みつるよし、かしこにては今年あらたに新室を作りて、それが壁額を我れにしたゝめもらひたしとてひながたよこす、うき世はつねなし、つねは我身貧にしてかれとめるから、無心合力など恐ろしうて、え近づかせじとふるまふを、さるおのれらに、我が常住の室の壁上にかゝぐる額書かせんとするよ、さまざまなるかなと打ほゝゑまれぬ。久保木より小でまり、白つゝじの花をもてく。四時頃より野々宮、安井も來る、和歌一巡おはりて源氏もの語講義をなす、のちには打とけてさまゞ物がたるに、野々宮は例のあざれ出して、此ほど廊下にてすれ違ひたる馬場ぬしの事を評す、容貌は如何成しかよく見ず、人物のあたへはある人なりといふ、遠慮なき評をかの人に加へば、これより多望の時ならずば失望の時來たらんことうたがふべからず、そは大いなる失望か多望なるべしとほゝゑむ、一人しのびてはじめは笑ひしが、ゑたへかねて高く笑ふ、何故ともしらで聞居れば、猶詞をつぎていふやう、君にしてかの人の妻たる事をうべなひ給はゞ、かの人は幸福の人也、君にしてこれをしりぞけ給はんか、かの人は大失望のさま目にみゆるやう也とかたる、そは又ようゐならぬ事よと笑ふに、一座こぞりて笑ふ、日沒近く人々はかへる。此夜母君及び

國子として伊せやがもとにはしり給ふ、金四圓五拾錢かり來る、はやく臥たり。

三日　朝來かぜはげし。午前より田中ぬしが月次會におもむく、家を飯田丁にうつされてよりはじめての會也、いたく尋ね佗にたり、歸宅せしは日沒前、留守に馬場君來訪ありしよし、いと失望して歸られしとか、氣のどく成し。

さりし日、孤蝶の君と秋骨ぬしとふたりして來る、秋骨少しほゝゑみながら、孤蝶君の君に參らせ度ものあるよしにさむろふうけさせ給ひなんやといふに、そは何をと問へば、何にもあらずと孤蝶子打けす、しばし物語るほどに、過る日社中打つどひて寫眞うつしたるよしに聞きけるを、一度は見せ給へなどいひ出づるに、そは事なしいざ出し給へと秋骨そゝのかせば、孤蝶子笑ひてふところをさぐる、半身像の寫眞也例には似ずあら縞のねんねこといふ物をきてそりかへりたるさま、何やらの親方おぼえてをかし、いとよくうつりたる事とたゝゆれば、孤蝶子滿足におぼすべしと秋骨かへりみる、やう〳〵かたりて源氏のあげつらひなどするに、我れはいかにもをかしき事のあり、よにすき物の仇人とてそこにかしこに色めき渡るかの君にして、うきよのひまなきを打なげくをかしさよ、ほんやくの筆せはしきにも非じ、洋書の取しらべむ

つかしきもあらざらましをと秋骨のわらふに、そは君達あやまれり、人しらぬ戀に心を盡して、秋の長よをいも寐られず、細殿わたりたゝづみありき、起ゐて一人文かきやるなど、いかでか心のいとまあらんや、大やう戀は人にいはれぬくるしみなればこそさもよの中いとまなきやうに覺えけめ、戀する身ほどつかはるゝはあらじをといへば、さは今のよは開らけにけるよ、我れはかゝる人をかく戀わたるに此事なりなんやなど友どちいひかはすに、そはおもしろし、大方は成らん、さらば橋渡しを君にたのまん、よし引うけぬなどいふをこ者もさむろふとて孤蝶子をかへりみて笑ふに、これも苦るしげに笑ふ。

孤蝶子が父君ことしは七十三に成り給へるが、我が爲にとて筆筒にあしにかにの方ほりて給りぬ、これをも孤蝶子もて來て、返禮には歌よみ給へとぜむ、秋骨何かものいひたげにありしが、孤蝶子の君をおもふこと一朝一夕にあらず、その熱度のたかきこと斗り難しといふに、そはかたじけなきことゝほゝ笑み居れば、さすがにあとのつぎかねて口をつぐむ、多く聞かんは佗しかるべし、かうやうの事何よりもつらし、かくありける後いとゞ孤蝶子のあし近きなんあはれなるやうにてかつは心ぐるし、も

のへ行ては一日もかゝず文いひおこし、野べにつみつる花なんど送り來たるうれしけれどもわびし、人にはつゝむなるひめ事もらさずもの語りなど、いよ〳〵はかなし、君をばたゞ姉君のやうに思ふよなどいひ〳〵てとひよるに、五日とほどを隔てたる事なし、あはれ此おもひ今いくかつゞくべき、夏さり秋の來るをも待たじと思へば、ゆく水の乘せてさる落花にも似たり。

いづくより流れきにけん櫻花
かき根の水にしばしうかべる

水の上（二十八年五月）

五月四日　小石川けい古也、早朝よりゆく、田中ぬしが來會おそからんとの事成しかば事かゝさじとてなり、ひるすこし前君も來る、今日入門の人、波多野初枝とて十五斗のむすめあり、紹介は堤ぬし成き、午後早々にみの子君かへる、古今集講義われのみにて終りき、人々の歸る頃より師君頭痛はげしきよしをもて床にいる、さしたる事にはあり氣にもあらず。

此夜馬場君、平田君來訪、ものがたること多し、ふけて歸らるゝに雨降り出づ、平田ぬしに傘のなければこゝなるを參らせぬ。

五日　母君芝の兄君がもとへゆく、金子少しもらはんの約束ありし也、午後山下の信忠及び西村の釧之助來訪、日沒少し前母君歸宅、清正公御守り頂戴し來れりとて西村にもやる、此夜安達よりたのまれの額を書く、太陽五号來る。

六日　早朝母君は奥田へ、われは安達へたのまれの物もてゆく、老人のよろこびいとことゞし、新聞雜誌などに折々わが名の見え渡るを、物馴れぬ人の目にいかゞけ

うなる事とや思ひけん、當り難きほめ詞など中々にはなじろまれぬ、亡父君あらばいかに悅ばれん、あはれ見せたかりしなど、老人はほろ〳〵と打なきてさへいふめり、我がはし書の文すこぶる心を得たりとてあまたゝび吟じかへす、歌は水戸の烈公が偕樂園にかゝげ置しそれをとのたのみ成しかば、はし書はたゞ斯くぞ、

水府何がし園のうち、亭あり、壁上にかゝぐる所の文字優に源烈公がおもかげをしめせるもゆかしければと、こゝにかり來て、市のちまたのかくれ家におく。

やがて新室の壁にかゝげて貴覽に備ふべしなど家内こぞりて喜ぶ、しばしかたりて歸る。日沒少し前野々宮君來訪、次の木曜日中島の月次會なればけいこは金曜にかへ給ひてよと文したゝめし所成き、折よしとてその旨つぐる。

小出つばらぬしが家集、くちなしの花といへる名もいとことなれりや、紫のおもとがそしりし和泉式部のそれとはうらうへの心ばへなめり、大方世にもてはなれてひとり思ひ得たるまゝを筆にすなれば天眞らんまんとやいはん、豪放なる體などはいふを得べし、なほ子細に見もてゆくに、誠に君は智惠の人也、常々我れにさとし給ふやう、

和歌をつくらんとおもふなかれ、おもひ得たるまゝをよみ給へかし、人智かぎりあり、天地のきわみあるべからず、學もと用なし、經驗恐るゝなかれと仰せられしものから、猶君の歌にも智惠あるこそうたてけれ、しゐてをさなびたるは誠の心ならねばかひなし、君が歌は幽玄のさかひを極むることいまだ百里のかなたなるべく、富士の根の歌にいはく、

一たびはのぼりてみんと昔しより
　見るたびおもふ雪のふじの根

心情すでにをさなからず、無欲世界に到らんこと君の身として成るべきや、智惠はしばし人智をかすめて天眞に近しと見せしめしのみ。

七日　母君ちの道氣にてなやましうせさせ給ふ、午前浦島の妻來りて郵書をたのむかきてやる、午後西村の禮助あそびに來る、夕ぐれまでありたり、かゝりしほどに馬場、平田の二君上田柳村君を伴ひて來られしに禮助はかへる。まとゐのむしろ酒なければ醉へるが如く、一さらのすもじをかこみて三人の客が論難評語わらひつかたりつ平田ぬしなど積日の苦をみながら忘れぬといふ、こよひを戰の門出として孤

蝶、禿木の兩君は例のしけんにかゝられんとす、萬は凱旋の上とて意氣すこぶる高し、上田君名は敏、帝國大學文科生にして帝國文學の編輯人なるよし、溫厚にして沈着なる人がらよき人也、はやう中島のもとにて姉弟子也し乙骨まき子ぬしがいとこと聞くに、初見とも覺えずいとしたしまれぬ。

馬場君袖をかゝげ膝をうちて、我れは言はんと欲する所をいふのみ、我れを一葉女史にこぶるものとあやまるなかれ、よきをよきといひあしきをあしといふもと我がこゝろ也、太陽第五号にのする所の一篇ゆく雲を見てよしと思ひしは我がおもひし也、一葉女にこびるならずと、其いふ處さかん也、平田君は萬づ言少なにて、耻かし氣をつくれるもをかし、馬場君戀をとけば、顏をそむけてもはや止め給へとくるしげなるも此人に似ずとかつはほゝゑまれぬ、人物評に詞まじへず、人の聞をはゞかるに似たり、頭髪みじかくはさみあげて、今朝のほど床やが手にかゝりしとおぼしく、衣類など見よげなるをまとひて來たり、先きの夜君のもとにて平田はしくじりの詞をならべしかば、君にいたく論じられていとくるしがりて逃げしが、道すがら我れにしば〳〵いふやう、今日は歸り際いとわろかりし、一葉君誠にいかりしにあらずや、もしさらばいかにせんと心細げにいひぬ、今日は又我がもとに來て、我れはこれより一葉君をとはんと思へど、一人にては何となくつゝましく、君もろ共に行て罪を謝し給ひてよと三拜してたのみしはをかしかりしと馬場君興に乘じてかたれば、そは僞也、そは僞也、我れはさる事いひし覺えなしといふ、何覺えなしといふか、その顏を今一度見せよ、この僞りものめと、さかんなるは孤蝶子也、われは一葉君の我まゝ息子なれば此家にては遠慮をせぬに極め居れりとて、膝をくづすも磊落の風中々にをかしけれど、平田ぬしがおもゝち常ならず見えぬ、歸宅せしは夜も十時にちかゝりし、

夏はやし女あるじがあらひ髪

とは馬場ぬしが當座の句成し。

此夜西村の釧之助君も來訪。更けて火事あり、九だん坂のほとり成るよし。

八日　晴れ。あす木曜日なるに中島の會さし合へば、野々宮、安井兩君のけい古を今日の方になす、安井君より松嶋の硯を送られぬ、暮てかへる。

此夜西村君刀劍及び南州の軸物持參、これを質入して金子五十金斗得たしといふ、母君同道伊せやがもとへゆくに、目利とゞかねばとてとゝのひ難し、すでに今宵は十

時を過ぎぬ、明けぬればやがて入るべき追證據の金也、いかにせんと當惑の額をあつむ、さらば致し方なし衣類をもて來給へ、明早朝伊せやを口說き、三十四十は作るべしといふに、さらばと約して西村君かへる。

九日　早朝禮助衣類を持參、六品あり、その外に銀時計一箇、合せて四十金と申せしに、伊せや中々事むづかしういひて僅かに二十二を用立しのみ、さらば甲斐なし、これを一まづ西村に持せやりて、此日くれまでには、あらんほどの我等が衣類取まとめて猶明日の追證據を作らばや、そのほどには又よそより金子のかり入れもつくべしなど語りあふほどに、釧之助も參る、右の事をかたりその金子の不足ならんを問へば、いなこれほどあらば何とも成るべし、今日だにすまばその後は事なしといふ、さらばとて一同むねを安めぬ、十時ごろより我れは中島の月なみ會にゆく、會する人三十八斗、しるすほどの事なし、今日久保木の長十郎來る。

我急を見て手を空しくせず、うらはとに角表面上なすほどの事をなしくれたる人、我にても又むくはざるは道ならず、西村ぬしの爲に力を盡す事このほかに何事もなし機一髮のむつかしき商買に身をゆだねればかゝる事折ふしあらんとす、あやふきをもて樂しみとするも又人の一くせならずや。

十日　姉君來訪、ついで秀太郎も來る、長くあそびたり、日暮れて馬場君、平田君袖をつらねて來らる、今日高等中學同窓會のもよほしありて平田ぬし其席につらなりしが、少し酒氣をおびて一人寐んことのをしく孤蝶子を誘ひて君のもとをとひし成りといふ、このほどの夜とかはりていと言葉多かりし、孤蝶子例によりてをかしき事どもいひちらす、哲理を談じ、文學をあげつろうにほこ先つよし、夜はいつしか更て十時にも成ぬ、いざ歸らむと馬場君いへば、秀木子窓にひぢをもたせてはるかに山のかたをながめつ、いかにしても僕は歸ることのいやに覺ゆるといふ、こはあまりにうちつけ也、少しつゝしめよと孤蝶子大笑すれば、今しばし置かせ給へと、此度は時計を打ながめていふ、月は今しも木のまをはなれて、やゝのぼらんとするけしき、村くも少し空にさわぎて、雨氣をふくみし風ひやゝかに醉ひたるおもてをなでゆけば、平田ぬしあはれよき夜やとかうべをめぐらしてはたゝへぬ、いかで一句と孤蝶子をうながすに、

月のまへにわか葉のそよぐこよひかな

景は句をのみ情を沒して、默々の間にたゞよきよと斗おもはるゝもをかしと例の笑ふ、いかに禿木子さはあらずや、我れは一葉ぬしがもとを訪ふごとに、唯しばし物語りせんのこゝろいつとなくゆるびて、いつも日をつゐやし夜を更して歸りては、しばしば氣の毒のねんおこりながら、こゝにある間は何事もみなからわすれて歸り難きはあやしけれど、こは我れのみにもあらじ、君はいかにといふに、誠にさ也、今日はことに一時間斗のこゝろ成しをとてともにわぶるもいとをかし、試驗も近づきぬ、かくそゞろに遊び居るを秋骨きびしく異見などつらければ、かく夜更て歸らん事佗し、今宵は孤蝶子のもとに泊まらせ給へ　かれのきびしきにはほと〳〵難義を極めぬとかしら重げ也、そゞろによもふけぬ、十一時をうつかねの音に、さらばとて二人共にたつ、をかしき辻占をひらきて、これたまはらんと孤蝶子袖にしてかへる、こゝろ多き人よの。

時は五月十日の夜、月山の端にかげくらく、池に蛙の聲しきりて、燈影しば〳〵風にまたゝく所、坐するものは紅顏の美少年馬場孤蝶子、はやく高知の名物とたゝえられし兄君辰猪が氣魂を傳へて別に詩文の別天地をたくはゆれば、優美高傑かね備へて

をしむ所は短慮小心大事のなしがたからん生れなるべけれども歳はいま二十七、一たびおどらば山をもこゆべし、平田禿木は日本ばし伊せ町の商家の子、家は數代の豪商にして、家産今やうやくかたぶき身におもふこと重なるころとはいへれど、文學界中出色の文士、としは一の年少にて二十三歳也とか聞けり、今のまに高等學校、大學校越ゆれば、學士の稱号めの前にあり、靜かに後來を思ひて現在を見れば、此會合又得べしや否や、長やかなるうなじを延べて、澁茶一わんまた一わん、醉醒は甘露の味と舌打しつゝ、辻占を開らきては甲笑ひ乙うらむ、二人の間に遠慮なき談笑を交せて時に大議論の評者になるなど、つく〴〵思ふてをかしきこと二なし、わが身は無學無識にして家に産なく、緣類の世にきこゆるもなし、はかなき女子の一身をさゝげて思ふ事を世になさんとするとも、こゝろに限あり、智惠の極みしるべきのみ、かれは行水の流れに落花しばらくの春をとゞむるの人なるべく、いかでとこしへの友ならんや、親密〳〵、こはこれ何のことの葉ぞや、平田ぬしとはをとゞしの春より友也、馬場ぬしは一年の知を得たる斗、さりとも人情のさかんなるに乘じては相逢ふ事しばしもだし難く、一と月のほどに七度の會合多しとせず、それが中にていかにつもる言の葉ぞ

や、二度三度の文さへおこしぬ、我れよしや運ありて雲井の庭に遊ぶとも君がやへもぐらかならず訪はん音づれぬべし、はにふの小やは物かは、水火の中也ともその志は見すべしといふ、偽のなき世也せばいか斗此人々の言の葉うれしからん、人はかなき世にはかなき言の葉をならべてとかくの契りなどこはもと夢の中なるたはむれ成けり、此人々と我れもとかり初の友といふ名のもとに遊ぶ身也、うき世の契りに於ていと輕やかなる友の中也、さりとも猶此輕やかなるちかいさへ末全からんや、まして情にはしり情に醉ふ戀の中に身をなげいるゝ人々いかに秋風の葛のうらみつらからざらん、夜更て風さむし、空ゆく雲の定めなきに月のはれくもる事今さらの樣におもはれて、燈火のかげにものいふ孤蝶子も、窓によりて沈默する平田ぬしも、その中にたちて茶菓取まかなふわれも、たゞ夢の中なる事ぐさに似て、禿木ぬしがいはゆる他界にあるらん誰人かの手にもて遊ばるゝ身ならずやと、思ふ事深し、きのふは他人にして今日は胸友たり、今日の親友あすの何ならん、花は散るべき物とさだめて猶暮春の恨みたれもありぬべき事、こよひの會合をしばらくしるして、袖の涙の料にとたくはへぬ。

十一日　は小石川の稽古日なり、來る人二十人に近し、空あれて雨さへ降出づ、太陽五号中村君持參されてわが小説を人々に見する、小笠原ぬしかりてゆくに、田中ぬしも見たしと約す、家にかへりしは日沒ちかゝりし、夕飯終りてはやく床にいりし。

十二日　晴れ。野々宮君より添書ありて石黒とら子入門、つれ〴〵草講義、雅俗の文章まなび度よし、二時間斗をしへて歸す、同じ時に三枝の信三郎君來訪、十二時ちかくに歸る、中島の師君より前田侯爵、同夫人の書を郵びんにたくして送りこさる、こは博文館が百科全書の禮式の部にかゝぐべき題字也、侯爵のは禮の一字、奥がたの歌は師君代作なるべし、

里人も田に引く水のむらそはで
みちをゆづれるよと成にけり

かくぞ有し、かしこにても取いそぎつゝあらんを思へば、直に車夫にもたせやる、主人不在なりとて狀箱を取置たるまゝ使ひをかへされき、此夜入浴の後藥師の御緣日に草花みる、よふけて寐たり。

十三日　早朝、野々宮ぬし及び在清國芦澤より書狀來る、日清媾和とゝのへればや

がて無事歸國なすべく、當時は金州附近に宿營のよし通知也、野々宮君よりは、音樂會の切符とゝのへ置たれば、他より求むる事見合せ給へとの事也、十八日美土代町にてあるべき青年音樂會の也けり、十時に近きころ大橋君のもとより使あり、きのふの禮及び太陽五号にのせたる我小說をば原抱一庵の國民の友にて細評するよしいひ居るとか、夫丈申こされたり。

十五日　午後馬場君來訪、春陽堂がしやしん畫報及び文藝くらぶ四号をかさる、夕はん共にしたゝめて、夜にいりてよりかへる。

十四日　ほしの君より、文學界の寄稿かならずとたのみこされたる物から、いまだ一文字もしたゝめ難し、今日は十七日也、今いく日のほどもあらねばこゝろしきりにいらるゝ　せんなし。

今日夕はんを終りては、後に一粒のたくはへもなしといふ、母君しきりになげき、國子さま〳〵にくどく、我れかくてあるほどはいかにともなし參らすべければ心なゝ勞し給ひそとなぐさむれど、我れとて更に思ひよる方もなし、朝いひ終りて後、さら

ば小石川へだに行こゝろみんとて家を出づ、風つよくしておもてもむけがたし、師君のもとへゆきて博文館よりの禮などのぶる、流石に金子得まほしきよしをもいひがたくて、物語少しするほどに、師君起て例月の金二圓ほどをもて來給ふ、うれしともうれし、やがて暇をこひて歸るに、家には宮塚の老母訪ひ來居られたり、ひるいひ出しなどす、午後伊東夏子ぬし來訪、ものがたり少しゝて、同人は齋藤竹子ぬしがもと訪はんとてゆく、日くれ近く宮塚の老母かへる、引違へに西村君來訪、齋藤ぬしよりつかひにて手製のすしを送られき、人々歸りての夜にいりて、國子しきりにわか竹にかゝり居る越子一座の明日のよ限りにてよそへ行くべきをいかで聞かばやとうながすに、さらばとて家を出づ、午前はけふかぎりの食とて胸を痛めし身が、夜にいりてはよせへ遊ぶ、世はすべて夢也、聞しはこし子が三かつ酒や、こし六が太かう記、そのほかにもありけり、こし子はとし廿四五斗、あやの助にくらべて三だんの上に居るべく、小清にくらべて三だんの下なるべしなど評す、熱意は聞く人の情をうごかして、此としわかなる藝人が前に髭男のなくもの多し、冷語聞えず場面靜か也き。

十五日　馬場君來る、しけん第一回首尾よし。

十六日、木曜なれば野々宮、安井けい古に來る、おかう樣も來訪ありしが、母君淺草へ參られし留守成しかば早く歸りき。

十七日　一日雨ふる。かしらのわるくていと寐ぶたきに、終日床にあり、夕ぐれよりおき出づ、師君より明日興風會例日なればけい古は日曜にとはがき來り、關場君のちとより藤子が病氣の容體申こさる、星野君より文界學の寄稿かならずと申こされしは十四日成しが、いまだに筆取ることのものうくて、一回の原稿もしたゝめあへず、二十日ごろまでにと思ふにいよ〳〵かしらいたし。

時は今まさに初夏也、衣がへもなさではかなはず、ゆかたなど大方いせやが藏にあり、夕べごろより蚊もうなり出るに、蚊や斗は手もとにあるなん、これのみこゝろ安けれど、來月は早々の會日などひとへだつ物まとはではあられず、母君が夏羽織これも急に入るべし、ましてふだん用の品々いかにして調達し出ん、手もとにある金はや壹圓にたらず、かくて來客あらば魚をもかふべし、その後の事し斗がたければ、母君、國子が我れを責むることといはれなきにあらず、靜に前後を思ふてかしら痛き事さま〴〵多かれど、こはこれ昨年の夏がこゝろ也、けふの一葉はもはや世上のくるしみ

をくるしみとすべからず、恒産なくして世にふる身のかくあるは覺悟の前也、軒端の雨に訪人なきけふしも、胸間さま〴〵のおもひをしばし筆にゆだねて、貧家のくるしみをわすれんとす。

梅雨のふるき板やの雨もりに

こやぬれとほる袂なるらん

隣にすめりし人家移りすとて、その池にかひたる緋ごひ金魚などかず〳〵我家にもて來てあづけぬ、大いなる魚共のひれを動かし尾をふりておよげるさまいとおもしろく、來る人ごとにほめたゝゆれば、いつとなく我物のやうにおぼえて、斗らざるに庭上の奇觀をそへたるなどよろこびあひし、ほどへてかしこの妻なるものその家に池のほれしかば魚たまはらんとさでなどもて來たり、いざとりて行給へといへば中にいりて追ひ廻るに隣りよりおこしたる少さきは得よくも取がたく、もとより我が池にありし大いなるをのみあつめて、數にみたしてもて歸る、それしか非じともいふにうるさければ取るにまかせてやるを、母君などいとにくがり給ふ、かくあるにて思へば、世は誠に常なきもの也、きのふおもしろしと見る事なくば、今日の殘りをし

き思ひあらんや、斗らざるに景色をそへ、斗らざるに景色を損す、つく〳〵おもふて、榮華も富貴も一朝の夢なるを思ふ事切也。

十八日　の夜はじめて大音樂會場にのぞむ、新知己を二人得たり、場のありさま心よはき身の胸つぶるゝ如し。

十九日　午前のうちだけ小石川稽古を斷りて、石ぐろ虎子がけいこをなす、野々宮君やがて來訪あり、もろ共にひるいひたべて我れは小石川へゆく、歸りしは日沒近かりしが、西村君來訪ありけり、留守のうち穴澤の清次及び半井のぬしおはしたるとか、清次の事は事なし、半井ぬしはいかにしておはしたるにや、夢かとたどられて何事を仰せられしと聞くにあわたゞし、むし菓子一折を送られしよし、別しての物がたりもおはせざりし、姉君を迎へこんと幾度もいひしが否さしての用事も侍らず、久々にて御不沙汰見舞に參りつる也とて歸られしといふ、とにかくにむねつぶる。

二十日　野々宮君及び兄君にはがきを出す、兄君のもとへは家に不用の蚊やあり時節柄入用あらば送り參らせんとて也、野々宮へはきのふ半井ぬしのいひたる令妹上京中なれば暇を見て訪はせ給はんはいかにと也、夜にいりて馬場君及び秋骨子來訪、

孤蝶君けん定しけん第二回を本日受け給ひしよし、かならず落第ならんとてかしら重げにしをれて見えき、物がたりさま〳〵して夜更てかへる。

二十一日　午後門にあわたゞ敷くつの音してはせ入る人あり、たれかと見れば孤蝶子、きのふのしけん首尾よく行たりし事今見て來たりぬ、少しも早くしらせんとてかくはいそぎ來つるとうれし氣のそ振共に〳〵うれし、日暮まで遊びてかへる、此夜小出ぬし來訪、ものがたり多し。

二十二日　平田君來訪あるべき約あるに、終日までども來たらず、佐藤の梅吉及び西村の禮助來る、梅吉ははやく歸りて、日沒近く釧之助來訪、相場の場面今朝來一變して、月はじめよりの玉殘らず復活、元の外に二十の利益ありき、これより直に例の伊せやがあづけを引出し給はれとて、喜色まん面にあふれぬ、よろこびなりとて一同にうなぎの馳走をなす、かくありしも全く君達の周せん盡力による事とてかたじけながる事二なし、きのふは馬場ぬしの喜びあり、今日は西村の吉報をきく、家は貧たゞ迫りに迫れど、こゝろは春の海の如し。

水の上（二十八年五月）

五月二十三日　野々宮君けい古に來る、安井君は風邪のよしにて休みなり、大橋君より日用百科全書和洋禮式の部出版成しとて、前田家及師君、我がもとへも各一本を送らる。

二十四日　早朝大橋君のもとを訪ふ、はじめて妻なる人にあふ、乙羽ぬし出勤の後も久しくかたる、何かふるき書きものにてもよし文藝倶樂部のかたへ出さんといふに、家に歸りてかたれば、そはいとよし、此みそかのしのぎをつけんほどに、甲陽新報にのせ置し經机はいかにとて人々うながせば、さらばとていさゝか色をそへなどす、かゝるほどに西村君來訪、かくしか〳〵などかたれば、さのみに心をな苦しめ給ひそ、みそかの事は我れすべしとて、取あへず五圓ほどを殘しゆく。

二十五日　小石川けい古なり、出がけに大橋君へ小説原稿を送る、けふは馬場ぬしが成否さだまるべき日よと思ふにむねさわがるゝやうなり、家にかへりてしばしあるほど孤蝶子より書あり、八十人の受驗者やう〳〵にへりて殘りは六人なり、その中に

君もあるよし、親なる人々がよろこび思ひやられて涙ぐまるゝほどうれし、今宵わかが竹に國子を誘ふ、更てかへれば、馬場君さらに來訪ありしよし、そは無禮成しと佗しがる。

二十六日　午後西村君來訪、やがて生まるべき子のまうけなど更になし置くとも見えぬを母君こと〴〵くとがめて、いざ衣類など買ひにゆかん、そのしろ出せとてあわたゞしく西村がり行く、釧之助はなほ殘り居て、さま〴〵に身の不幸をなげく、はてはなさけなげにと息つきて、我れは此世へくるしむ爲に生れ來つる身か計りがたし、思はぬつまに思はぬ子など出來るなん淺ましとも口惜し、幸ひにしてあの子うせなばよろこばしけれども、猶いのちありてながらふることならば、つひに乳母としてもかれをとゞめ置かざるべからず、さてはいよ〳〵我が生涯のおもしろからぬに、せめては君達だに見捨て給ひそ、こゝに來てかく物がたり暮すは心くるしけれど、しばしの極樂として寄り來る身をすくひ給へ、猶金錢に事かく折もあらば、そは遠慮なくつげこし給ふぞよき、我れにあたふほどの事は何時にてもなすべしなどいふ。かゝるほどに馬場君、平田ぬしつれ立て川上眉山君を伴ひ來る、君にははじめて逢へる也、とし

は二十七とか、丈たかく色白く、女子の中にもかゝるうつくしき人はあまた見がたかるべし、物いひて打笑む時頬のほどさと赤うなるも、男には似合しからねど、すべて優形にのどやかなる人なり、かねて高名なる作家ともおぼえず心安げにおさなびたるさま誠に親しみ安し、孤蝶子のうるはしきを秋の月にたとへば、眉山君は春の花なるべし、つよき所なく艶なるさま京の舞姫をみるやうにて、こゝなる柳橋あたりのうたひめにもたとへつべき孤蝶子のさまとはうらうへなり、君の名を聞初しはもはや四年かほど〳〵五年にも成るべし、參りよる折を得がたくて御近けれどもかくうとくは過ぬ萬づに心隔ず物語をたび給へとて打とけてかたる、來月あたり合綴のもの春陽堂より出さんはいかになどいふ、小説中の人物のこと、世間の事、我どちが業のくるしき事、朝寐なる事、自だ落なる事、正直なる事、損なることなど語り出るに極みなし、やがて馬場君政治を論じ出せば、眉山君手を打て、さなり面白しと一口ませにいふ、平田ぬしも首尾よくしけんの及第したるよし、此人は言葉少なにて、折ふし孤蝶子をたしなむ樣なる詞づかひあやし、人々の來たりしは三時頃成し、五時といふより雨降り出づ、かき暮し降るほどに日の暮れゆくも知られず、うなぎ取よせなどして人々

にまいらす、歸りしは九時成しが、雨やまずして空くらし。

二十七日　中牟田つね子ぬしが數よみの會小石川にて催す成き、終日よむ、さのみは事なし。

二十八日　午後大橋の妻君わがもとへ和歌の門にいり度よし申來る、しばしかたりてかへる、引違へに野々宮、安井君來訪、明後日の木曜主上が御出むかへをなすべき筈につき、參上むづかしきか斗りがたしとて、歌よみに來しなり、日くれがたまでありて歸る。月謝を持參されき、此夕べ眉山君おとつひかしたる傘を持參、けふは又ことにうるはし、あがり給へといへば、今湯にいらんとて門には人もまてればといふ、見れば手ぬぐひさげたり、金ぶちの眼鏡に黄金の指輪など、誰が目にも天晴の小説家と見ゆらんを、こゝかしこの書肆に借財つもりて、一部を終れば一部のくるしみ眼の前に迫れる身としる人はなからん、これを此人々が境界かと見るに、我が身もかへりみられてあはれにはかなし。此夜にいりて馬場ぬし來訪、文學界の事につきて憤ることと深げなり、退社せばやと思ふなどかたらる、かゝる事は大方の人にいふべきにもあらねば、常に親しといへど秋骨にも藤村にもえもらさぬ也、君は姉君のやうにおぼゆ

れば、こゝろのうちもらさずつげまつるとて、憤をおびたる顏もち淋しきやうにすごきやうなり、あまりに潔白に過ぎ給へばつひに人と衝突し給ふなり、さりとてよの人なみにうらおもてを置かせ給へと申ならねど、さのみ人事をこゝろにかけずゆるやかにふるまひ給へ、御老親おはします上に御身もすこやかならず、世を打佗て御病ひなど引出し給はゞいかにせん、何も御心にとゞめ給ふなといふに、いとよく承りぬとて、涙のこぼるゝとおぼしくしば〳〵眼鏡をぬぐひ居たり、とある時は熱のおこりたるやうにさわがしく、ある時はこゝろのそこまで冷えたるやうに沈みいりぬ、こはこれ神經のする業なるべく、一つには家に傳入し高潔なる風のうきよにかなはで心もだゆるあまりわかき人のならひ血のさわぎはげしきなめり、文學界の內輪もめなどそのもと末をいかにとも知りがたけれど、我がもとなどにて馬場君の心安げにふるまひ給ふさま一つは禿木などによからぬ思ひをやいだかせたる、うきよのほかに立てる身はいかならん波のたゞよひもよ所に見るべきなれど、猶めの前にせまりたるあはれの見すぐしがたく、いかならんと思ふ事深し、此よも十一時に近きころ孤蝶子かへる、しけんの前より過度になしたる勉强のなごりと、よくなし得たる心ゆるび及びそのほか

にも猶いかならん事の身にさわられるか足は力なくかしらはさゝふるにたえぬやうにて、沓などよくもあがらず、筋骨なきやうに成てかへりゆく姿何とはなくかなし。

此日芦澤芳太郎より書あり、台灣總と〻附屬の身と成て、いよ〳〵かの地へ趣くべく成しに、これよりは病氣と戰爭との二つをこゝろみる覺悟なりなどいひおこす、文は野戰郵便規則により月一回のほか出しがたければ、此書をば佐久間、廣瀨の二軒及び故郷へも送り給ひてよなど有けり、かたの如く取あつかふ。

二十九日　晴れ。する事なしに過ぬ、惡るき流行すべきざしあればとて大掃除はじまる。日くれてより西村君來訪。

三十日　風少しそひて空ははれたり。

主上東都に還幸、即ち凱旋の當日なれば、戶々國旗を出し軒提燈など場末の賤がふせやまでいたりて、うらや住居するものは手遊やにうる五厘國旗など軒にさしたるもみゆ、着輦は午後二時成りといふ、十時ごろ安井君來る、これより高等女子師はん校一同と共に奉迎に趣かんとするを野々宮君こゝより參り給はんとありしかば誘ひに來たりしといふ、いな君はおはさずといふにさらば又のちに參らんとていそぎて出づ、

正午過より花火の音絶まなし、午後三時過ぎ芝の兄君來る、芝區民奉迎の徽章を胸にかけて、塵の中をはせめぐりしかばいたくつかれしとおぼしくまろぶやうにして來たり、酒の支度などするほどに、野々宮も奉迎終りて來る、利久ひはの三つもん二枚袷、もち論地はちりめん也、白茶二重どんすの丸帶、雪駄ばきにて來る、これもつかれて正體なきやうなり、今日の有樣はいかになど問へども、たゞいまだおぼえずかゝる騷ぎはと誰も〳〵いふ、かゝるほどに秀太郎も來る、安井君も今來るべしなどいひ居るほどに、てつ子のもとより使ひあり、止みがたき客ありて供に萬歳を祝さんなどありて出がたければとなり、さらばせんなしとて、野々宮には夕めし出しなどして、こゝなるひとへものかして歸す。兄君、秀太郎も日沒頃かへる。このよは早く寐たり。

三十一日　空くもれり。今日はきさきの宮の還幸あるべき日なればいかで雨ふらざらんやうにといのる。午前のうち母君西村へ見舞にゆき給ふ、家には秀太郎來る、博文館より經机の原稿料來る、午後母君及び國子右の金子持てゆかたをかひにゆく、明日のけい古日にきるべきものなければなり。

六月一日　小石川けい古にゆく、一昨日のものがたりおびたゞし、たれもゆきたり

かれも見たり、君はいかになどとひかはすに、誠にえゆかざりしは師の君、田中ぬしの一事といふ此大いわひにあひながら空しくその門さへ見過ぐさんや、さらばこれよりけい古終らば直にゆかん、車あつらへよなどもよふしたつ、四時といふに人々歸りて、我らは師の君を先に田中ぬしもろとも車いそがす、和田くら門を入りて坂下もんのあたりへ來るほど、こゝかしこに査官立ならびて、車おりよ〳〵ととゞむ、何事かと問へば、只今うへの青山より還御あるべきに、拜せんとならば、並立せよとなり、こは〳〵思ひよらずとてとゞまる、まだ御先おひの騎馬も見えねば、わたらせ給ふにほどあるべしとてあたりを見かへるに、われどもと同じく例の門見にゆく人々なめり田舍翁のよめごつれたる　わかき書生の老たる母いざなふもみゆ、車四五輛をつらねてよろしき衣きたる人などもありしが、いづれも御通輦を拜さばやとてをりゐるに、引すてたる車のさまなどそゞろにをかし、加茂のまつりのみ使わたるほど、こゝかしこに牛車のかさなりて物見の袖口など古代のものゝみめづらかにおもしろきやうなれども、黑漆金もんの車にほろ骨の朱なるもゑびなるもをかしく、白茶のびろうどに黑

き毛もてへりをとりたるひざおほひ、車夫はいづれも眞白き姿にて小松がもとの芝生にあつまりて、さすがにこわ高にも物いはず、おふこおろして休み居る市人と物いふさまなど、繪卷にして殘さまほし、あまりにことの優なれば、田中ぬし呼かけて、いかに此ありさま百年の後に見せば明治のよの古雅なるさまなど人たゝゆべしといふに誠にしかあらん、さりながら此物見には車あらそひのおこるべき美形もあらず、高貴なるなどかけてもあらで、みなわれどちの壺折姿どもかなと笑ふ、かくさしかけたる洋傘をもやがて長柄などいはずばみやびやかならずと笑ふに事さめてたゞほゝゑむ、と斗ありて騎馬の兵士まづ見え初ぬ、わたらせ給ふ也と人々靜まれば、御車たゞふたつして前後の人もさまで多からずたゞ靜やかに坂下御門よりいらせ給ひぬ、あはひはるかに隔たりたればえよくも拜しがたかりき、守りとくれば人々いそぎて車呼寄す、やがて凱旋門ちかく成れば、もはや取崩しに取かゝれりとおぼしく、取おろしたる杉の葉などこゝかしこに山とつまれぬ、さしもに大きやかなるものを時のまにいかで取くづし得べき、櫻田門に向ひし方斗は杉の葉なごりなく成て、組あげたる材木のみいと高々とあほがれぬ、車よりおりて內にいるに、もり砂の深さ中下駄の齒を埋めて、

折柄風さへあればいと佗し、すべてを杉の葉と樫もておほひたるに、さながら青地の錦しきもて卷たてたるが如し、前後三ところの門に、東京商人有志者何々などあらはしたるはかはらなでしこのこまかなるを紅白色々さしたるなれば、美はしくして中中にやさしく見えぬ、それもこれも日にてらされてやゝ枯れがたに成たるなんあはれなる、かくて取すてなば何方のかまどの薪木にかならん、かくめで度よのためしにあへりし物をばとてあはれがりて杉の枝一つ二つなでしこ一花二花つみとれば、師も田中ぬしもひとしく折る、かくて日もくれんとす、いつまであらるゝ物ならねばとて車にのれどもをしき事二なし、今度はかすみが關よりのぼりて外務省のうらをかへる、九だんの上へ出るまでは、たゞみほりの水のみどりなるをうれしく、松の枝ぶり芝生の色をながめて、ほどなくうしが淵ちかく成ぬ、こゝにて三人ともに別れて、おのがじゞ家路をさしぬ。

二日　早朝石黑虎子けい古に來る。午後西村君來訪、少し物がたりするほどに川上眉山君おはしぬといふ、奥なる部やへ通して茶菓など參らす。今日は先の日見たりしやうに、黃金の指輪、絲織の小袖などの華美なるにはなくて、博多結城のひとへに角

帶しめて羽織は着ず、入湯せんとする折なれば手拭もて來たり、いたく人世を思ひいりてせんすべもなく、物の辨別つき難く成し頃とて、かしらいたく氣のぼりて常に夢の中にあるやうの心地すといふ、今日もこゝろわるくてのみ暮しがたければ、しばしねぶらばやと横に成つれど、夫すらなしがたければ、せめては君のもとをも訪ひてめづらしき物がたり承らばやとて來つる也とかたる、こは君が筆に一轉化の來るべき時機なめり、ひたすらになつかしくやさしき方をのみ取出るやう成し人のかくて誠に心もだへば、人世のうくつらき、人の情のむりて無きなど、こまかにうつし出るやうに成なんも斗がたければ、こはこれ一級をすゝむる時ならんとうれし、もろともにかたる事多し、我が身の素性など物がたるに、さらば君は誠にをとなしくやさしき人におはしけり、思ひかけぬまですなほなる人成けり、さる柔和なるこゝろを持てかゝるうきよをかくまでにしのびて渡り給ふこと、下のこゝろのいづこにかつよき處のあればなるべし、男ごゝろのまけじ氣性にてするも、うきよの波にもまれては終におぼれぬ人少なきを、さるやさしき女性の身としてかくよに立て過し給ふ事よに有がたき人かな、自傳をものし給ふべし、今わが聞參らせたる所斗にても、たしかに人を感動さ

するねうちはたしか也、君が爲には氣のどくなれども、君が境界は誠に詩人の境界なるかな、おもしろき境界なるかな、すでに經來たり給ひし所は殘りなく詩にして、すでに〳〵人世の大學問ならずや、ふるひたち給ふべし、君にして女流文學に志し給はんか後來日本文學に一導の光を傳へて別に氣魂の天地に傳へるものあるべし、切に筆をもて世にたち給へなどいふ、そゝのかし給ふな、さらでも女子は高ぶり安きをとて笑ふに、君は誠に物つゝみし給ふ人也、よしゝからばこれより我れは書肆に斗りて、君のもとへ催促を打しきらすべし、人すゝめずば書かぬ人なめりとて笑ふ、やがて日も暮るに近ければ、又こそ訪はめとて立歸る、三年の知人に似たり。このよ國子と共に本郷にものをかふ、家に歸れば留守のほどに馬場ぬしおよび誰成しか外に二人三人づれの來客ありしが家にあらずと聞て歸りしとか、大方は禿木と秋骨なめり。

三日　田中の會なれども出がたし。午後より三崎町に半井ぬしを訪へば　飯田町の本宅におはします、かなたへ參らせ給へといふに、四丁め二十一番とて、田中ぬしとは一小路斗隔てたる處へゆく、黑塀にしだり柳など雅にもあらねど廣やかなる家也、五年ぶりにておかう君にあふ、取集めての吊詞などいふにこゝろうくたゞ涙ぐまれ

ぬ、鶴田ぬしがはらにまうけし千代と呼べるがことしは五つに成しが、いとよく我れに馴れてはなれ難き風情さことの母とや思ひ違へたる、哀れ深し、ちよ樣は我れをわすれ給ひしかといふに、房々とせし冠切りのつむりをふりて否やわすれずといふ、二階のはしごの昇りにくきを、我が手にすがりて伴ひゆくも可愛く、茶菓などはこぶをあぶなしといへども誰も手なふれそお客樣には我れがもてゆくのなりとて、こま〳〵とはたらく、かゝるほどに戸田ぬしが子も目さむれば、おかう殿いだき來てみす、まだ生れて十月斗のほどならん、いとよくこえてたゞ人形をみるやうにくり〳〵とせしさま愛らし、目もはなもいと少さくて、泣く事まれなる子といふがうれしければ、抱き取りてふりつゞみ見せ、犬はり子まはしなどするに、いつとなくなれて我が膝にのみはひよる、こはあやしき事かな、常にをとなしき子なれども見馴れぬ人にはむづかりて手をもふれさゝず、此ほど野々宮樣、大久保樣などあやし給ひしにいたく泣入りて困じにけるを、今日はかく馴れ參らせてよろこび居る事と、おかうどのいぶかる、半井ぬしほゝゑみて緣のあるなめりといひ消つ、すし取寄せ、くだもの出しなど馳走をつとむ。四年ぶりにて半井ぬしが誠の笑がほを見るやうなるが嬉しく、打くもりたる心

のはれる樣也、そのむかしのうつくしさはいづこにかげかくしたるか、雪のやう成し色はたゞくろみにくろみて、高かりしはなのみいちじるく成りぬ、肩巾の廣かりしも膝の肉の厚かりしも、やう〳〵にせばまりやせて打みる所は四十男といふとも僞ならず見ゆ、なつかしげに物いひて打笑むさま、さはいへど大方の若ざかりよりは見にくからず、たゞ誠の兄君、伯父君などのやうにおぼゆ、君はいくつにかならせ給ふ、廿四とや、五年の前に逢そめ參らせたるその折に露違はずもおはしますかなといひひて、こゝろおく方もなく語る、此人ゆゑに人世のくるしみを盡して、いくその涙をのみつる身とも思ひしらねば、たゞ大方の友とや思ふらん、今の我身に諸欲脫じ盡して、假にも此人と共に人なみのおもしろき世を經んなどかけても思はず、はた又過にしかたのくやしさを呼おこして此人眼の前に死すとも涙もそゝがじの決心など大方うせたればたゞなつかしくむつまじき友として過さんこそ願はしけれ、かく思ひ來たりて此人を見れば、菩薩と惡魔をうらおもてにして、こゝに誠のみほとけを拜めるやうの心地いひしらずうれし、日くれに近く、暇ごひして歸らんとするに、さらば又此頃とはせ給へ、われも例の神鳴りのけなき折君がもとを訪はん、もろともに寄席にも

遊ばゞやなどいふ、下座敷に下りくれば、樋口様は歸らせ給ふか我れも逢ひ參らせたかりしをとて父君出でおはします、又とはせ給へ、ゆる〳〵御物語りせばやとて、これもかれもなつかしげなるがうれしく、暇をこひて出るこゝろ夢のやうなり、家に歸りて直に入浴、道にて雨にあふ、此よは大雨也。

四日　空はれたり。新聞の上にて見る處、台灣にて戰爭はじまりたるとおぼしく、芳太郎など只今初陣の折と思はる。

五日　の午後馬場君來訪、二日の夜には秋骨、禿木をさそひて訪ひしに、君は留守にゐはしけりとて少し物むづかしげ也、あの日眉山御もとを訪ひしよしといふに、いかにして夫れを知らせ給ふやと聞けば、三日の午後より川上は我がもとを訪ひて、酒竹禿木など呼集め、四人にて箕輪に藤村を訪ひしが、同人あらねば口をしく、これより歸らんも興味索然たればとて、今戸のわたしをこえて向島に三味をとはんと成しが衆議又かはりて言問の某亭に一酌を催し、歸路雨にあうてはふ〳〵に歸りしといふ、そは御さかん成しとて笑ふ、今宵は馬場君さのみもかたらでかへる。

六日　朝來平田君來訪、乙羽庵の妻も來らる、これは和歌の直しをこはんとてなり、

午後より野々宮、安井君および木村きん子とて、高等師はんの同勤の人なるよし、和歌および文章など學ばゞやとて來る、此日の來客西村の禮助、久保木の秀太郎、おかうどのなど合せては十人斗なり。

七日　午後西村君來訪、少し物語るほどに馬場、平田、川上の三君來る、紅葉の男ごゝろ、および心のやみ、珍本全集などかさる、日沒少し前に人々歸宅。

八日

九日　今日は小石川の會日なり、午前の中石黑とら子の稽古および野々宮が古今の講義終りて、午後よりゆく、此日田邊たつ子ぬし來會、田中ぬしは頭痛はげしきよしにて、席半ばにしてかへる、歸宅せしはいまだ日の高きうち成し。此よ馬場君來訪。

十日　小說著作に從事す、全編十五回七十五枚斗のものつくらんとす、いまだ筆おもふまゝに動かで、いたづらに母君の叱責をのみうけぬ、午後西村君來訪、少しかたりてかへる。

十一日　事なし。午後馬場君來訪、日沒までかたる。

十二日　父君靈前に田舍まん頭調じて奉る、國子一兩日來病氣にて食事ちすゝみが

たし、されどもきびしき事にはあらぬ氣なれば、今宵母君を伴ひて若竹に小住の幾太夫きゝにゆく、留守中馬場君來訪ありしよし、國子ねぶり居てしらざりし事はあすわかる。

十三日　午後馬場君來訪、あからずして歸る。野々宮、安井、木村の三君稽古に來る。

十四日

十五日　朝來雨ふる。小石川けいこにいたれば、田中ぬし湯治場などにや行給ひつる今日は休みのよし、午前田邊君來る、我れに約束ありてそゝを僞にせじと斗の來會なるよし、直にかへる、午後大雨車軸をながすが如し、おどろ〳〵しく神なりはたゝめきて人々歸りわづらふ、二十人斗寄集ひてとらんぷの遊びをす、家にかへりしは日沒雨やみてよき日和に成ぬ。

十六日　家の稽古日也、石黑虎子來る、ついで野々宮君古今集の講義聞に來る、終に遊ぶ、歸宅せしは四時ごろ、やがて大雨盆をかへすやうに降出ぬ、さぞ歸路にしてなやみけんとわびし、家に一錢のたくはへなき上、差配がもとへおさむべき家ちん

もあとの月より延し置たる、それこれ三四の金なくてはかなはず、伊せやへはしらんか、ひとのもとへかりに行かんかなどいふ、さらばせんなし、西村をたのみてんとて日沒より家を出づ、かしこにて三圓かり來る、歸れば孤蝶、眉山の兩君來訪、もの語しきりにして十二時まであり。

水のうへ日記（二十八年十月）

やう〳〵世に名をしられ初て、めづらし氣にかしましうもてはやさるゝ、うれしなどいはんはいかにぞや、これも唯めの前のけぶりなるべく、きのふの我れと何事のちがひかあらん、小説かく、文つくる、たゞこれ七つの子供の昔しよりおもひ置つる事のそのかたはしをもらせるのみ、などことゞ〳〵敗はいひはやすらん、今の我みのかゝる名得つるが如く、やがて秋かぜたゝんほどは、たちまち野末にみかへるものなかるべき運命、あやしうも心ぼそうもある事かな、しばし書とゞめてのちの寐覺のこゝろやりにせばや。

七日の夜、母も妹も本郷のとほりに物かふとて出行て、一人燈を守りてものよむ折ふし如來ぬし來訪、例の人とて、我が取次ぎに出たるに、一葉君はうちにやといふ、あがり給へとて燈火のもとにさしむかひたれば、はじめてさなりけりとや思ひたらんされど驚きたるけもなく物がたり居る、をかしき人なり、此まへ來たりしは秋風いと身に寒き朝成しかども、白地と黑のかすもとのゆかたをかさねて着て居たり、今日は

二夕子の袷出來てきたれど、素肌の上にはをりて、こと〳〵敗はかまはきたる姿もをかしく、草履ばきなどいよ〳〵出ていよ〳〵をかし、母も妹も歸りて後、夜ふくるまでかたる、そのおさなき時の物がたりなどし出るに、かげなる母も妹も堪へずやはゝと笑ふ聲の聞ゆ、妻めとらまほしきにしかるべしとおもふもあらば媒を給はれ、何も御寛の如くの男外に何の心あるにもあらず、むつかしき事などかけてもいふまじければとて、家のさまなど打あけかたる、これより上田敏君とひて、桐一葉の事評させんとす、瀧口入道は大學生某の作なるに、それが批難を歴史小説といへる題かり來て坪内が書立つべければ、大學よりは上田を呼おこしてこれに當らせばやとなり、横やりは依田の學海翁やとひ入るべし、いやとても應とても今宵は上田を說きつけ來べしと、意氣のさかんなるもをかしく、ともによみうりの紙上にてたゝかはせんの目ろみなるべし、九時すぐるころ歸る、雨降出しかばかさ持たせてやる、新坂のやみに狸出づべしなど笑へば、それは同やくよとてゆく、大風すぎての後に似たり、更けていよいよ雨ふる。

八日も朝より雨やまず。あすは萩のやが月次會なればと道はわるけれど日くれが

た風呂やにゆく、歸りてみれば、如來樣よりとて傘かへし來たりし車夫に文を添へて おこしぬ、夕べはあまりおそかりしかば、上田は家にあらで空しく蟬のもぬけをつかみぬ、今宵ふたゝびおもむく道すがら、これをばかへし參らする、一寸立よりてとおもへど、上田の事はてなば、谷中に大野洒竹が庵たゝくべき用あればたゞ文にて、今朝依田學海に逢ひたれば、君がにごり江上々の作とたゝへて、是非一度御めにかゝりたしといひき、御序に訪ひ給へ、淡泊の老人中々おもしろき人など書そへて、中には月よう附ろくの事もあり、終りには、例の妻の事よろしく〳〵、心から平身してなど書たり、いつに似合ずまじめなるを集ひて笑ふ。

九日　は空はれて、午前より中島の會にゆく、例によつて例の如くをかしき事もなし伊東夏子の大西祝が傳言いひたる、是非あひたしとてうわさいひ暮らすなど聞くに、世は飛鳥川とうめかれぬ。此夜中町に紙かひにゆく、あらざりしほどに安井てつ子岩手よりもらひたるのなりとて大いなる林檎もてきにける。それも女子師はん校の方へ田舍よりとゞきたるを直に我家にもて來しのよし、常は口重に世辭など數々なき人なれど、心にしみてうれしとおもふ事のあればかく取わきての事などもすめり、可愛

き人のこゝろよと母も妹もひとしくいふ。此夜文二通したゝめき、一つは如來ぬし、一つは馬場君、前のはきのふの返事、附ろくの事などいひて、つぎなるは久しう音づれのなきにいかゞ暮らすとおぼつかなくてなり。夜いたく更ぬれば、その外ことなしに寐にけり。

十日　は例のごとく例の通りにて過ぎゝ。たゞ大島みどり子の歌よみてくれとてたのみに來たると、安井、野々宮そのほかの稽古に來し斗、ことなしに終る。郵便三通、田中二通、本願寺より一つ。

十一日　も晴れなり。

十五日より三十一日までの間に、如來ぬしの我家をとふ事四度、用ありて來し事もあり、あらずして來し事もあり。にごり江の許各雜誌にかしがましとて、まだ見ざるをば郵便にておこしつ、妻の事たのみおかれつれば、寫眞たまへといひやりしに、やがて寫してこれをも送りぬ、木强の男とふと見ゆめれど、物なるゝまゝにおさな子のやうなる所うつくし。

川上眉山ぬしも、此ほど打しざりて訪ひ給ふ、此月にいりてより四五度は來給ふめ

り、一夜は關君と打つれて來つ、その次の夜の事なり、たがひに期せずして一つに成し事あり、我れにこゝろなければ何ともおもひたらねど、二人の面やうのをかしさ、物がたりのしどなさ、おもひがけず落あひしを耻あへるさま、男も猶ものつゝみはなす成けりとをかしかりき。

いで孤蝶ぬしのたより少ししるしとゞめばや、これも此月にいりてより文三通、長きは卷紙六枚をかさねて二枚切手の大封じなり、一たびは名所古跡の寫眞二葉、紫式部源氏の間などいへるをおぐりこし給へり、例のこまかにつゝみなき言の葉、わが戀人にやるやうの事かきてあるもをかしく、誠ある人なれば、おのづからはげますやうのことの葉などもみゆめり、こゝろうつくしき人かな。

平田ぬしには此月たえて逢はず、文こまゞとおこしつれど、孤蝶ぬしとの間に物うたがひを入れて、少しねたまし氣などの事書てありしもうるさければ、返しはやらず成りにき、みづから二度ほど訪ひ來しかど、國子の取はからひて門よりかへしぬ、才子なれども憎き氣のあるぞ口をしき。

秋骨も幾度わがもとをとひけん、大方土曜日の夜ごとには訪ひ來る、來ればやがて

十一時すぎずして歸りし事なし、母も國子も厭ふは此人なれどいかゞはせん、ある夜川上君と共に來て物がたりのうちにふるひ出でぬる時などの恐ろしかりし事よ、我れはいかにするとも此家の立はなれがたきかな、いかにせん、いかにせんとて身をもみぬ、みづからこは怪し、怪しといひつゝあと先見廻しつゝ打ふるふに、川上ぬしもただあきれにあきれて、からく伴ひ出て送りかへしぬ、其夜なき寐入りにふしたりとてあくる朝まだきに文おこしぬ、うちにさまゞ〳〵ありけれど、猶親しきものにせさせ給はらずや、いかにも中空に取あつかひ給ふ事のうらめしさなど書つらねありき。あなうたての哲學者よな。

優なるは上田君ぞかし、これも此頃打しきりてとひ來る、されども此人のは一景色ことなり、萬に學問のにほひある、洒落のけはひなき人なれども、青年の學生なればいとよしかし、桐一葉の評かく事をうがりてかにかくといひわけなどいひ居るもたかぶらずしてなつかしう見えぬ、されども心はいかならん、かく言ひ、かく見せて、世にたゝんの人なりや知りがたし、あなどりがたうもあるかな。

おそろしき世の波かせにこれより我身のたゞよはんなれや、おもふもかなしきはやう〳〵をさな子のさかいをはなれて爭ひしげき世に交る成けり、きのふは何がしの雜誌にかく書れぬ、今日は此大家のしか〳〵評せりなど、唯春の花の榮える名斗うる如くみゆる物から、淺ましきは其そこにひそめる所のさま〳〵成けり、わか松、小金井、花圃の三女史が先んずるあれども、おくれて出たる此人をもて女流の一といふをはゞからず、たゝへても猶たゝへつべきは此人が才筆などいふもあり、紫清さりてことし幾百年、とつてかはるべきはそれ君ぞなどいふもあり、あるはとつ國の女文豪がおさなだちに比べ、今世に名高き秀才の際にならべぬ、何事ぞをとゞしの此ころは大音寺前に一文ぐわしならべて乞食を相手に朝夕を暮しつる身也、學は誰れか傳へし文をば又いかにして學ぶべき、草端の一螢よしや一時の光りをはなつとも、空しき名のみ、仇なるこゑのみ、我れに比べて學才のきはなみ〳〵ならざりしさがのやが末のはかなき事、山田の美妙が數奇の體、あはれあはれ安き世の好みに投じてこの爭ひに立こじる身、いか斗かは淺ましからざらん、されども如何はせん、舟は流れの上にのりぬ、かくれ岩にくだけざらんほどは引もどす事かたかるべきか。

極みなき大海原に出にけり

やらばや小舟波のまに〳〵

十一月二日　の夜平田ぬし來訪、國子のはからひて門よりかへしぬ、引ちがへて川上ぬし來訪、大かたはもろ共に來つるなめれど、先君いりてみよなどいひしなるべし、あらずといひしかば、さらば我れかはりて音なはん、我れゆかばかならずありといふべしなどほこりて訪ひ寄しけしきおのづから分明なるもをかしく、國子は同じくるすなるよしをいひぬ、しゐ佗て歸りぬるさまもおこがましく、唯ひたすらにほゝゑまるゝよ。

三日　今日は天長の佳節なるものを、朝來の雨車じくを流すやうなり、神戸の小林あい子より松だけ一籠おくりこしたるを、いひにたきて集りてたうべぬ、稻葉のおこうどの參られたるに、同じく出しなどす。午後より平田、戸川の兩人又來る、あらずといひたるに、然れば少し座敷をだに貸させ給へ、衣少しほしたければと切にこふ、上にあげて國子と母とあへしらひ居るに、猶我れのかくろへ居る事もやとうたがひて小用たすとて廊下あたりなどふみ渡るいとをかし、三十分斗して歸りぬ。

其夜更けて、今はもはや門のとさゝばやなどいふ折しも、又平田と戸川と打つれて來にけり、今まで川上君のもとに遊びてその歸るさなるべし、いかにも逢はざらん事の氣の毒なれば、ありといはせて對面しつ、平田ぬしのみやげ物などかひ來つるもをかしく、さま〴〵の物語して遲く歸りぬ、平田ぬしはよみうりの紙上に我が評かゝばやなどいひき。

五日　の夜關君來訪、落合直文のもとへゆくのなれども門を過がてに立寄りしなりといふ、物がたるほどに枝葉のしきりに添ひて一時間を過ぬ、二時間を過ぬ、今行かんさらば行かんといひつゝかたる、車夫は待くたびれて、玄關に高いびきして打臥しゝもをかしく、今はおくれにけり今宵は落合がり訪ふ事かなふまじきかといふに、さらば其處を訪ふを後日の事にして、今宵は我家に遊び給へといへば、今までに成ぬる物を今かへるとも五十歩と百歩の違ひのみ、さらば今少し置給へとて身を落つけてかたる、月給うけ取し以來一日も待合の二階に遊ばぬ事なく、今日までには殘りなくつかひ盡して今はのう中五厘錢一つのみ、煙草かふべきしろもなしとあれば、卷たばこかひてやる、語る事四時間、暇ごひして歸る時にはふし待の月高く冴えて一段の光景みにしむ斗なりき。人々の原稿などみせて、平田といふ人君がにごり江の評かくよしいひこしたりとかたる。

六日　午後山下の二郎來訪、關ぬしよりはがき來る、ゆふべの佗也。

七日　早朝平田ぬし來訪、くに子の留守なるよしをいひしに、いな對面得まほしきといふにもあらず、文藝くらぶ九編かし給へとてにごり江のくだりを持てゆく、よみうりに評かゝん爲なるべし。

水のうへ（二十九年一月）

十二月の三十日に馬場ぬし近江より歸り來給ひぬ、年末年始の休暇を給はりてなり、家にわらんずぬき給ふよりはやくわがもと訪ひより給ひしのよし、國子に大津ゑの藤娘かけるあふぎ、家へは小田原のかまぼこなどみやげにと給はす、逢ひ見ざりし事四月ばかりなれば、かたみに語りあふ事おほし、夜ふけてかへる、これより川上君とはゞやとなりけり。

これをはじめにして七日の朝歸郷までに、一日も我が家を訪ひ給はぬ事なかりき、ある時は三人五人の友うちつれて來る事もあり、ある時はたゞ一人しておはすこともあり、いとおもしろくにぎやかにのみ打過ぎぬ。

六日に文學會の新年宴會などいふ事ありき、われと三宅ぬしには別席しつらへおきぬればかならず出席あらまほしきよし星野ぬしよりいひこされたれど、さる所にはしたなう立出づべきにはたあらねば斷りいひやりて我れはえ行かざりしに、たつ子ぬしにも同じこと斷り成しよし、こゝの間に心をかしからぬ事あれば馬場ぬしもえ行かじなどいひ居られしものから、さもいなみあへで出席有けるよし、有樣いか成けん。

こぞの秋かり初に物しつるにごり江のうわさ世にかしましうもてはやされて、かつは汗あゆるまで評論などのかしましき事よ、十三夜もめづらしげにいひさわぎて女流中ならぶ物なしなどあやしき月旦の聞えわたれるこゝろくるしくも有るかな、しばしばおもふて骨さむく肉ふるはるゝ夜半もありけり、かゝるをこそはうき世のさまといふべかりけれ、かく人々のいひさわぐ何かはまことのほめこと葉なるべき、たゞ女義太夫に三味の音色はえも聞わけで心をくるはするやうのはかなき人々が一時のすさびに取はやす成るらし　されども其聲あひ集まりては友のねたみ、師のいきどほりにくしみ、恨みなどの限りもなく出來つるいとあさましう情なくも有かな、虛名は一時にして消えぬべし、一たび人のこゝろに抱かれたるうらみの行水の如く流れさらんかそもはかりがたし、われはいちじるしくうき世の波といふものを見そめぬ、しかもこれにのりたるをいかにして引もどさるべき、あさましのさま少しかゝばや。

日ごと訪ふ人は花の如く蝶の如きうつくしの人々なり、大島文學士が奥がたのやさがたなる、大はしとき子の被布すがたわか〳〵しき、今は江木が寫眞師の妻なれど關え

つ子の裾もやうでたち、同じく藤子が薄色りんずの中振袖、それよりは花やかなる江間のよし子が秋の七草そめ出したる振袖に緋むくを重ねしかわいのさまもよく、師はん校の兩教授がねづみとひわの三まい着、取々にいやなるもなし、一昨年の春は大音寺前に一文ぐわし賣りて親せき近よらず故舊音なふ物なく、來る客とては惡處のかすに舌つゞみ打つ人々成りし、およそ此世の下ざまとてかゝるが如きは多からじ、身はすて物によるべなきさま成けるを、今日の我身の成のぼりしはたゞうき雲の根なくしてその中空にたゞよへるが如し、相あつまる人々この世に其名きこえわたれる紳士、紳商、學士社會のあがれる際などならぬはなし、夜更け人定まりて靜におもへば我れはむかしの我にして、家はむかしの家なるものを、そも〳〵何をたねとしてかうき草のうきしづみにより人のおもむけ異なる覽、たはやすきものはひとの世にして、あなどるまじきも此人のよ成り、其こゝの大ひなる時は千里にひゞき、ひくきときは隣だも猶しらざるが如し。

國民のとも春季附ろく書つるは江見水蔭、ほし野天知、後藤宙外、泉鏡花および我

れの五人なりき、早くより人々の目ぞゝぎ耳引たてゝこれこそ此年はじめの花と待わたりけるなれば、世に出るよりやがて沸出るごとき評論のかしましさよ、さるは新聞に雜誌にいさゝか文學の緣あるは先をあらそひてかゝげざるもなし、一月の末には大かたそれも定まりぬ、あやしうこれも我がかちに歸して讀書社會の評判わるゝが如しとさへ沙汰せられぬ、評家の大斗と人ゆるすなる内田不知庵の口を極めてほめつる事よ、皮肉家の正太夫がめざまし草の初号に書きたるには道成寺に見たてゝ白拍子一葉同宿水蔭坊、天知坊、何がしくれがしと數へぬ、へつらふ物は萬歳〳〵とゝなへ、そねむ人は面を背けて我れをみること仇の如かり。

にごり江よりつゞきて十三夜、わかれ道、さしたる事なきをばかく取沙汰しぬれば我れはたゞ淺ましうて物だにいひがたかり、此二十四五年がほどより打たえ寐ぶりたるやうなる文界に妖艶の花を咲かしめて春風一時に來たるが如き全盛の舞臺にしかへしたるは君が一枝の力よなど筆にするものあり、口にする者あり、いかなる人ぞやおもかげ見たしなどつてを求めて訪ひよるも多く、人してものなど送りこすも有けり、雜誌業などする人々は先をあらそひて書きくれよの頼み引もきらず、夜にまぎれて

我が書つる門標ぬすみて逃ぐるもあり、雑誌社には我が書たる原稿紙一枚もとゝめずとぞいふなる、そは何がしくれがしの學生こぞりて貰ひにくる成りとか、閨秀小説のうれつるは前代未聞にしてはやくに三萬をうり盡し、再はんをさへ出すにいたれり、はじめ大坂へばかり七百の着荷有しに一日にしてうれ切れたれば再び五百を送りつるそれすら三日はたもたざりしよし、このほど大坂の人上野山仁一郎愛讀者の一人なりとて尋ね來つ、かの地における我がうわさ語り聞かす、我黛嵩拜のものども打つどひて歡迎のもうけなすべければ此春はかの地に漫遊たまはらばや、手せまけれども別莊めきたるものもあり、いかでおはしませなどいざなふ、尾崎紅葉、川上眉山、江見水蔭および我れを加へて二枚折の銀屏一つはりませにせまほしく、うらばりは大和にしきにしてこれをは文學屏風と名づけ長く我家の重寶にせまほし、いかで原稿紙一ひら給はらばやなど切にいふ、金子御入用の事などもあらばいつにても遠慮なく申こさせ給へ、いかさまにも調達し參らする心得也などいふ、ひいきの角力に羽をり投ぐる格にやとをかし。

正太夫のもとよりはじめて文の來たりしは一月の八日成し、われは君に緣あるものならねど我が文界の爲君につげ度こと少しあり、わが方に來給ふか我より書にて送らんか、われに癖あり我れより君を訪ふ事を好まず、なほ我事聞かんとならばいかなる人にももらすまじきらかひの詞聞たしと也、何事ともしらねど此皮肉家がことかならずをかしからんとて返しをやる、人にはいふまじく候、つげさせ給はれかし、我れは男ならぬ身なれば御もとをば訪ふ事かたし、文おくり給はらばうれしかるべしといひき。

九日の夜書たる文十日にとゞきぬ、半紙四枚がほどを重ねて原稿かきたるがごと細かに書したり、にごり江の事、わかれ道の事、さまゞくありて、今の世の評者がめくらなる事、文人のやくざなる事、これらがほめそしりにかゝはらず、直往し給へといふ事、并びに世にさまゞくの取沙汰ある事、我れが何がし作家と結婚の約ありといふ事、浪六のもとへ原稿をたづさへ行給ひしときく事などありき、何がし作家とは川上君の事なるべし、君よりは想のひくき何がしとしるしぬ。

一覽の後は其狀かへし給はれ、君よりのもかへしまつるべし、世の人聞きうるさけ

ればと成けり、直に封じてかへしやる、これはめざまし草の出るより二十日も前の事成き、のちに紙上を見ればわれへ對する評言はこのふみの如く細かにはあらでおほらかに此旨をぞ書ぬ。

正太夫はかねても聞けるあやしき男なり、今文豪の名を博して明治の文壇に有數の人なるべけれど、其しわざ、其手だてあやしき事の多くもある哉、しばらく記してのちのさまをまたんとす。

この頃世にあやしき沙汰聞え初ぬ、そは川上眉山と我れとの間に結婚の約なりたりといふうわさ成り、岡やきといふものおびたゞしき世なれば傳へ〳〵て文界の士の知らぬもなしといふ、あるものは傳へて尾崎紅葉仲立なりとさへいふめる、あるもの紅葉にかたりたるに高笑ひしてもしさる事さだまらば我れ媒しやくにはかならず立つべしといひしとか、よみうり新聞新年宴會の席にて高田早苗君は眉山が肩をうちてこの仲立は我れ承らんとたはぶれしとか、こゝにかしこに此沙汰かしましければいつしか我れにも聞えぬるを、あやしきは川上ぬし知らずがほを作り給ふ事なり、この人

の有さまあやしとおもひしは過ぎし八日の夜われに寫眞給はれとてこばむをおして持行し事ありき、母君も國子もひとしういなみしを、さらばしばしかし給へ、男の口よりいひ出つる事つぶされんは心わるしとしひていふに、さらば五日がほどをとてかしつる其寫眞をばさながら返さず、人結婚の事をいひて君は一葉君と其やく有るよし誠にやととへば、そは迷わくの事いひふらすものかなとて打笑ひ居るよし、八日の夜のさまはほとんど物くるはしきやうに眼をいからし面を赤めて、なに故我れにはゆるし給はぬにや、我れをばさまで仇なるものとおぼし召か、此しやしん博文館より貰はゞ事はあるまじけれどあやしう立つ名の苦しければこゝに參りてかくいふを、猶君にはうとみ給ふにや、男子一たびいひ出たる事このまゝにしてえやはやむべきとて、つく息のすさまじかりし事、母君かげに聞て胸をば冷し給ひしよし、我れに妻の中立して給へや、此十五日を限りにして其返事聞度しいかで〳〵などせまられたる事ありしが、それこれを思ひ合せてあやしき事一つならず、文界の表面にこの頃あやしき雲氣のみゆるは何ものゝ下にひそめるならん、眉山排斥の聲やう〳〵高う成りぬ。

正太夫いはく君はおそらく文界の內情などしり給ふまじければ瑣細の事とおぼしめ

さんも斗られねど、我れの考へたる處にてはなほざりならぬ大事とおもへり、よろしく君がもとをとふやくざ文人どもを追ひ拂ひ給へ、かれ等は君が爲の油蟲なり、拂ひ給はずは一日より一日と其害を增さんのみといひき。

かどを訪ふ者日一日と多し、毎日の岡野正味、天涯茫々生など不可思儀の人々來る、茫々生はうき世に友といふ者なき人世間は目して人間の外におけりとおぼし、此人とひ來て二葉亭四迷に我れを引あはさんといふ、半日がほどをかたりき。

野々宮きく子關如來との緣やぶれて一度我れを恨めりき、しばしにしてうたがひの雲はれたれど猶我もとを男のとひよるねたましうあるまじき事にいひなす、敎育社會の人々は我れを進めて著作の筆たゝしむるか、もしくは敎育趣味のもの書てよとの忠告さへ聞えぬ、紛たり擾たり、このほどの事雲くらし。

あやしき事また沸出ぬ、府下の豪商松木何がしおのが名をかくして月毎の會計に不足なきほど我がもとに送らんと也、取次ぐは西村の釧之助、同じく小三郎協力して我が家に盡さんとぞいふなる、松木は十萬の財産ある身なるよし、さりとも名の無き金

子たゞにして受けられんや、月毎いかほどを參らせんと問はれしに答へて我が手に書き物なしたる時は我手にして食をはこぶべし、もし能はぬ月ならば助けをもこはん、さらば老親に一日の孝をもかゝざるべければとて、一月の末二十金をもらひぬ。

身をすてつるなれば世の中の事何かはおそろしからん、松木がしむけも、正太夫が素ぶりも半としがほどにはあきらかにしらるべし、かしたしとならば金子もかりん、心づけたしとならば忠告も入るゝべし、我心は石にあらず、一封の書狀、百金のこがねにて轉ばし得べきや。

みづの上（二十九年二月）

雨したゝりの音軒ばに聞えてとまりがらすの聲かしましきにふと文机のもとの夢はさめぬ、今日は二月廿日成きとゆびをるに、大かた物みなうつゝにかへりてわが名わがとしやう〳〵明らかに成ぬ、木よう日なれば人々稽古に來るべき也、春の雪のいみじう降たるなれば道いとわるからんにさぞな侘びあへるならんなどおもひやる。

みたりける夢の中にはおもふ事こゝろのまゝにいひもしつ、おもへることさながら人のしりつるなど嬉しかりしを、さめぬれば又もやうつせみのわれにかへりていふまじき事かたりがたき次第などさま〴〵ぞ有る。

しばし文机に頬づえつきておもへば誠にわれは女成けるものを、何事のおもひありとてそはなすべき事かは。

我に風月のおもひ有やいなやをしらず、塵の世をすてゝ深山にはしらんこゝろあるにもあらず、さるを厭世家とゆびさす人あり、そは何のゆゑならん、はかなき草紙にすみつけて世に出せば當代の秀逸など有ふれたる言の葉をならべて明日はそしらん口の端にうや〳〵しきほめ詞などなあ佗しからずや、かゝる界に身を置きてあけくれに見る人の一人も友といへるもなく、我れをしるもの空しきをおもへば、あやしう一人この世に生れし心地ぞする、我れは女なり、いかにおもへることありともそは世に行ふべき事かあらぬか。

このほどの夜は御入下され候よしの所、病氣にてはやくに打ふし失禮申上候こと御ゆるし下され度、御連れは平田樣と誰々樣成けん御わびよろしう願上候、かねてほせのうらわか草文字小出ぬしより相といき候まゝの文字私いろ〳〵のわからずやを申たのみ參り候まゝ、小出ぬし書やうに困りてこのやうにてよきかと封中のだけしたゝめ持參致され候。

平田ぬし御番地ふとわすれておもひ出るにかたくまことに御手數恐入り候へどもうらわか草の文字御手もとまでさし出し候御渡し願度、私いろ〳〵とりとまらぬ事をいひて頼みしかば字の大きさなど小出ぬし分りかねし由にてこれほどしたゝめつかはされ候、中にて御氣に入しを御取願度、何れ御めもじ萬々、まづは此事のみ、かしこ。

戸川さま
御もとに

夏子

このほどの夜は御入成しよしを病氣にてはやくに打ふし存じ申さず失禮御ゆるし下され度、御一處成し御かた〴〵へよろしう御わび願上候、かねて仰せのうらわか草の文字平田ぬしが御もとふとわすれていかにもおもひ出かね候まゝ御手數おそれ入候へど御手もとまで參らせ候、御とゞけ被下度、私とりとまらぬ頼みやうを致したれば字の大きさなど小出ぬし分りかねし由にて……

斗らざるに高名先生の如き知己を得られ候こと、行かりのかげとほざかるこゝちして
雲ゐの庭にたづぞまふなる

寄春雨懐舊

もえ出る小草をみても春雨の
ふることばかりしのばるゝかな

早春風

梅の花みにこし岡の霜どけに
やすらひおれば春風ぞ吹

みづの上（二十九年五月）

五月二日　の夜禿木秋骨の二子來訪、ものがたることしばしにして今宵は君がもてなしをうけばやとてまうで來つる也、いかなるまうけをかせさせ給ふぞや、これは大かたのにては得うけ引がたしとふたりながら笑ふ、何事ぞと問へば戸川ぬしふところより雜誌とり出でゝ朗讀せんかと平田ぬしをかへりみていふ、こはめざまし草卷の四成き、一昨日の發行にてわが文藝倶樂部に出したるたけくらべの細評あるよし新聞の廣告にみけるがそれならんかしと思ふにあわたゞしうはとふ事もせず打ゑみ居るに、いかでまうけせさせ給へ、この卷よけふ大學の講堂に上田敏氏の持來てこれみよと押開きさしよせられぬ、何ぞ〳〵と手に取りみれば、これ見給へかく〳〵しか〳〵の評鷗外、露伴の手に成て、當時の妙作これにとゞめをさしぬ、うれしさは胸にみちて物いはんひまもなく、これが朗讀大學の講堂にて高らかにはじめぬ、さても猶うれしさのやる方なきに學校を出るより早くはせて發兌の書林に走り、一冊あがなふより早く禿木が下宿にまろび入り君々これ見たまへと投つけしに、取りて一目みるよりはやく

平田は顏をも得あげず涙にかきくれぬ、さらばとく見せて此よろこびをものべ、ねたみをも聞えてんとて斯く二人相伴ひてはまうで來つる也、いかでよみ給ひてよ、我れやよまん、平田やと、詞せはしく喜びおもてにあふれていふ、今文だんの神よといふ鷗外が言葉としてわれはたとへ世の人に一葉崇拜のあざけりを受けんまでも此人にまことの詩人といふ名を送る事を惜しまざるべしといひ、作中の文字五六字づゝ今の世の評家作家に伎倆上達の靈符として呑ませたきものといへるあたり、我々文士の身として一度うけなば死すとも憾なかるまじき事ぞや、君が喜びいか斗ぞとうらやまる、二人はたゞ狂せるやうに喜びてかへられき。

此評よいたる所の新聞雜誌にかしましうもてさわがれぬ、日本新聞などにはたゞ一行よみては驚き歎じ二行よみては打うめきぬとか有けるの由國子のよそより聞來ていとあさましきまで立ぬる評かなと喜びながら悲しがる、そは槿花の一日の榮えを歎けばなるべし、世の中をしなべて文學にはしりぬる頃とて假初の一文一章遠國他郷までもひゞきわたり聞えゆきて、立つ名さま〳〵、さてはよからぬ取沙汰もやう〳〵に增り來たりぬ、此たけくらべ書つると同じ号に我れと川上ぬしとの間のことあやしげに

書きなしある雜報有き、千葉あたりより來たりたる投書なりとか、これをばやがてよき材にして人ねたみもし憎くみもす、ことなる事なき身どちにはさして何事のなげかはしさもおぼえねど、そも〳〵のはじめよりうき世にけがれの名を取らじ、世の人なみにはあるまじのおもひなりしを、かくよからぬ評など立出くるやましき事ならねど、我が不德のする所かとものなげかしう思はれき。

我れを訪ふ人十人に九人まではたゞ女子なりといふを喜びてもの珍らしさに集ふ成けり、さればこそことなる事なき反古紙作り出ても今清少よむらさきよとはやし立る誠は心なしのいかなる底意ありてともしらず、我れをたゞ女子と斗見るよりのすさびされば其評のとり所なきこと、疵あれども見えずよき所ありともいひ顯すことなく、たゞ一葉はうまし、上手なり、餘の女どもは更也、男も大かたはかうべを下ぐべきの技倆なり、たゞうまし、上手なりといふ斗その外にはいふ詞なきか、いふべき疵を見出さぬか、いとあやしき事ども也。

二十四日　正太夫はじめて我家を訪ふ、ものがたる事多かり。

二十五日　田中みの子を飯田町にとひ、歸路半井君を尋ぬ、原稿製造中なるよしにて三崎町のかたにをられつれば逢はずして歸る。

二十七日　の夕より平田、戸川の二人來る、物がたり多し。

二十八日　午前のうち田邊たつ子ぬしを番町にとふ、例によつて例の如き物がたりあり、十二時過るころ歸宅。今日は木ようなれば野々宮君來る、安井、木村の兩君は地久節の會ありて得も參られず、安井君宅より昇給いはひの赤の飯おくられき。

新文だんの烏海嵩香遊びに來たりしにはあらざめれど長くかたる、戸川の殘花われに嫁入の取もちすとて來る、先きは何がしの博士なりといひくる、正太夫門まで來たりて人氣のあるに又こそとて歸る。

二十九日　横山源之助來訪、はなす事長し、うちに正太夫來る、ひそかに通して坐敷の次の間に誘ふ、源之助はやがて歸る。

わが近作われからの評めざましく草三人冗語の間に大いに見解を異にせる由、これにつきては正太夫の責任を明らかに一論文をしたゝめて世に出さんの目論なれども、わがいふ處尤なるか露伴の思ふ處當れるか一應君が所存を聞てしかして我れは一文を草さんと思ふ也、よつて昨日も二度まで御宅を訪ひ參らせしなれど御來客と見えしか

ば一度は歸りぬ、二度目も同じ事にていと甲斐なかりし、まづ其事とはゞやとて我れからの作意につきてとひをおこす、

一いなりの社前に奥方物おもひを生ずる處あり、あれは親の世よりの事につきて明くれ物をおもひ居り、我れもいつしか母と同じき運命に廻り逢ふ事なからずやとの念かしこにいたらぬ前より有しものならんか。

一は、あの奥がたの性としてさる事常日頃おもひ居るべきにあらず、眞に偶然の出來事として描かれたる物なるべしといふ二つなり。

この二議のうち作者が當時の心は如何成しか、それによりて我が論は成立すべきにこそと正太夫いふ、誠にこれは偶然の出來事なり、しかれども常々おのれも知らぬ心のそこに怪しうひそむ物のありて心細き感は常々有しに相違なかるべく、さて此事は偶然におこりたるなるべしといふ、正太夫そは困りし事かなさては二論の中間に君は居給ふ成けり、前の說は露伴のとく處、あとなるは我が論じつる也、こは難義なる事よとほゝゑむ。

第二問は町子と書生との間に實事の有しやいなやなり、一方の論者はいはく、跡なき

風も騷ぐ世にしのぶが原の蟲の聲、つゆほどの事あらはれて奥樣いとゞうき身に成りぬ、といふ詞あれば彼れは正しく實事ありたる也といふ、されどかたくの論者の見る處にては、こは作者がこと更に讀者をまよはさん爲にたくみの詞をもて遊びしのみ、實事はいまだなかりしものといはざるべからず、といふ爭ひなり、今少し行過たる說なれど、此處二月の猶豫をあたへなば此不義かならず成立すべきなりともいはるべくや、片つかたの實事ありしといふ論者の行過ぎたる證こには、實事有しに相違なきも作者は女なれば此間のこと憚りて態と曖昧にせられたるものなるべしとの說もあり、君が思ひし處はいかなるにかと問はる、誠にしのぶが原の蟲の音に心づき給ひしこそ我が心にてはあれといふに、さては又露伴に我れは負けにきと笑ふ、實事のありしといふ方天下の輿論ともみなすべきさまにて、無實といふは天下我れ一人のみの形なり、これも悉く實なしといふにはあらず、いま二月の猶豫をあたへよしからばまことに不義の成立をみるべしといふの也、此度のめざましには近松が鑓の權三の例を引貫きつれど、あれも古來實否の處たしかならずあるものはなしといひ、あるものはありといひ、此論容易に詮じつめがたきなり、なれども我れをもつていはしむれば、權三おさゐ家

を出てより二月の間を放浪して、さておさゐは良人の手にかゝりてしなばやと願ひ居つるをみるにも、此二月間には必らず不義の成立したりしものとみとむる也、この處を明らかにかゝざる處、作者のずるき手段にて誠は作の功妙なる處ともいふべく、何方より見るもしか見ゆる又よかるべし、かゝる事は作者に問ふ事をせずして我れの見をもつて批評を試むるこそ誠の批評とはいふべきものなれど、我れいまだ力たらずして眼識さやかならぬを憂ひ、かく作家のもとにとふ事とは成ぬ、君としての答へには何方にてもよしとの給ふこそ當れるにはあらめ、などかたる。

君がわれからの評、わがめざましを先として明治評論、青年文、國民の友、太陽、帝國文學などいづれも書出る事となるべし、我れは近くにかの奥方一身を論據として一文を是非公にすべき心なり、さてこれより君が初作よりの物こと〴〵くよみ見ばやと思ふ也、さて作者と作との關係といふもの說かばやと思ふ、あながち我れが大發明者の眞似をするにもあらねどとて笑はる。

雨いよ〳〵降しきりて日やう〳〵暮んとす、わる口の正太夫ぬしに參らする物は無けれど、又笑はれの材料に柳町のすもじにてもさし上ばやと笑へば、いな〳〵何も給

はる事はすまじゆふべさる處にて少し色氣のなきわづらひをしつればとて辭さるゝにさらば參らすまじとて又はなしに移る、一昨日の夜は十一時頃より露伴と君が作を論じて四時に及びて猶其論盡きがたかりし、いつも君の作につきては爭論此間に起る也などかたらる、君は此頃博文館の爲に書簡文とかや文反古のやうのもの作り出給ひしよしそれは誠かととはる、百科全書の十二編として書簡文かきつるは誠なれど、文反古などいひて小說めかしきものには非ずといへば、されども君の書き給へるには相違なきなるべし、さらば面白き事、直ちに歸りて拜見すべし、乙羽庵のいへるに通俗書簡文と題はおきたれど終りのかたは純然たる小說なりと語りたれど、何の彼の男が批評眼とさのみ心にとゞめざりしなれども、君のものし給へるとならば必らず拜見すべきものなり、いと面白かるべしとて笑はるゝに、いな、見給ふは嫌なりゆるし給へと侘るを、をかしげに見やりて、さもあらばあれもはや印刷に附して世に出し給へるなれば詮なし、書店にて賣居る以上は致しかたなかるべしとて又笑ふ。

正太夫としは二十九、瘦せ姿の面やうすご味を帶びて、唯口もとにいひ難き愛敬ありて綿銘仙の縞がらこまかき袷せに木綿がすりの羽織は着たれどうらは定めし甲斐絹なる

ぐくや、聲びくなれどすみとほれるやうの細くすゞしきにて、事理明白にものがたる、かつて浪六がいひつるごとく、かれは毒筆のみならず誠に毒心を包藏せるのなりといひしは實に當れる詞なるべし、世の人さのみはしらざるべけれど、花井お梅が事につきて何がしとかやいへる人より五百金をいすり取りたるは此人の手腕なりとか、其眼の光りの異樣なると、いふことゞくの嘲罵に似たる、優しき口もとより出ることながら、人によりては恐ろしくも思はれぬべき事也、われに癖あり君がもとをとふ事を好まずと書したる一文を送られしは此一月の事成き、斯道熱心の餘りわれを當代の作家中ものがたるにたるものと思ひて諸事を打すて訪ひ寄る義ならば何かこと更に人目をしのびてかくれたるやうの振舞あるべきや、めざまし草のことは誠なるべし、露伴との論も僞りにはあらざらめど猶このほかにひそめる事件のなからずやは、思ひてこゝにいたれば世はやう〳〵おもしろくも成にける哉、この男かたきに取てもいとおもしろし、みかたにつきなば猶さらにをかしかるべく、眉山、禿木が氣骨なきにくらべて一段の上ぞとは見えぬ。

逢へるはたゞの二度なれど、親しみは千年の馴染にも似たり、當時の批評壇をのゝ

しり、新學士のもの知らずを笑ひ、江戸趣味の滅亡をうらみ、其身の面白からぬ事をいひ、かたる事四時間にもわたりぬ、暮ぬればとて歸る、車はかどに待たせ置つる也。

三十一日　榊原家いさ子の朋輩にて中澤ぬひ子といふ人入門、束脩五十錢送らる、これ等とり集めて菊地ぬしがもとへ此月よりかへし初むべき金子持參母君立出らる。

六月一日　平田禿木めざまし草持參、わが評見よとてかし與へらる、正太夫の我がものとを訪ひ寄し事などさも思ひよらぬ事なれば知らず顏に語り居るいとをかし。評は此人の作としていたく劣りたるもの也、たけくらべに及ばずにごり江に及ばず、わかれ道にも十三夜にもしかぬ作なり、此作者の作やうやくみだれんとする傾きありと正太夫のいひしは別れ道の時成しが、その詞をして誠たらしむるは、いかにも作者の爲かなしむべき事よとかけり、をかしきは、ひぬきと名のりて辯護の勞をとる人附添へる事なり、女人なればと今まではひかへつれど用字用語今少し心つけられよと一論客のいへるに對し、こは聞ずてならぬ事也、わが一葉は女なれども身錢を遣はで高まんの詞をならふる男どもが首位は引ぬきすつる力あるものなり、惡き事あらばいかにも

いひ給へ、御遠慮御無用女あしらひは嬉しからずとたけり立つ人あり、六頁にわたりてその論何方ともつかずに終りぬ。

いとかしらの痛き日成しかばねぶたげに物いひ居るいかゞ憂からざらん、平田は此本さしおきたるまゝかへる。

二日　早朝前田曙山君來る、春陽堂の使ひになり、著作のあら筋出來たらば畵樣の注文ありたしとのたのみなり、今しばしたゝばといひてかへす。

先月のはじめ成し春陽堂みせのものをもて我が作是非にといひおこし、引つゞきわが店のものゝみ著作し給はるやうの契約給はらばいとかたじけなかるべし、左あらずとも是非にといひて、金子などは前金にいか斗も奉るべし、御用候はゞ端書一本つかはされたし、さすればたゞちに御仰せだけの金持參すべしといひき、さもあらばあれこは一時の虛名を書肆の利としておのれの欲をみたさん爲のみ、すでに浪六の例もあり、多くの作家のいたづらに苦るしみて心のまゝならぬものなど世に出すは此一時の榮えにおごりつきて債をこゝに負へばなるべし、我が身はかまへて其事なすまじとおもふに、一編の作趣向つばらに出來ざらんほどは畵樣のこと金子のこと更にいひやら

じとなり、家は中々に貧迫り來てやる方のなければ綿のいもたるもの袷などはみながら伊せやがもとにやりて、からく一二枚の夏物したて出るほどなれども、やがてのくるしみをうけまじとて、母も國子も心をひとつに過す、いとやるかたなし。

午後三木竹二君來訪、醫學士森篤次郎とある名刺もて來しかばいかなる人かとおもひけり、君は森鷗外君が令弟にて小金井きみ子ぬしが兄にておはす、いと口がるにものいひつゞけて重りかならぬ人にてもあるかな、來訪の趣意はめざまし草社中の總代として我れに連合せられん事をといふ迎ひの使ひに來たりしなり。

今まで三人冗語といひて鷗外、露伴、正太夫の三人にて新作の評なし居たりしなれど、更に君を加へて四つ手あみといふ名を付しつ各々名を署して評論さかんにせばやといふ願ひなり、切に入會給はれよといふ。

君がたけくらべには一同たゞ驚歎して口開くもの候はず、露伴などは生れて今日まで我れにはいまだ斯斗の作のなきを恨むといひつ、されば過る日の三人冗語にて詞を極めてほめたゝへしかば早稻田文學などには冷評を與へられぬ、露伴がいへるやうこの作中の文字五六字つゞ今のよの評家作家に技倆上達の靈符として呑ませたきものな

りと書きしに、かれはまぜかへして黒やきにしてふりかけては如何などいひぬ、とまれかくまれ心し給へ、こゝの學士、かしこの博士ども君が事といへば髭おもてのしまりをうしなひて、かゝる文書給ひしかばかゝる人なめり、いないな此詞をもてみれば人がらは斯くこそ有べけれなど、一字一句に解をいれていひさわぎ候ぞなどかたる。

正太夫の參りしよしを聞き候ひぬ、かれには假初にも心ゆるし給ふな、われ〳〵兄弟、幸田露伴などもうわべにはいとよき友のやうに交はり候へど猶隔ておきつゝものをもまふすなれ、いかなること申こんともいひがたきにかまへて〳〵たばかられ給ふなといふ、合評會の日取りきまらば申上候はんかならず參らせ給へといひて、たゞ一人のみこみつゝかへる。

夜に入てより正太夫來訪、けふ三木や參りつる、そのうわさる所にて聞しかば、さして承らんの用もなき折ながら、一應申度ことありて參りつる也といふ。

君がもとをとひ參らせしといふこと我れは誰れにも語らざりき、たゞ森に斗もらしつればやがて篤次郎にかたりつるなめり、我れに紹介狀かきてくれといふたのみありけれども、我れとてもたれが紹介といふ事もなく出つるなれば、それには及び候はじ

とて書かざりしが、今日は定めし參上しつるなるべしと察しぬ、名刺持ちてや參りつる、はなしはいかなる事成しかと問ふ、みな樣がたの打寄り御評遊ばさん折我れにも出て御はなし承れよといふ仰せ成しといへば、それは怪しき事にもあるかな、その相談にてはなかりしものをとかたぶく、して要領を得て歸り候ひしやいかゞといふ。

いかゞありけん私はたゞありがたき由を申ぬ、そのほかにはとて打ゐむに、さもありけんさあるべし、あの男の使ひなればとてひやゝかに打ゐむ。

我れ〳〵が評するを聞きに來給へと申せしこそをかしけれ、罪なき申條にもあるかな、我がうち〳〵の話しを聞しには君に歌少し給はれかし雜誌にのせたければと賴み參らするのなりといひき、しかれば我は其事甚だ心得ず、われ〳〵は一葉君を歌人としていまだみしれるにあらず、唯作家としての人をしれるなるに、殊更の歌を取出さんいとあやしかるべし、同じことならば始より君が作を給はれ、小說是非といひたる方やさしかるべし、うたは三十一文字の責いとかろく出し給ふに世上よりの沙汰もくるしからねば、まづ此事はうなづき給ふべし、この輕らかなるより取入りてやがて作を處望せんといふこゝろそも〳〵人をはかるに似て文士のいさぎよしとせざる處、たゞ打明

んにはしかずとて、我れは今宵かくふりはへて參れる也、かゝるをやがて人にくしみの種にはするなるべし、いととげ多き我れかなと淋しく打ゑむ。我れ等の期する處は君が大成の折をなり、みづからいだかるゝ寶珠をすてゝいたづらの世論に心を迷はし、はかなき理論沙汰などにかたぶき給はゞ、あたらしき人を種なしにもなすべきわざなればそのさかひを脱しさせ參らせたしといふこそ我れ〳〵の志しにてはあれ、さればこと更に合評會への出席あらんあらずにもかゝはらず、鷗外露伴の御もとを訪ひよりてもしかるべきわざなり、何かはこと〴〵敗招き參らするまでもなしとていと冷かなるさまなり。

ものがたりはいつしかめざまし草の事をはなれつ、正太夫が身の上のことかにかくとかたる、我れは今やがてこの文學沙汰立はなれていとあやしき境界にならばやと思ふなり、かゝる馬鹿野郎どもが集合の場處にながくあらんは胸のわるければと聲たかくいひて、あな本性の出けるよと侘しげに笑ふ。

御もとなどに參りて馬鹿野郎呼はりするにてはなかりしを、おさへ難う成てつひ本性の顯はれぬ、驚きやし給ふとぬすむやうに打ながめて、いと聲ひくにいふ。

何かは承るは今はじめてなれど、君が馬鹿野郎の御うわさはやくより傳はりて世上に君が名しるほどの人承らぬはなかるべし、御遠慮なくの給へかしこれを初音にと笑へば、さらば御合點よなとて快く笑ふ。

吉原に入りてかし座敷の風呂番になりとも落つかばやと思ふなり、さらば此上の落處なきひくき處なればやるかたなき憤りももらすにかたく、誰れを相手に何をかいはん、こゝもうき世とあきはてなん時は唯死といふ一物のこれるのみ、其ほかに行く處しなければ中々に心安かるべうや、うき世に人の階級といふものありて上の品の人も下の位にたゝずむ身も同じくうくる普通の苦あり、我れはこゝに圖式をしめさんにこれをかりに縱の苦といふべし、このたての苦はうき世といふ詞のよりて起る處にして上はかしこき御一人より下萬民のたれも受けぬはあらざるべきたゞ一通りのものにてあり、次に横の苦といふものあり、こは階級によりていと異なる物なるべく、うわべをつくろひて人にも尊とまれなどするさかひこそわきてくるしきものにはあるべけれ、上の事はわがしらぬ事いはでもありなん、生中中の段にたゞよひて今日一升の米、一つかみの鹽に事かく事はありとも人にかたりて誠とされがたき痛かゆきやうの境界を思

へば、中々におもひやりある下流の住居ぞうらやまるゝ、一向に落ぶれはてなば心もおのづからひくきになれてみだりにもだえの生すべきにもあらじ、月六圓の收入あれば一人口安らかに送らるゝ場處もあるものを、用もなき長羽織きていとみぐるしきさかひにもたゞよふかな、いかにもしてこゝを放れんの願ひいと切なりといふ。

區役處のうけつけに成なんいとよけれど、かれは昔し正直正太夫とて筆もて口をぬらしゝ男也、淺ましき事して居るよなど打ながめられんこれも癖の種なるべく、郵便局に入りてすりがらすの中に事務とり居るいと好都合とおもへど、これも猶同僚などいふけにくきものあり、我れはすべての前生を打わすれて過さまほしきに、文字に緣なき博奕中間か、かし座敷の下廻りなどこそはと思ひよる也けり、いづ方になさばそもそもよかるべき、此道なほとりもあへず、斯くはたゞよへるぞとて打なげく。

御活計に憂ひなく、君をばたゞ我君とさゝげて撫牛のやうに御蒲團つみ重ねたるが上に据え參らせ、仰せられたしとならば御心のまゝに馬鹿野郎の給ひつゝ、御一生安らかに過し參らせたしといふ人あらば何とかせさせ給ふ、さても猶御心もだえ給ふや、かし座敷の下廻りばくち打など猶御望み遊ばさるべきやといへば、さる人もしあらば

いとよかるべきこと新聞の廣告にでも出し候はんかとて笑ふ。

さりながらさては我れ食客といふものになるなり、食客は嬉しからずといふに、さらばこれも御心にはかなはせ給はずやと笑ふ。

こゝと定めたる宿もなし、日の暮れゆけばもよりの家のたがもとにてもしれるかどをたゝきてはねぐらとし、明けぬればたゞおぼつかなくさまよひありきて、人にはたゞ蛇かつのやうにいみはゞかられつ、みづからは憤りに心もだえて筆とれども優なるものなつかしきなどはかけても書き出らるべきにあらず、たま〳〵書出るは油地獄、て き面、あま蛙のたぐひたゞに敵を設くる斗、文學に一つの光りを加ふるにもたらず。後進を導くの助けとなるにもあらず、いたづらに心のもだえを顯はして、かれ毒筆にくむべしとのみのゝしらる、鷗外はもと富家の子順を追ふて當代に名をなしつるなればさもあるべし、露伴の今少し力を加へなばと思はるゝも我岡目の評なるべくや、たゞ天然にすねたる生れなりぬべきやも計られぬを、例の弱きもの見過しがたき餘りいと物がなしくながめらる。

正太夫かさねて曰く、かくはいへども猶われに自然ののがれ難きものありて、この文

學といふ事いかにしてもなすべきものぞといふたしかなる事定まらば何かは卑怯のにげ足を構ふべき、我れ生れて廿九年、競爭はこの後にあるべしとて笑ふ。

まことにさこそ候へ、さる人にかならず人が文だんにとゞまり給はん事を願ふべきにこそといへば、いな〳〵今我れに此境界をはなるゝなといふ人あらば、そは借金し置し口々の人なるべし、吉原のけし炭に成なんには其金とりがたければと笑ふ。

いと遲く成にけり、又こそ參らめとて立しは十時すぐる程にや有けん、今宵はかたる事いと多かりし。

六月に入りてより人二人門に入りぬ、一人は野々宮ぬしが紹介にて三浦るや子といふ何がし校の教師なり、一人は榊原家の侍女なるべしいさ子より文にてたのみおこしたる伊東せい子といへるなり、これは習字の弟子なれば手本かきてやる。

九日　中島の月次會なれど斷りいひゆかざりし、三宅たつ子ぬしよりたのまれの書簡文この日持參の約成しかどえゆかぬなれば博文館にたのみてかなたよりおくらす。

九日　大橋佐平、新太郎の兩名にて九週年の祝ひ致すべきにつき、十四日午後より

兩國柳橋龜清まで御はこび有りたしとの招待狀來たりしかど、もとより行くべきわざにもあらねば斷りいひやる。

十日　の夜平田ぬし來訪、星野君のあやしき事に邪推をなして、我れと戸川と日ごとの如く君がもとに入りびたり居るやうに小言をいひき、されば戸川は又ふたゝび君がもとを訪はじなどいひ居るとかたる、そは困りし事かな御餘波をしうといへば、いなかくはいへれど何かは訪はであらるべき今やがて參るべしなどいふ、しばしかたるほどにやがて川上ぬしが上に移りつ、御父上うせさせ給へる後君はかの君とひ給へりやといへば、いなまだ吊ひの文をだにやらずいといひわけなき事といへるに、行て參らせ給へかし、唯一人なる父君におくれてさこそは物こゝろ細うおはすすべきになどいひ〳〵、君もしかしこを訪ひ給はゞ我が罪をも侘び給はれ、御悔みの文をだになど思ひつゝ、いつしか時過ぬれば今さらにあやしうてえ奉らず成ぬ、その侘びいひ給ひてよなどいへば、近きにかならず行て訪ひみべし、さて同人ともなひ御もとを訪はゞやなどいひ居るほどに、門に人のあし音聞え初めぬ　お家にかといふ聲はさながら其人なるに、あな川上ぬしにこそとて座をたてば、平田ぬしも同じく席をはなれて迎ふ、おも

ひかけぬ人の座にあれば川上ぬしはあきれたるやうに打まどひにき、おもての色のいと赤く酒氣淺からぬほどゝみえたり、かれこれ共に悔みなどいふに、定まりたるにこそはさても其後のせはしさよ、淋しなどいふ事かけてもなく、日々夜々にさま〳〵の相談事などいとうるさう、負債のぬしよりせめはたり來るなども多く、やる方なき暇なさなりといひてさのみは憂はしげにもなく打笑ふ、逢ひ參らせぬことほと〳〵一年なるべしと川上ぬしいふに、平田君えたへずかゝと打笑ひて何かはさる事あるべきといふに、あはてたるやうのせきたる聲して、いな〳〵逢ひみぬほどゝいひしにはあらず、此やどりに參り初めしより一年斗にや成りぬらん、こぞの此頃よりとおぼゆるなりといふに、誠に前の月の二十六日よりこそおはしまし初めつるなりと我れいへば、さりとはいとよく覺え給へる事よといふ、このほど御目にかゝらざりしは二月斗かと我がいふに、左までにはあらじをといふ〳〵指折かゞなへて左こそ日數をふりにけめ、人一人うせぬるほどの事なればといふ、何とはなしにかたる事いくばく時間をつひやしけん平田ぬしいざ我れは御暇にすべしといふ、川上ぬしも共にと立つを、君にかへるさいと近かるを今三十分も語り給へ、我れは遠ければと物ありげにいはれて、何か

は跡に殘りてものいふ事もなし、たゞもろともにとて出づ、十時半成き。

十一日　早朝三木君來訪、合評會の日どり取きめばやとなり、我れはたしかに入會すともいはざりしを一人ぎめして、露伴も兄も其日を樂しみに待わたるなればかならずともに出席給はれ、まづ幾日にせばや、この十三日か次の土曜日か兩日のうちにて御都合よき日になさばやといふ、我れに出る心なければ、何方にてもといふにさらば十三日と極め申べし、午後一時より千駄木にてといひ〳〵かへる。

いと〳〵侘しうもあるかな、こゝかしこより入會、出席などの事いひ來るにこゝへ斗出る事いかならん、今白ゆるよりも人來たらんとするをいかにせばやと母君國子と相集りてかたる、ともあれ文たゞちに出して斷りいはんにはとて、千駄木森君のもとにあて文したゝむ、何事なしにたゞ臆病ものなれば御はれがましき席の恥かしうてとのみをなりけり。

みづの上（二十九年六月）

六月中えしらぬ人より文の來たりたることは數多し、博文館へあておこしたるもあればたゞちに我家に送られしもあり、靜岡師範校寄宿舍の人にて二人、加藤腸雪、關飄雨、および神奈川の人小原與三郎、房州にて原良造、群馬の田島せい女などいふ人人成き、何れも小說作りて直しをこはんといふもあり、文の上にて友たらんといふもあり、とり〴〵さま〴〵いと多かり、女子の小說つくりたしといふ人のもとにはかならずかならずさる業し給ふ物にあらずと身のつらきをさへ書きつらねておくるゝ人へ

六月十七日　成けり、博文館へあておこしたる狀の一つに樋口勘次郎とて高等師範卒業生の文あり、かねてより敎科書改良の目的をもつて其むね校長まできこえ出つるにそれしかるべしとの贊成をうけ、卒業より此方すでに一年一意この事にのみ身をゆだねつ、ひたすらこれが改善を計れど文才なくしてこと心と伴はず、いたづらにもだえて日を明し暮すとなり、かねてより君が著作の數々を見て、かゝる自在の筆をもちて此おもふ事書き得られなばいか斗世の爲人の爲なるべき、いと聞えにくき事なれど

もし我がこれに盡す心をおぼしくませもし給はゞ一臂の助力も給はれや、この事人してたのみ參らすべきを生中に人傳せばあやまれる聞えのつたはらんも怪しく、かくうちつけにと書かれたり。ところ〴〵の書店より雜誌の事などいひ來たるとは事かはり、か斗敎育に熱心なる人の詞をひくうしていはれたることうけがはざらんも本意なかるべくや、我れになし能ふ事かあらぬかとまれあひ見て事のよしとひきゝたらん後いかにもせばやと、かへししたゝめやる。

いつにも御訪はせ給はるべし、御まのあたりにて聞えんといひやりき、やがて此人よりの文にいとかたじけなき由をいひて、二十三日の火よう日御在宅給はれかし、かならず參上すべければと有き。

この日戸川殘花よりのたのみにて、明治女學校建築慈善市に出すべき扇面たにざく等かきやる。

此頃たえて中島師のもとにもうでず。

十九日　に正太夫夜に入て來にけり、幸田ぬしなどの事につきてものがたりおほく、こゞ著したるてき面の事などかたる、無妻主義にて年月過したる我れの今更妻もちた

し家ほしゝなどはふといひがたけれど、あるべきにさだまりたるものならば有るも又をかしかるべし、人の世の事何もみなことゞくなし終りてさてのゝしるべきはのゝしり嘲るべきは嘲らんいとよかるべきを、限りある身なれば何も垣のぞきにてなどかたる。たけくらべの文體はじめの方と終にいたりてと異なれるは御承知にてかなどとふ、はじめよりかゝる文體にかゝばやといふ考へありてかととはれて、いなさもあらず唯書きよきがまゝにといふ、さらば筆とりてはじめて文體のなるにこそ、誰れも同じ事と笑ふ。

さて今宵來つるは別しての用にもあらず、君は國民の友の夏期附ろく書き給はんの約成し由そは誠かととふ、いなさること此一日二日前に國木田の收二君申參られたれど斷りいひやりてえ書き候はず、いかで聞あやまり給ひけんといへば、そは誠かとよ、明らかなる答辨こそのぞましけれと勢ひこんで言はるゝに、何かは僞りをかまへて人を弄び候はんや、君こそいかなればさ斗物うたがひはなし給ふ、いとあやしき事とこたふるに、さては民友社に僞りありけり、けさのほど彼の社の何某我がもとに來たりて一葉君は相違なく承だくし給ひぬ、かくこそとて御名前しるしたる紙に墨引き

置きぬ、まことは我れ其はじめ彼の社に夏期附ろくの建議を呈しぬ、そはほかならず、我れこと〳〵く匿名にて四種の文體に小說つくり出で、世人をたばかりて驚かさん、その義なれば筆とるべしといひやりき、元來かの社にはいろ〳〵の事故ありてたれもこゝろよく筆とるもののあらず、我れも朧げにては作り出づべきにはたあらねど、我れに此戲れの舞臺をかさんとならば心のまゝに筆とるべしといひつる也、さる處かの社はわれに答へていはく、ごとしの夏期附ろくすでに何がしくれがしに依頼して筆とり初し人さへあるなれば、御おほせのまゝには今更とりかへしがたきことなりといひき、さらば其筆とる人はたれ〳〵かといひしに其名前更にいひこさず、まことは我れにもおもふ事ありしなり、かの社さきに露伴、鷗外、逍遙のもとに人をはせてことしの夏期ふろく是非にといひしを、何かはかしこの爲に筆とるべきとてたれもうけがふ物あらざりしかば、再度その餘のたれかれに依頼しぬ、依頼されたる誰れもかれもことごとく謝絕のみにて我れかゝばやといふ人のなきは我れきかねどもよくしれり、此上は田山花袋などを先きにいはゆる新派の人々筆とることならずやと思はるゝに、我れは死すとも新派の奴等に席はならべじ、かくいはゞ君も世にいふ新派の一人にてお

はせば御心ざわりならんもしらねど、わがいふ新派はさる義にていへるに非ず、何れも人しれず我がもとなどに原稿もて來て直しをこひながらうわべ斗は知らず顔をつくりて同じ文だんに勝敗をあらそふなん、われに損ありてぬす人にかてを與ふるのことわざに同じ、かゝるおもしろからぬ事又あらん物か、されば我れは同じ新派といへるものから君もしうつて出で給ふとならば我れもくつばみを揃へて立出づべしといひつるなり、一人にてもよし正しくかたきとねらふべき人あらば心勇みて戰場には出らるべけれ、自餘の奴原と何かは取組まん、此義をもつて我れは一葉君かき給はゞとこたへしなり、さる處彼はまざ〳〵と僞言つくりいで、此人斗はうたがひなく書き給ふなり、もはやうけがはれて筆とり初られしなればと我れをあざむきぬ、よしおもしろし明日の朝早々斷りいひやりてえ書かざるべし、おもしろく成ぬるかなとてほゝゑむ。その餘も多くかたる事ありて十一時ごろ歸られき。

二十日　の夜更けて半井君來訪、いとめづらしき事よとおもふにあわたゞしげの車にてさへ參られき、唐突に此ほど齋藤正太夫わがもとを訪ひ候ひき、御宅にまかり出たる由といふ、いかにも此ほどよりおはしまし初ぬ、いと氣味わろき御かたたよと笑へ

ば、誠にさにこそ、いと氣味わろき男なればかまへて心ゆるし給ふな、我がもとに來たりて君が身の上さま〳〵に問ひき、此ほどの世の取沙汰はかく〳〵しか〳〵こそいへなどいとおほくつゞけゝれど左のみはわすれておもひも出でられず、知らせ給ふ如く我れはうき世の別物に成りてたゞみかん箱製造にのみ日をおくれば文界の事など更にしり候はず、君がさ斗高名におはすなるをもかれ綠雨より傳へ聞くまでは夢にもしらで過ぎ候ひき、御筆いたくあがり給へるのよしをかれはいひき、彼れは近々君の事を論じたる一文世に公にするのよし、材料もあらばとゝはれたれど、我れは更にしらぬ由をこたへぬ、我れと君との上につきてあやしき關係ありしやにいひしかば、こは心得ぬこと、いかでさる事のあるべき、世人はとまれ君などさへさる事をいふ何なる心ぞやとなぢりしに、いな、君の事はすでに先口なり、こと舊聞に屬す、今更あなぐるべきにも非ずといひき、かくて何を書いで候らんといとおぼつかなげにいふゝ我れしば〳〵一葉君をとふ惡口の種さがしにともやおぼし給ふらん、さりながらおもへば種さがしの爲成しかもしれずとかれはいひき、いと油斷の成がたき男よと心づけらる。

萬朝報にて君の事近々かゝばやと有しかば同じくはとひきゝ參らせてあやまりなき處をかけかしと我れはいひおきぬ　かしこの社にて不似合のこと君が事よく書くのなるよしとて笑ふ。

かたらまほしげの事多げにみえしが何もふくめたるやうにて又もこそと歸る、いとめづらかなる人のまれ〳〵とひ寄りたる、事なからずやはとかたぶかる。

此ほどの夜川上ぬし來訪、高田早苗君の依頼をうけて我れによみうり入社の事申參られしなり、おもふ事あればとて斷りいひしに、使ひがらかと立腹のけしきにみえぬ、さりし日の寫眞持參してかへさる、中味はかはれるやしり候はずといふは燒き增しをさせたるなめり、何にてもよし我が一存だにたゝばとおもふ、此夜いとおもしろからぬけしきにて歸られき。

二十一日　の夜更けて齋藤ぬしより文來る、好ましからぬ事なれどやむを得ねばと前おきして、さる十七日の國民新聞唯今人よりおくられしをみれば、警聽蜚語と題したるが中に正太夫一葉を訪ふといふ項目みえき。

正太夫おもへらく一葉が面の皮をひんむきぬと、一葉おもへらく正太夫はからすの

如き男なりと、右は其會話なるものゝ末に同記者が附記したるものなり、とありて、是れ等のものにむかひて深く辨疏すべきの用ある事を我れは更にみとめ申さず、唯からすの如きしか〳〵を我れの信じざるが如く面の皮しか〳〵をも君の信じ給はざるべしとおもふまでにこれ參らするなり、さらでだに人より快く思はれざる我が事なればこれを種に例の人々は奇貨居くべしともいふ勢ひにて附會し誇張しじゆん飾し、さま〳〵の心々を申　とゝは成るべくくわしうは逢ひ參らせん折にとありけり、こゝの間がらいと物むづかしう成ぬ。

二十三日　午後樋口勘次郎約の如く來る、背ひくゝ色くろく、小ぶとりのせし品格なき人なり、左のみはものがたる事もおほからず、唯大かたに物うちたのみて、まづ手はじめに桃太郎さるかになどの昔しばなしより着手あらまほしゝとて蓮君のものしたる昔しばなしそこばくさしおきて行く、猶打あはせまほしき事あらば御出願ひまつらんも計られずとて、唯これ斗をあづかる。

此人の趣意一あたりおもしろけれど、學校の教科書に小説を用ひんといふやうの計畫あるいさゝか行はれがたき事ならずやとかたぶかる、されどそは我がたのまれのほ

かなれば何をかいはん、おひ〳〵に進みてさる事の相談をもうけなば其非なるよしをいはゞやと思ひき。

正太夫とひ來るやとまつに音もなくて此月くれぬ、こゝかしこの人々より君がもとを正太夫とひたる由などいひ出るあり、さま〴〵あやしき事のあれば今一たび逢ひみて物いはゞやとまつにいとかひなし、毎日祉の横山鎌倉材木座にありて交おこす、民友祉の人と同宿し居るなりとて事ありげの書きぶり成き、返じやらず。

此月くらしのいと侘しう今はやるかたなく成て、春陽堂より金三十金とりよす、人ごゝろのはかなさよ。

三十日野々宮のもとに金子持參して國子と我れとの衣類調達をたのむ、買ひ來たりしは七月四日成き、伊せ崎めいせん一疋價八圓六拾錢。

九日　谷中に田中ぬしをとひしが留守成しほどに正太夫來訪したりし由、いたく煩ひて生死おぼつかなきやう成しかばつひにかくは打おこたりて參らざりきとて、さらでも痩せたる人のいとゞしく骨斗に成つ、人らしき色もなくて來つる由、明日は姉も在宅なるべければと國子のいひしに、あすは參りがたかるべし、又そのうちにこそと

て歸られしとか、あかず口をしと我れはおもふ。

よもとおもひしに、其明けの日夜ふけて來訪されき、げに國子のいひつる如く聲なども〳〵と力なく成りて消えん斗の有さまいたましうみえぬ、何をか病み給ひしととへば、腸の痛みはげしくしてやう〳〵注射に日を送りつ、絶食成しことほと〳〵二週日といふ、まだいと弱げにおはすなるを表に出給ひてよかるべきかとあやぶみて問へば、醫師よりはまだ外出とゞめられて居るなれど、いと怠屈のたへがたければきのふよりかゆの湯少しゆるされたるを喜びて、かくは出ありく成りといふ。

物がたりは國民新聞のこと成き、はじめ正太夫わがもとをたづねつゝ、さて此風説いづこより立出づ覽、さて其風説はいかなるかたちしてかと試みつるなりといふ、我れは秘密といはれしを守りてつひにしたしう出入るたれかれにも物がたり聞えざりしかば、われしるほどの人より此うはさ聞え出づべきにもあらず、正太夫はた鴎外君、露伴ぬしなどよりほかにえもらし聞えぬ事なれば何方よりかは立いで來ん、さは試みの矢射出さばやとて去月の十四五日の頃や國民の松原といふにその事いへるなりといふ、さてそれよりぞ此かたち大きう成て此月はじめの早稲田にても拔すいし

つ、やう〳〵此沙汰ひろまるべしとなり、用なき事をと我れは思へど、此人のこゝろにはかゝるはかな事もをかしきにやあらん。保守派に於てもことにかたくなゝる物にいひ居らるゝ我れの新派中隨一の全盛を極めらるゝ御もと訪ひ寄たるなれば、人はさだめしことやうに感じていかさまにかとりなすらん、いとをかしうと此人はいひ居る。

いとむつかしき問題をもとり出さるれど、又こと〴〵く打とけたる身の上ばなしなども多かり、このわづらひせしにつけて家といふものなからんは侘しかるべしとおもひ成ぬなどいはれき。此夜も更けてかへる。

十一日　横山來訪、正太夫のもとを訪ひたる由かたる、君は綠雨しりたまへる由、かの人には我れはじめて逢へるなれどかねて聞けるには似もやらずさ斗の惡人とはみえざりきなどかたる、午前十時ごろよりしてひる飯ともにしたゝめぬる後二時過るまでありて歸る。

十二日　樋口勘次郎來訪、そのうけもてる小さき子達の寫眞もて來てみせなどす、かたる事もさのみはなき上けふは人々のけい古日なれば其由いひて斷りいふ、しばし

にして歸る。

けふ思ひかけず坂本君來訪、野尻ぬしの不意にとひ來しはあとの月成しがけふも猶とひ來て家にあるほどなり、こはめづらしき人々の會合よと一同喜びてもてなしす。

けい古に來つるは野々宮、三浦の兩君なり、木村ぬしはみごもりつ、安井君は海外留學の出發期迫れるに、語學專門にならはるゝ頃とて此日頃打たえられしなり。

榊原家侍女たちより中元のおくりものおこさる、江間よし子も同じこと。

此ほど博文館の義けん小說中に隨筆やうのもの書けり、いとあわたゞしうてみぐるしかりしが。

十三日　は父君寺參りをかねて本願寺に中元のつゝみ物持參、國子とふたり新らしくつくりたるひとへ物のき初めなり。

此日茶めしたきて久保木の姉君を呼ぶ、折ふし上野君父子、西村も參られき、いづれにも供養の物なればすゝめばやとおもふほど星野ぬし來訪されしかば、上野君父子は歸宅、西村および姉君はたべられき。

星野君いとあらゝかに物うちいひてうちとけぬほどの素振いとあやし、量いとせば

き人ならずや。

十四日　佐藤梅吉中元の禮に來る、折ふしよみうりの記者平田骨仙、川上ぬしの紹介をもつて來訪、女學に關する雜誌の上に小說の筆とられたしとなり。

十五日　早朝兄君來訪、終日遊ぶ、午後より雨降出で歸るにかたければ今宵はこゝに泊る事と成ぬ。半井ぬしも中元の禮に來る、門にてかへられき。

久保木より秀太郎來る、兄君の行てつれられしなり。

人々かへりて夜いたう更ぬ、坐敷の次にかやつりつ、兄君の齒痛にてなやみ給ふまゝ寐せ參らせつ、おのれはかねてたのまれの智德會雜誌の原稿かゝばやと机に打むかふほどかどに車とゞむる人あり、このおびたゞしき雨ふりに大路行人かつふつなく、車は我家より日ほん橋まで四拾錢の高料にても猶行く物のなしといふ今宵、そも〳〵たれかは訪ひよりたると見るに、正太夫ぞ立たりける、おどろきてむかへ入るゝに猶弱げなるおもゝちいたましさまし、いよ〳〵文界の總まくり書かばやと決心しつ、材料こと〴〵く取集めつる、君がもとにも借り參らし度ものありてもう來つるといふ、何事ぞといへばあとの月の毎日新聞をなりけり、早くより山梨のあし澤がもと

に送りやりて我がもとには一枚もとゞめぬなれば其事いひて斷るに、さらばほかにてかゝり申べし、此度はいよ〳〵君が事惡く申候ぞとて笑はるゝに、いかやうとも唯がたじけなき事に思ひ居るべくと笑へば、こも役目なればいかゞはせん、我が御もとを訪ひつること世間一體しらぬものなく成りて、正太夫が觀破したる處の一葉はいかなる物ぞの質問いとおびたゞしくてうるさゝ堪へがたし、きのふ坪內に逢ひしにかれもしか尋ねにき、かく口々の質問に一々こたへんもいと侘し、筆にしてこそと思ふ、わが此度かゝばやといふは此年二月より半としがほどの文界のことをなり、こと〴〵くしるさばめざまし草一冊書うづむともたるまじきながら、さのみはとて五六十頁にとどめんとす、その六分の一は君の事なりとて冷やかに笑ふ。

此日記しるしゝは七月二十日午前十一時ごろよりはじめて二時にいたらぬほどに一冊書終る、正太夫との物がたり猶かゝばやとするほどに幸田露伴三木竹二君と打つれて來られしにえしるさず成ぬる也、十五日のつゞき猶別冊にしたゝむ。